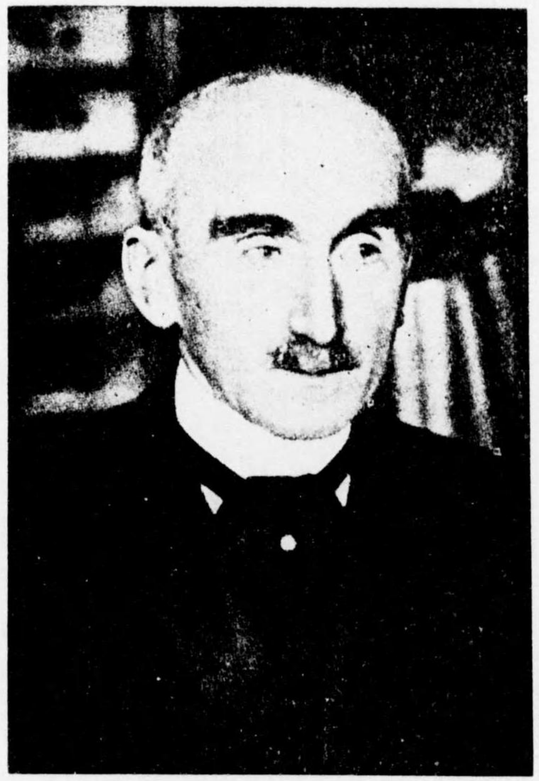
135. 7-B38-4ウ
1200500726312
.7
8
4

始

精神力

ベルグソン著
小林太市郎譯

889
141



アンリ・ベルグソン

135.7
B38
41

ベルグソン著
小林太市郎譯

精神力

全國書房版

989
141

序

思へば二十餘年の昔、ベルグソンの哲學が我國に知られて以來、一時我國の思想界を風靡した。而も今日はベルグソンの名を口にする人だに少ない。併しベルグソンの哲學は爾(しかく)一時の流行として終るべきものではない。彼の思想には更に何人の追隨をも許さざるものがあり、哲學史上新なる實在の見方、考へ方を敎へたのみならず、恐らく彼の哲學は永遠の意義を有するものであらう。私は常に思ふ。哲學が我我の生命の論理的自覺の意義を有するかぎり、それは民族的でなければならぬ。イギリスにはイギリスの哲學があり、ドイツにはドイツの哲學がある。フランスにはフランスの哲學がなければならない。而してベルグソンの哲學は最も能くその特徴の一方面を表すものと云ひ得るであらう。フランスの哲學は一方に於て實證的と云ひ得るであらう。而もフランス哲學の經驗はイギリス哲學のそれではない。固、藝

術的なるフランス人は感覺の内に深い理想を見るのである。直覺によつて思索すると考へられるのである。最も論理的と考へられるデカルトに於て既にかかる特徴を有し、マールブランシュに於ても爾考へられるのみならず、パスカルの「心によつての知」によつてフランス固有の内省的哲學の隅石が置かれたかの様に思はる。それがサンチマン・アンチームとしてメーン・ドゥ・ビランの哲學を構成し、更にベルグソンに至つて純粋持續としてその頂點に達したとも云ひ得るでもあらう。

西洋文化に接して以來、年尚淺き我國の思想界には、未だ我國固有の哲學といふものはない。明治の前半は英米の哲學に支配せられ、その後今日に至るまで全く獨逸哲學の支配の下にあると云つてよい。併し我等日本人が自己自身の内から思索する時、何の國民に學ぶべきであらうか。我等の思想感情は何の國民に最も似通ふ所あるであらうか。私自身は獨逸哲學を基礎とすると共に、メーン・ドゥ・ビランやベルグソンに對して多大の共鳴を感ぜざるを得ない。

昭和七年二月

西田幾多郎

凡例

＊註は、此譯本では、各章毎にその末尾に一括して置いたが、原本ではすべて脚註になつてゐる。

＊圏點を施して置いた語は、原本では、イタリック活字を以つてあらはされてゐるものである。

＊（　）は原本の括弧、〔　〕は原本にないもので、その中の語句が譯者の補足にかかる事を示す。之は稀にしか使はれてゐない。

＊原本に在る句讀點の各種のうち、：、；等をも、譯文に於いて、それぞれ違つた形の點であらはす事は、既に試みられてゐて、その成績にも非常に滿足すべきものがある。しかし本來の日本文としては、さういふ異種の句讀點は未だ一般に用ひられてゐない、で此譯本に於いても使はなかつたのである。ただ疑問符？と、感嘆符！とは、既に充分同化されてゐて、誰が見てもわかるから、保存して置いた。

＊目次は、我邦一般の慣行に隨つて本文の首に載せて置いたが、原本に於いては、佛蘭西書籍の體裁として卷尾に附けられてゐる。

精神力　目次

序　西田幾多郎博士（五）
凡例（七）
ベルグソン著作略年譜（二四五）
精神力に就いて（二五一）
緒言……一三
一　意識と生命……一七
大問題。――演繹、批判及び體系的精神。――事實の諸系列。――意識、記憶、先取。――意識する存在は何々か？――選擇の能力。――覺めた意識と眠りに落ちた意識。――意識と豫見し得ないといふ事と。――自由行爲の機構。――持續の緊張。――生命の進化。――人間。――創造する活動。――歡喜の意義。――道德的生活。――社會的生活。――彼世。

二　心と身……四九
常識の主張。――唯物論の主張。――學說の無能。――腦の活動と心の活動との關に於ける竝行或は均衡の臆說の形而上學的起原。――經驗はどう言ふか?――腦の確からしい役目。――思想と模倣所作。――生活へ向ふ注意。――注意喪失と精神錯亂。――記憶殊に言語記憶の研究が示唆するもの。――追想は何處に保存されてゐるのか?――〔死後に於ける〕心の存續に就いて。

三　「生者の靈像」と「心靈的研究」……八三
「心靈的研究」に對する偏見。――科學から飄た違感。――違感と暗合。――近代科學の本性。――心靈的研究に對して科學の名に於いてされる抗議。――此等の抗議のうちに暗に含まれた形而上學。――精神活動の直接の研究によつて與へられるもの。――意識と物質性。――心靈的研究の將來。

四　夢……一〇九
夢に於ける視覺、聽覺、及びその他の感覺の役目。――記憶の役目。――夢は創造者であるか?――夢に於ける知覺の機構と覺醒時のそれと、類似及び相違。――睡眠の心理學的特徵。――無關心と弛緩。――緊張の狀態。

五　現在の追想と質の再認識……一三五
質の再認識の記述。――先づ或二三の病的狀態から、次に漠然とした或は曖昧な再認識から、それをば區別する諸特徵。――質の再認識のうちに表象の、感情の、若くは意志の障害を認める事によつて生ずる三種の解釋法。――此等の說の批評。――精神障害の一大群に應用を提議する解釋法の原則。――如何にして追想は形成されるか。――現在の追想。――此重複が普通には意識されない理由。――如何にしてそれが意識的となるか。――「生活への注意缺乏」の結果。――跳躍の不足。

精神力

ベルグソン

六　知的努力……一八三

知的努力の知的特徴は何であるか？――意識の平面の種々とそれ等を貫く精神の動き。――記憶の努力の分析、瞬間的想起と苦辛の想起と。――知解の努力の分析、機械的解釋と注意を伴ふ解釋と。――發明の努力の分析、表式、諸寫象、及びこの兩者の相互的嵌合。――努力の諸結果。――此問題の形而上學的連繫。

七　腦と想、哲學的一錯覺……二二三

種々の學說が腦的なものと心的なものとのあひだに認める均衡。――この主張をば若くは觀念論の言葉に若くは實在論の言葉に飜譯し得るか否か？――この主張の觀念論的表現、それは自家撞着を避ける爲に必ず無意識的に實在論へ轉化する。――この主張の實在論的表現、それは觀念論への無意識的推移によつてのみ自家撞着を免れる。――觀念論と實在論との間に於ける精神の反覆的且つ無意識的な動搖。――根本的錯覺を更に强くする補足的諸錯覺。

緒言

種々の叢誌のうちに收められてゐて大半は獲難くなつた研究發表の類を纏めて刊行してはどうかと大分前から奬められてゐたのである。それ等の數篇が、諸外國では、小冊子として別々に飜譯及び印行されてゐる事も吾人に向つて指摘されてゐた、その一つ（形而上學序論）は、佛蘭西語の讀書界を除いて、他の七八箇國語のそれに今日提供されてゐた。また、中には、外國に於いてされた講演であつて佛蘭西では出版されなかつたものもある。そのうち或者の如きは、英語でされたのであるが、吾等の國語ではこれまで遂に發表されなかつた。

で懇切な言葉を繰返して勸說されるままにそれ等の出版を思ひ立つたのである。集は二卷にわけることとした。第一集には心理學上及び哲學上の限定された幾らかの問題に關する諸編が萃められてゐる。すべてこれ等の問題の歸着する處は精神力のそれに在るから、これを採つて書の名としたのである。第二集には方法に關聯する論文類を收載するが、その序論に於いては此方法の起原と並びに諸多の適用に於けるその進展とをば略說したいと思つてゐる。

一

意識と生命

千九百十一年五月二十九日　バアミンガム大學に於いてされたハックスリィ記念講演（一）。

講演をしようとするに當たつてそれが或學者の記念に捧げられるものである時は、その學者に取つて多少でも興味のあつたやうな題目を扱はねばならぬといふ事が窮屈に考へられる場合もあらう。ハックスリィの名を前にして私は何等斯の種の當惑を感じない。昨世紀を通じて英吉利が產んだ屈指の碩學の一人である此大思想家の興味を惹かなかつたやうな問題を發見することこそ寧ろ困難であらう。しかしながら惟ふに意識と、生命と及びこの兩者の關係との、三重の疑問は哲人であつた博物學者の思索に對して殊に力强く必然的に提起されてゐたに違ひない、そして、私自身としても、より以上に重要なものを識らないから、之を撰ぶことにしたのである。

さて、問題を攻究するに際して、私は如何なる哲學體系の力にも餘り期待しない。多くの人を不安にし、苦慮させ、感激させるところのものが常に形而上學者の瞑想に於いて第一の地位を占めてゐるものではないのである。何處から吾等は來るのか？　吾等は何であるのか？　何處へ吾等は行くのか？　玆に生きた疑問がある、體系を經ずにものを考へるならば吾人は直ちに之等に直面するのである。しかし、これ等の疑問と吾々との間に、體系を重んずる哲學は他の諸問題を挿しはさんで來る。そして言ふ、「解決を考究する前に、如何にして之を考究すべきかを知る必要がないか？　吾人の思索の機構を研究しよう、知識に就いて論究しよう、批判を批判しよう、そして道具の價値を確め得た時に、之を使ふことを考へようではないか」と。噫！　さういふ時は決して來ないだらう。何處まで行けるかを知る唯一の方法は、出發して進んで行くことである。若し吾等の求める知識が眞實何かを教へるものであるならば、若しそれが吾等の思想を擴くすべきものならば、それ以前に行はれる思想の機構のあらゆる分析は其處へまで達することの不可能さを吾人に示す事しか出來ないだらう、何故なればそれ〔その知識〕に依つて〔思想の〕擴張が起される前に、吾人は思想を研究してしまつたからである。精神の早熟的な自己反省はその進む勇氣を挫いてしまふ、却つてただ簡單に進んで行けば目的にも近づき、更にその上、指摘された障碍が多くは幻影に過ぎなかつたことに氣付くのである。しかし假に純正哲學者が批判の爲に哲學を、手段の爲に目的を、幻影の爲に獲物を捨てなかつたとしてみよう。人間の起原、本質及び運命の問題の前へ來ると、餘りに屢

屢、その解決が彼の一層重大であると判斷する他の諸問題に從屬すると稱してそれへ移つてしまふ、そして存在一般に就いて、可能なものと實在するものとに關して、時間と空間に就いて、精神性と物質性とに關聯して思辨し、それから、次第次第に意識と生命とへ降つていつて、その本質を突止めようと考へる。しかしその場合これ等の思辨が純粹に抽象的であつて、決して事物自身に卽せず、ただ彼がそれを經驗的に研究しないでそれに就いて自ら拵へた餘りに單純な觀念の上に行はれてゐるのだといふ事に氣付かない者があらうか？　斯のやうに奇異な方法に或種の哲學者が愛着を持つてゐるのは解し難く思へるが、實はそれは彼の自尊心を欣ばし、彼の仕事を容易にし、そして彼に決定的知識の錯覺を與へるといふ三重の德をば具へてゐるのである。それは或極く一般的な理論へ、內容の殆んど空虛な或觀念へ彼を導いて行くから、彼は常に、後から、その觀念の中へ經驗が事物に就いて教へるところのすべてのものを溯つて入れることが出來る。而して後、彼は推理のみの力に依つて經驗に先んじ、より廣汎な概念の內により局限されたことは事實であるが、しかしながらそれのみが形成するに困難であつてしかもそれのみが保存して置いて有用であり、それへは事實を深く鑿つて行くことによつて到達するところの諸概念をば豫め包攝したと主張するのである。他方、抽象的な觀念に就いて幾何學的に推理するより容易なことはないから、彼は苦もなく一の學說を造り上げるが、その各部はよく相關し、その嚴密さは之に眞理の外觀を與へる。しかし此嚴密性は彼が實在の圓轉滑脫とした輪廓に沿ふことをせずに、圖式的な、ぎごちない概念に就いて仕事したと

とから來るに過ぎぬ。もつと謙讓な、事物が據つて以つて依存するかに見える原理等には無關心に眞直に事物そのものに向つて往く哲學の方が遙かに好ましいではないか！　それは最早一擧にして獲られるやうな確實性を求めようとはしないだらう、さういふものはただ一時的でしかあり得ない、それは徐々に進んで行く。順序を踏んで光明へ昇り近づいて行く。次第々々に擴がつてゆく經驗に支へられて次第に高い確からしさへ達しながら、一の極限への如く、決定的に確實な結果へ吾等は近づいて行くのである。

私は、自分としては、そこから重大な諸問題の解決が數學的に演繹され得るといふやうな原理は無いと考へる。尤も疑問を裁斷する決定的な事實といふ如きものも亦、物理學や科學に於けると遠つて、茲には無いと思つてゐる。なほ、經驗の種々の領域のうちに、さまざまな事實の群が見分けられると信ずるのであつて、それらの一々は、欲するところの知識を吾人に與へるものではないけれど、何處に此知識を求むべきかの一の方向を吾等に指示してゐるやうなのである。然るに、一の方向を有するといふことは既にかなりのことである。そしてそれを幾つも持つてゐるといふことに到つては甚だ重要である、といふのは、この幾つかの方向は或一點に於いて出會ふべきものであつて、そして、この一點こそ我等の求めるものに外ならぬからである。約言すれば吾人は、現在に於いてすでに、幾つかの事實の系列を持つてゐる。それらの長さは未だ十分でないが、しかし、假りに之を伸ばして考へることも出來る。で、そのうちの二三を擇つて、それらの示す道へ諸君と共に

進んで行つてみよう、一つ一つ、別としては、それらは單に確からしい結論へ導くにすぎぬが、しかし、皆一緒に、同じ方向を指すならば、非常に多くの確からしさが我らの前に積まれることとなり、茲に、確實な結果へ向つて進んでゐるといふ自信を持ち得るやうになるだらうと思ふ。そして、互に役立たうとする善い意志の共同の努力によつて、無限に此結果へ近づいて行くことが出來るであらう。その時、哲學といふものは最早一の構成、或獨特の思想家の組織的な製作ではなくなつてしまふ。それは、追加を、訂正を、補修を、許しもし、絶えず要求もする。それは實證科學の如く進歩もする。そして、それは亦、協力に依つて次第に形成されて行くであらう。

さて第一の方向として次の途へ先づ進んで行く事としよう。精神と言ふことは、何よりも先きに、意識と言ふことである。しかし、意識とは何であるか。勿論私は斯のやうに具體的な、斯のやうに吾等めいめいの經驗に恒に現に在るところのものを定義しようとするのではない。しかし意識に就いてそれ自身より不明瞭な定義は下さずとも、私はその最も視易い性質を擧げてその特徴を明らかにすることが出來る、すなはち意識とは先づ記憶を意味するものなのである。該博を缺く記憶でも好い、過去の一小部分をしか容れないものでも好い、或はそれがたつた今起こつた事しか覺えてゐなくても好い、とにかく記憶がそこに在る（ならば、其處に亦意識もある、そこに記憶が）ないならばその時には意識も無いのである。その過去の何ものをも保存しない意識、絶えず自分で自分を

忘れて行つて、瞬間毎に滅しては復生する意識、といふより外に無意識の定義があらうか？　レエプニッツが物質に就いてそれは「瞬間的精神」だと言つた時、彼は、そのつもりであつたと否とに拘らず、それを無感覺だと言つてしまつたのではないか？　故にすべての意識は記憶である、――現在のうちに於ける過去の保存と蓄積とである。

しかしすべての意識はまた未來へもかかつてゐる。吾等の精神の方向を任意の瞬間に於いて觀察してみよう。それは現に在るものに關はつてゐる。しかし何よりも先づこれから來るものに備へる爲にである。注意は一種の待望であるが、意識がある爲には生活への何等かの注意がなければならぬ。玆に未來がある、それはわれらを呼び招く、或は寧ろそれへわれ等を引張つて行くのであるが、この不斷の牽引は、われわれを時間上に於いて進ますものであり、また、吾人が常に動いてゐる原因なのである。すべての動作は未來へ踏み出された一歩なのである。

で、既に過ぎ去つたものをとどめて、未だ來ないものに先んじ備へること、之が意識の第一の作用である。若し現在といふものが數學的な瞬間に還元されるならば、意識にとつて現在はない。斯ういふ瞬間は過去と未來とを別ける單に理論的な極限にすぎぬ、それは、嚴密に言へば考へられることは出來ても、決して知覺されるものではない、それを掴まへたと思つた時に、それは既に遠くはなれてゐる。我等が實際知覺するところのものは持續の或厚さであるが、それは二つの部分から、すなはち、我々の直後へすぎた過去と、直前に迫る未來とから成つてゐる。この過去に吾人は倚り、

この未來へ吾人は向つてゐるのであるが、斯のやうに倚り、且つ、向ふといふ事は意識的存在に獨得なことである。そこで、意識は過ぎたものと來るものとを結ぶ連鎖、過去と未來との間に架けられた一橋梁とも言ふことが出來るであらう。しかし、この橋は何の役に立つのか、そして、意識の任務とするところのものは何であるのか？

此疑問に答へる爲に、何々が意識的存在であり、意識の領域が自然界の何處まで擴がつてゐるかを考へてみよう。しかし、ここで、完全な、嚴密な、數學的な明證を要求してはいかぬ、それでは何ものも得られぬだらう。正確な科學上の事として或存在が意識的だといふことを知る爲には、その中へ入り込み、それと一緒になり、それになつてしまはねばならぬ。實驗に據つてでも、或は推論に依つてでも、私が、現にこの瞬間に諸君に話しかけてゐる私が一の意識的存在だといふことは決して證明出來ないであらう。私は自然が極めて巧妙に拵へ上げた一の仕掛人形であつて、それが往き來して、話してゐるのかも知れない、私が自分自身を意識的だと斷言したところで、その言葉すら無意識的に發音されてゐるかも知れぬ。けれど、さういふ事が不可能ではないとしても、殆んど有り得べからざることだといふことは誰しも認めるであらう。諸君と私との間には蔽ふべからざる外形の類似がある、そして、この外形的な類似から、普通、類推によつて、內部の相似へ結論するのである。無論、類推による推論はいつも或確からしさしか與へない、しかし、この確からしさが十分に高くて、實際上、確實性に相當するやうな場合も非常に多い。で、類推の糸をたぐつて行

つて、何處まで意識が擴がつてゐるか、如何なる點でそれが止まつてゐるかを調べて見よう。

人はよく次のやうに言ふ、「われわれに於いて意識は腦に結びつけられてゐる。故に腦を具へてゐる生物には意識があり、その他のものにはないとせねばならぬ」と。しかし、この論證の缺點はすぐ明らかにすることが出來る。これと同じやうな推論によれば、また、次のやうにも言へるだらう。「われわれに於いて消化は胃に結びつけられてゐる。故に胃のある生物は消化し、その他のものは消化しない」と。けれどこれは非常な誤りである。消化する爲には胃を備へてゐねばならぬといふことはない。器官すらも不必要である、アミィバでも消化するが、それはまだ器官なども出來てゐない原形質の一塊に過ぎぬ。ただ、生物體が複雜となり完全となるにしたがつて、分業が行はれ、いろいろの作用にいろいろの器官が充てられるやうになり、消化の能力も、特にその爲だけにあつて、その任務をよりよく果たすところの胃とか、もつと一般的に言へば消化機關に局限されることとなる。同じやうに、意識が人間に於いては腦に結びつけられてゐることは否み難い、しかしそこから腦が意識にとつて缺くべからざるものだといふことは出來ぬ。動物が下等となるにしたがつて、神經の諸中樞も次第に簡單となつて互に離れてゆき、最後に、神經の諸要素は分化の程度の低い有機體の塊まりの中へ溶け去つてしまふ、で、次のやうに考へられぬだらうか、生物の段階の頂上に於いて、意識が非常に複雜な神經諸中樞の上に住まつてゐるならば、この段階をずつと降つていつても、それはやはり神經系統に伴つてゐる、そして、最後に神經物質が未だ分化しない生物

體の中へ溶け去つてしまつた時には、意識も亦、薄く瀰漫して、そのうちに渾沌と融けてゐるから、殆んど消散してしまつたやうであるが、しかし全然無くなつてしまつたわけではない、と考へるべきではなからうか？　故に、嚴密に言へば、すべて生あるものは意識を持つことが出來る、原則としては、意識は生命と共存する、しかし、事實に於いてもさうであらうか、それが眠り或は消えてしまつてゐるやうな事がないだらうか。それはあるだらう、そして、以下觀てゆく事實の第二の系列がこの結論へ導いて行くやうである。

われわれの最もよく知つてゐる意識的存在に於いては、意識が働くのは大腦の仲介を通じてである。で、人間の大腦に一瞥を與へて、それが如何に作用するかを觀てみよう。大腦は神經系統の一部であつて、この系統の中には、大腦自身の外に、髓、種々の神經などが含まれてゐる。髓の中には多數の機制が仕組まれてゐてその各々は、つねに展開しようとする勢の、複雜な動作の種々を含蓄し、身體はその欲する時に此等の動作を行ふことが出來る、それはちやうど自働ピアノに裝備された穿孔紙の諸卷軸がこのピアノの奏でるいろいろの曲節を初めから畫いてゐるやうなものである。これ等の機械運動の一々は外部からの刺激によつて直接展開されることも出來る、この場合、身體は、受けた刺激に對する反應として、統制された一組の運動をただちに行ふ。しかし他の場合に刺激は、身體の多少とも複雜な反應を髓から直に引き出す代りに、先づ大腦へ昇り、次に降りてゆき、大腦を仲介として初めて髓の機械運動を發展さすことがある。この迂回は何故であるか？　大腦の

干渉は何の役に立つのか？　それは神經系統の一般的構造を觀察すればすぐ判つて來る。大腦は一般に髓の諸機制と關係してゐるのであつて、ただ特にそのうちの或ものとのみ關聯してゐるのではない、また、それはあらゆる種類の刺激を受取るのであつて、ただ特に或種の刺激をのみ受け容れるものではない。故にそれは如何なる感官の途からでも來た振動が其處に於いて如何なる動作の途とでも連絡し得るところの一の十字街である。それは身體の或一點からの電流を任意の動作の仕掛の方へ向けられるやうにする一の換路器である。で、刺激が迂回して大腦に求めるところのものは、最早默受してでなく、選擇して、動作の機制を活動さすにあること明瞭である。種々の事情によつて起こり得る問に對して、髓は既製の答を多數含蓄してゐるが、大腦の干渉はその中で最も適當なものをば發展さす。大腦は選擇の機關なのである。

しかるに、動作の等級を下つてゆくにしたがつて、髓の作用と大腦の作用との區別が段々曖昧となつて來る。最初大腦に局限されてゐた選擇の能力が、次第に髓へも擴がつて行くのであるが、その時には、髓の構成する機制の數は餘程少なくなり、それらの仕組も正確さを失つて來る。終ひに、神經系統が幼稚となると、況んや判然とした神經要素がなくなつてしまふと、自働機制と選擇とは溶けて一緒になつてしまふ、反應は大いに簡單となり殆んど機械的のやうに見える。けれどそれは猶ためらひ、探るので、やはりまだ意志的のやうでもある。先刻言つたアミィバのことをまた考へてみよう。食物とし得る物質に對して、それは自體から多くの突起を派出してこの外物を掴み、包

んでしまふ。此等の僞足は立派な器官、したがつて機制である、しかし、それ等は一時的の器官であつて、その時の狀況の爲に作られたものであるが、既に選擇の初步をあらはしてゐるもののやうである。約言すれば、動作生活の上から下に到るまで、降るにしたがつて愈々漠然とした形に於いてではあるが、選擇の能力、すなはちある特定の刺激に對して多少とも豫期されなかつた運動を以つて答へる力がはたらいてゐるのを觀るのである。之が以上の事實の第二の系統に於いて吾人の見出だす處のものである。斯のやうにしてわれわれが最初に到達した結論が補はれて來る、といふのは、前に言つたやうに、意識が過去を制めて未來を待ち設けるといふのは、とりもなほさず、疑もなく、それが選擇を行ふ任務を有するからである、選擇する爲には、行ひ得ることを考へ、既に行つたことの有益、或は有害だつた結果を記憶してゐねばならぬのである。また他方に於いて、吾人の結論は相補ふと同時に、さきにわれわれの提起した疑問——すべての生物は意識的存在であるか、或は意識は生命の領域の一部分を蔽ふにすぎぬか、といふ問に一の確からしい答を提供する。

事實、若し、意識が選擇を意味し、意識の役目が決斷することであるならば、自發的に動かない、そして決斷する必要を持たぬ有機體に意識があるかどうか疑はしいとせねばならぬ。もつとも、自發的運動の能力を全然缺くと見えるやうな生物はない。植物界に於いても、その有機體は一般に地に定着はしてゐるが、運動の能力は無いといふよりも眠つてゐるのである、役に立つやうな時にはそれは目さめて來る。すべての生物は、動物にしても植物にしても、權利としてはそれを持つてゐ

るのだと思ふ、しかし、その多くは實際に於いては棄權してゐる、――先づかなりの動物、殊に他の有機體のうちに寄生の生活をしてゐて食物を見付けるのに移動する必要のないものの多くと、それから植物の大部分とがそれであるが、後者は、人も言つたやうに、正に地の寄生物ではないか？で、本來はすべて生あるものに内在する意識が、自發運動の消滅とともに昏睡し、また、生命が自由活動の方へ踏み出す時にはそれが強く發展するのだといふのが事實であらう。われわれ各々も亦此法則を自分自身に就いて檢證し得たことがあるのである。吾人の或動作が自發的でなくなつて自働的となつた時には何が起こるか？　意識が其處から退いてしまふのである。例へば、或體操を修得するのに、初めは自分のする動作の一々をば意識してゐる、それは自分が之等を行ふからである、之等が一の決斷の結果であり、一の選擇を含むからである、さて、これ等の動作が次第に緊密に連結し、愈々機械的に相互に決定するやうになつて來ると、われわれが決斷し選擇する必要がなくなつて來るから、それ等に就いて吾人の持つ意識も減退しそして消滅する。飜つて、われらの意識が最も鋭い鮮明さを獲て來るのは如何なる瞬間に於いてであるか？　それは内部的危機の諸瞬間、二つ或は多くの採るべき道を前にして吾人の躊躇する時、自分の運命が自分のすることに懸かつてゐると感ずる時に於いてではなからうか？　で、われわれの意識の強さの程度は全く吾人が自分の行爲に對して與へる選擇、或は創造の總額の重要さに相應すると考へることが出來る。そしてすべては意識一般に就いても亦さうだといふ感じを抱かせる。意識が記憶と先取とを意味するといふのは、

意識が選擇と同義の語だからである。

そこで生物質をその下等な形に於いて、それが最初さうあつたらうと思はれる狀態に於いて想像してみよう。それは原形質的膠狀體の簡單な一塊で、アミィバのやうなものである、それは任意に形を變へることが出來る、したがつて漠然と意識的である。さて、それが大きくなり進化する爲に二つの道がその前に開かれてゐる。それは運動と活動との方向へ、――ますます有効な運動といよいよ自由な活動との方向へ進むことが出來る、この途には危險と波瀾とがある、しかし亦、次第に深く強くなつて行く意識もあるのである。それは、また、自身に萌芽として持つてゐる活動と選擇との能力を捨てて、すべて自己に必要なものをぢつとしてゐて、索めに行かずして獲得し得る樣に自身を處置することも出來る、さうすれば安固な平靜なブルジョア的の存在が獲られる、しかしそれは同時に無活動を豫報する麻痺である、それはやがて決定的の惰眠である、無意識である。以上が生命の進化に提供された二つの途であつた。生活物質の或部分は前者、他の部分は後者を採つた。前者は大體に於いて動物界の方向を標示し（「大體に於いて」といふのはかなりの種類の動物が運動を、ひいて疑ひもなく意識を放棄してゐるからである）、後者も大體に於いて植物界のそれをあらはしてゐる（再び「大體に於いて」といふのは、運動性、そして多分意識も、時として植物のうちに目醒め得るからである）。

さて、此見地から最初世界へあらはれて來た時の生命を觀察してみると、吾人はそれが無機物と

全く異なる何物かを同伴して來たことに氣付くのである。世界は、それ自身だけでは、不可避の諸法則に從ふ。決定された條件の下に於いて、物質は決定された通りになる、そのなる事で豫知されぬものはない、若し我等の科學が完全であつて、吾人の計算力が無限であつたなら、恰も日蝕月蝕を豫知するやうに、われわれは無機物質の宇宙のうちに、その全體のうちに、その諸元素のうちに起こるすべてのことを初めから知ることが出來るだらう。約言すれば、物質は惰性である。幾何學である、必然である。然るに生命とともに、豫見すべからざるそして自由な運動があらはれて來る。生物は選擇しようとするやうになる。その役目は創造することである。他のすべての部分が決定されてゐる世界に於いて、一の不決定地帶がそれを圍繞する。そして、未來を創造する爲には、現在のうちに於いて幾らかそれを準備せねばならず、またこれからあるものの準備は既にあつたものの利用によつてしか出來ぬから、生命は最初から一の持續(デュレエ)のうちに過去を保持して未來に先んじようと努めるのであるが、この持續に於いて過去と、現在と、未來とは互に相浸透して一の不可分離の繼續を形造る。そして、この記憶とこの先取とが、既に觀て來たやうに、意識そのものなのである。この理由によつて、事實に於いてではなくとも權利に於いて、意識は生命と共存するのである。

故に、意識と物質性とは根本的に異つた、反對的でさへある存在の二形式としてあらはれて來るのであるが、互に一の妥協案を採定してどうにか協調する、物質は必然である、意識は自由である、と相互に幾ら反對はしてゐても、生命はよくこの二つを和解さすことが出來る。といふのは、生命

はすなはち必然のうちに割り入つて之を自己の利益になるやうに變へるところの自由だからである。物質の從ふ決定機構の嚴格さが少しも弛み得ないものであつたなら、それは不可能であらう。しかし或瞬間に於いて、ある點に於いて、物質が或融通性を提供するとしよう、そこへ意識が潛入する。小さくなつて潛入して來るのであるが、一度地歩を占めると、膨脹し、その領域を擴げ、遂にはすべてを獲得するやうになる、それは意識が時間を有するからである。それは最も輕微な量の不決定と雖も、無限に積み重なると、人の欲するだけの自由を與へ得るやうになるからである。——しかし此同じ結論を次の新しい事實の系列から、これより以上の嚴密さを以つて再び抽き出してみることとしよう。

事實、生物が運動をするのに如何にしてするかを考へてみると、われわれはその方法が常に同一だといふことに氣付くのである。それは爆發性と呼び得るやうな或種の諸物質を利用するにあるが、之は、恰も火藥のやうに、導火に遭つたら忽ち爆發する。食物、殊に三元抱合物、——炭水化物と脂肪とがそれである。多量の潛在的エネルギイがこれ等のうちに蓄積されてゐて、いつでも運動に變化しようとしてゐるのである。このエネルギイは植物が徐々に、次第に太陽から攝取したものであつて、植物を、或は植物を喰つた動物を、或は植物を喰つた動物を喰つた動物を、以下同じであるが、更に喰つた動物はただ生命が太陽のエネルギイを蓄積して造つた爆發物をその身體のうちに攝取したにすぎぬのである。それが一の運動を行ふ時には、以上のやうにして閉ぢ籠め得たエネル

ギイの一部を發散さしてゐるのであるが、それには、ただ支動裝置に觸れさへすれば、ピストルの引金に輕くさへさはれば、火花を導きさへすれば宜いやうになつてゐる。その初め生物が植物生活と動物生活との中間に彷徨してゐたのは、生命が、その初期にあつては、爆發物を製造することと、種々の運動にそれを利用することとを一緒に營んでゐたからである。やがて植物と動物とがわかれてゆくにしたがつて、初めは一緒にあつたこの兩作用も離れることとなり、生命は二個の領域に分派するやうになつた。一方に於いてそれは特に爆發物の製造に、他方に於いては之を爆發さすことにしたがふやうになつたのである。しかし、生命はつねに、之をその進化の初期に於いて觀ても終局に於いて觀ても、その全體としては、徐々の蓄積と急激な費消との二重の作用である、その主眼とするところは、遲々たるしかも困難な作用によつて物質が潛在のエネルギイを貯藏するやうにし、そして之が一擧にして運動のエネルギイに變化されるやうにすることに在る。然るに、一の自由因、物質に君臨する必然を破る力はないけれども、それを抑へることは出來る自由因が、その物質の上に有する極く僅かの影響力を以つて、之に、より善く選擇された方向へ、いよいよ強い運動をさせようとする時これより以外の方法があるだらうか？　それはちやうどこの通りにするのである。ただ撃子を押し、導火をつけさへすれば、物質が長い時間を要して蓄積したエネルギイを一瞬のうちに利用出來るやうにしようと努めるのである。

しかし吾人はこの同じ結論へ更に第三の事實の系列からも、すなはち、生物に於いて、最早動作

自體でなく、行爲に先き立つ表象を觀察する事によつても亦到達することが出來る。われわれが普通活動的人物、その關係するあらゆる諸事件のうへに強い自己の痕跡を印してゆくやうな人物をさうと識るのはどういふ特徴によつてであるか。それは彼が多かれ少なかれ一の長さの連續を瞬間的な一瞥のうちに包攝することによつてでないか。彼の現在のうちに保持される過去の分量が大であるに隨つて、彼が次々に起こつて來る事件に對抗する爲に未來に押し進める力量も亦重くなつて來る、彼の行爲は、ちやうど箭のやうに、彼の表象が背後へ向つて愈々強く張られてゐるにしたがつて愈々強い勢を以つて前へ飛んで行く。さて、われ等の意識がその知覺する物質に對して如何に行動するかを考へて觀ると、ちやうど、それも亦、その諸瞬間の一のうちに、幾百萬の何千倍かの振動を包攝するのであるが、此等の振動は無生物にとつては繼起するものであつて、若し物質が想起し得るならば、その最初のものは最後のものへ恰も涯なく遠い過去のこととしてあらはれるだらう。私が眼を開いて直ぐ閉ぢるとき經驗する光の感覺は、私の諸瞬間の一に含まれるが、それは外界のうちに展開する非常に長い歴史の壓縮なのである。そこには、次から次へと相繼起して止まぬ幾兆數かの振動、すなはち、若しそれを算へようとするならば、如何に時間を節約しても、猶幾千年かを費さねばならぬといふやうな無數の事件の一系列があるのである。併し、此等の單調で無特色な諸事件は、自らを意識するやうになつた物質の三十世紀を充たすことがあつても、それらを一の綺麗な光の感覺に壓縮し得る私自身の意識の一瞬間を占めるに過ぎぬ。他のすべての感覺に就いても

亦これは同じことである。意識と物質との合流點に在つて、感覺は我等に獨得な、そしてわれ等の意識の特徴となる一の持續のうちに、假に言葉を轉用すれば事物の持續と呼び得るやうなものの無際涯の時代を壓搾してゐるのである。それで、吾人の知覺が斯のやうに物質の諸事件を壓縮するといふのは、われわれの行爲にそれらを服從さす爲である、と信ずべきでなからうか？　假に物質に内在する必然が、その諸瞬間の一々に於いて、非常に制限された範圍のうちでしか隙されないとしよう、それにも拘らず物質界に自由な行爲を、或支動裝置を動かし一の運動の方向を決めるに必要なだけのものをでも、押し入れようとする意識は如何するだらうか？　ちやうど今言つたやうにしないだらうか？　意識の持續と事物のそれとの間に非常な緊張の隔たりがあつて物質界の無數の瞬間が意識的生活の唯一瞬時に攝取される、したがつて、意識がその或一瞬間に意志し、完成した行爲が物質の瞬間の莫大な數の上に蔽ひ被さつて、そのうちに此等の一々の含む殆んど極小の不決定を總攬するに到たると信ぜられぬだらうか？　換言すれば、或意識的存在の持續の緊張度は正しくその活動力、それが世界に導入し得るところの自由な創造的な活動の大さを推測さすものでなからうか？　私はさうだと思ふ、しかし猶詳しいことは暫く措いて置かう。玆で私の言はうと欲するところのものは今觀て來た諸事實の系列が先のものと同じ論點へ導くといふことだけである。すなはち意識によつて命令された行爲、或はそれを準備する知覺のいづれを觀察しても、どの場合に於いても意識は物質のうちに押し入つて之を懷柔し之を自己の利益となるやうにするものとして考へら

れるのである。それは相補ふ二つの方法によつてこの作用をする、一方には爆發的行爲によつて一瞬のうちに、選擇された方向へ、物質が長い間に蓄積したエネルギイを發散することと、他方には、物質が遂行する小事變の算へきれない數を壓搾の働きによつて此唯一瞬間のうちに攝取し、廣漠の歷史を一語に要約することとがそれである。

そこで此等種々の事實の系列が輻湊する點にわれわれを置いてみよう。一方に於いては必然の下に服從する物質がある、それには記憶がない、或はその諸瞬間の〔相繼起する〕二つをつなぐ橋となるのにちやうど必要なだけしかない、その一々の瞬間は之に先立つものから演繹されるのであつて、そして既に世界のうちにあつたものの上にその時何ものをも加へない。他方に於いては、意識、即ち自由を伴ふ記憶、すなはち結局一の持續のうちに於ける不斷の創造がありそこには眞實の成長もある、――この持續は伸びてゆくものであつて、この持續のうちに於いて過去は不可分割のものとして保存され、一の植物の如く、あらゆる瞬間に於いてその葉とその花との線を、その〔全體の〕形を更新してゆく魔術的な一の植物の如く成長するのである。尤もこの二存在、――物質と記憶と、――が共通の一起原から分派したものだといふことも疑はれないと思ふ。前者が後者の反對であり、意識が絶えず創造し豐富になつて行く活動であるに反して物質が自らを破壞し解消する活動ではあつても、物質にしても意識にしてもそれ自身のみからは解釋されぬだらう、といふことを私は以前

あきらかにしようと試みたことがあつた。故にその點は再說しない、ただわれらの住む遊星上に於ける生命の全體としての進化のうちに、創造する意識による物質の橫斷、動物のうちには幽閉されてあり人間に到つて初めて決定的に自由となる或ものを、工夫と創案との力を以つて、解放しようとする努力が觀られるといふことを言つて置きたいのである。

ラマルクとダアウインと以來、種の進化、すなはち最も簡單な有機形態から始まつて次第に種が種を生んで行くといふ考へをば多數の觀察が漸次に確立して來たのであるが、今その細々しいことに入つて行くのは無益である。吾人はこの臆說に贊同を拒むことが出來ない、それは比較解剖學と胎生學と古生物學との三重の證言を持つてゐるのである。また科學は、與へられた條件に順應することの生物にとつての必要をば、生命進化の全階梯に於いて如何なる諸事實があらはしてゐるかをも明らかにするところがあつた。しかしこの必要は或特定の諸形態に於ける生命の行詰まりを說明するやうではあるが、その組織を愈々高等に進めて行く運動を解釋しない。下等な有機體と雖も吾人と同じやうによくその生存の條件に適合してゐる、それはその下に於いて生活することに成功してゐるのである、では何故生命は複雜になつて行つたか、次第に危險を增しながら複雜となつて行つたのか？　われわれの今日觀察する生物形態のうちの或物は古生時代の最も溯つた時期からすでにあるものである、それは、種々の時代を通じて、變化せずに、とどまつてゐる、で、一の定まつた形態に停頓することは生命にとつて不可能ではなかつたのだ。何故それは、さう出來たあらゆる

場合に、さうするに止めて置かなかつたのか、何故それは進んで行つたのか、より高い影響力へ向つて、愈々募る危險を冒して、跳躍の勢に乘つて運ばれて行つたのでなければ、——何故であるか。

生命の進化に一瞥を與へると內部から押し進むこの力が實際に働いてゐるといふ感じを懷かざるを得ない。しかしそれが生物質を一の唯一の方向へ進出せしめたとすることは出來ぬ、また樣々の種がただ一の途に沿ふ諸道程をあらはすとすることも、この行程が障碍なく遂行されたといふことも出來ない。この努力がその利用する物質のうちに於いていろいろの抵抗に遭つたことはあきらかである、それは途中でわかれ、そのうちに抱懷してゐた諸傾向を相異つた進化の路線へ分割せねばならなかつた、それは路を變へ、退步し、屢々停頓してしまつたのである。ただ二つの路線に於いてのみそれは否み難い成功、一に於いては部分的、他に於いては比較的完全な成功をば收めた、節足動物と脊椎動物とがこれである。第一の線の究竟點には昆蟲の本能があり、第二のもののそれには人類の叡智がある。それで進化する力は最初それ自らのうちに、混り合つて或は寧ろ互に含みあつて、本能と叡智とを具へてゐたと考へることが出來るのである。

概言すれば、この情勢は恰も一の廣大な意識の流れが、自らのうちにあらゆる種類の潛勢力を相渾融させながら、物質を貫流して之を組織の方へ導き寄せ、之が必然性そのものであるにも拘らず、之をば自由の一手段に變へて行つたといふが如きものである。しかし意識は係蹄に落ちかけもした。物質がその周圍に捲きついて、自らの自働機制へそれを屈げ、それを自らの無意識のうちに眠らせ

てしまふのである。進化のある諸路線に於いては、殊に植物界のそれらに於いては、自働機制と無意識とが定規になつてゐる、尤も、進化の力に内在する自由が猶あらはれて、立派な藝術制作に比すべき豫想外の諸形態を創造することがある。しかし此等の豫知すべからざる形態も、一旦創造されてからは、機械的に繰返されて行くのであつて、個體が選擇するといふことはない。他の諸線に於いては、意識は十分自由となつて個體は或感情、したがつて或選擇の餘裕を恢復して來る、しかし其處には存在する爲の色々の急務があつて、選擇の能力をば單なる生存慾の補助手段にして了ふ。斯やうに生命の高所から低處に到たるあらゆる階梯を通じて、自由は一聯の鐵鎖に釘着けにされてゐるのであつて、之を弛めることがせいぜいなのである。人類に到つて初めて、一跳躍が敢行され、その連鎖は斷ち切られる。人間の腦は、實際、動物のそれに似ることは似てゐるが、その獨得のはたらきとして一の固定された習慣に他の習慣を、あらゆる自働機制にむかつて他の自働機制を對抗させる手段を提供する。そして一の必然が他の必然と鬪つてゐる際に、自由は備へを立て直して遂に物質をば手段の地位に引き降ろす。それは統治する爲に〔統治すべき勢力を〕分割したのである。

物理學と化學との協同の努力が將來何時かは生物質に類似する物質の製造に成功するといふ事は、多分あるだらう。生命は浸潤するやうにして進んで行くのであつて、物質を純粹の機械運動から離したその力も、先づ此機械運動にしたがつてからこの物質の上に手がかりを作つたのである、それは、轉轍器の可動軌條がレエルに密着して之から列車を離すのと同じである。言葉を換へて言へば、

生命は、その發端に於いて、その助けを藉らずして自らを造り始めてゐた、或は造り始められるやうになつてゐた物質の中へ入つて來たのである。しかし若しそれ自身に放置されてゐたなら物質は、其處で停まつてしまつたであらう、そして其處でまた、實驗室での〔生物質〕製造の努力も、無論、行き詰まるであらう。生物質の特性の若干を模倣することは出來る、が、それの據つて以つて繁殖し、且つ變形論的の意味に於いて進化するところのその跳躍といふものを之〔物質〕に植付けることは出來ぬ。然るに、この繁殖とこの進化とが生命自體なのである。そのいづれもが内から押し出して來る一の力、空間のうちに於ける增加と時間のなかでの複雜化とによつて數に於いて又含蓄に於いて殖えて行かうとする二重の要求、すなはち究竟に於いては生命と俱に出現して後に人間活動の二大原動力となる二個の本能、戀愛と野心とをば顯はしてゐるのである。昭らかに一の力が玆に我等の前に働いてゐる。それは自らを縛る桎梏から離脱しようとすると同時に自分自身を超越しようとしてはたらいてゐる、先づ力限りの事をし、次に力以上のものを仕遂げようとしてゐるのである、といふのは精神を定義してゐることに外ならぬではないか？　そして、若し精神力と言ふものが存在するものならば、それが他の力から區別され得るのは、正しくその含むより以上のものを自分のうちから抽き出す能力によつてではないか。しかしあらゆる種類の障碍が此力の進路を阻んでゐることを忘れてはならぬ。その起原から人類に到達するまでの生命の進化を眼に浮かべて觀ると、それは恰も、意識の一潮流が物質の中へ分け入つて其底深く一方の路を開かうとし、右に試み左に

探りながら、多少とも進んで行くが、大ていは巖に當たつて碎け去る、けれど、辛くもそのうちの一方向に於いては突出するに成功して再び陽光に浴してゐる、といふやうに看える。この方向が人類に到着する進化の徑路なのである。

しかし何故に精神は斯の企畫に乘り出していつたのであらうか、それが地底の道を鑿つて行つたのは何の爲であるか、玆でまた二三の新しい事實の系列に就いて調べねばならぬ。しかしそれには心理的生活に關して、心理と生理との相關に就いて、道德の理想や社會の進步に關聯して種々細々しい問題に入つて行かねばならぬから、寧ろ眞直ぐに結論へ進むこととしよう。そこで物質と精神とを對立させて見ると、物質とは先づ分割し明確にするものだといふことを知るのである。思想はそれ自身のみに於いては、種々の要素の相互融合の狀を呈するのであつて、之を一とすることも多と言ふことも出來ぬ、それは連綿である、そしてすべての連綿の內には渾融がある。思想がはづきりとなる爲には、それが言語に分散せねばならぬ、吾々が自分の精神のうちに持つてゐるものをよく明確にし得るのは一葉の紙を取つて、互に相浸透してゐた各語を一つづつ離して並べて列にした時である。斯のやうに生命本來の躍動のうちに渾然と融け合つてゐた諸傾向をば物質は辨別し、隔離し、分解して一々の個物とし個體としてしまふ。また他方に於いて物質は努力を可能にし之を誘發もする。想念されたに過ぎぬ思想、構想だけの藝術品、夢想のみの詩歌には努力は要らぬ、その詩を言語として、その藝術上の構想を彫刻なり繪畫なりとして物質上に實現することが努力を要求

するのである。その努力は困難だ、しかしそれは貴重なものである、その到達する結果の制作よりも更に貴重なものである、何となれば、それによつて、人は自分のうちから自分の持つてゐた以上のものを造り出し、自分自身を超越することが出來たからである。然るに、この努力は物質なくしては生じ得なかつたであらう。その有する抵抗力と、吾々の馴致し得るその柔順性とによつて、それ（物質）は同時に障碍であり、道具であり、刺激なのである、それは吾人の力を試錬し、それによつて形造られ、またそれを更に強くするのである。

生命の意義と人間の運命とに就いて思索した多くの哲學者の未だ十分注意しなかつたことであるが、これ等の問題に就いて自然は自ら吾々に敎へる勞をば取つてゐる。一の的確な標識によつてそれは吾人の眞目的の達せられたことをばわれわれに告知する。この標識は歡喜である。歡喜と言ふ、快樂と言はない。快樂は生物に生命を維持さす爲に自然が案出した一の詭計にすぎぬ、それは生命の躍進する方向を指すものではない。しかし歡喜は常に生命が成功したこと、それが地步を占めたこと、それが勝利を獲得したことをば報道する、あらゆる大歡喜には勝鬨の響がある。然るに、この標示に隨つてこの新しい事實の系列を辿つて行くと、歡喜のある處、そこに必ず創造のあることを見出だす、そして創造のより豐富であるに應じて歡喜も亦愈々深いのである。わが兒を凝視める母の歡喜は彼女が肉體的にも精神的にもその子を創造したといふ意識を持つから起こる。營業を發展さす商人、わが工業の隆盛を視る工場長はその利得する金錢とその獲得する盛名との爲に歡喜す

るのであらうか？　財實と尊敬とは無論彼等の感ずる滿足のうちに重大な要素となつて入つてゐる、しかし、それ等は歡喜よりも寧ろ快樂を齎らすものであつて、彼等が眞の歡喜として味はふところのものは發展する企業を創始し、何かを活かして生命を與へたといふ感情なのである。異常な歡喜、わが構想を實現した藝術家のそれ、發見或は發明した學者のそれを採つてみよう。これ等の人々の精勵するのは榮譽の爲にであつて、その惹き起こす賞讃が彼等に最も強い歡喜を與へるのだと說く者がある。何たる誤りだらうか！　人が名譽と讃辭とに執着する强さは成功したといふ自信の弱さを示す正確な尺度である。虛榮の底には謙遜が存する。他の贊成を索めるのは自らの不安を藏ふが爲であり、わが制作の恐らくは不充分な生氣を支持するために之を諸人の熱い賞讃の裡に裹まうとすること、恰も早產の嬰兒を綿のうちに置く如くするのである。しかし自信のある人物、一の生きた且つ生き續き得る作品を產んだといふ絕對的の自信を持つ者は讃辭を不用とし、榮譽を超越する、それは彼が創造者であり、自ら創造者であることを知つて居るからである、そして之によつて彼の體驗する歡喜が神聖な歡喜だからである。故に若し、あらゆる領域に於いて、生命の勝利が創造であるならば、人間生命も亦その存在の理由を一の創造に於いて持つとすべきであり、そしてこれは藝術家や學者のそれとは違つて、あらゆる瞬間にあらゆる人のうちに於いて展開され得るもの、すなはち自らによる自己自身の創造、小から大、無から有を抽き出して、世界の豐富さに絕えず添加してゆくところの努力による人格の擴大であると考ふべきでなからうか？

之を外から觀れば、自然は豫想の外の淸新な形態が涯しなく咲き誇つたものとして顯はれて來る、それを活かす力は愛を以つて、ただ何となしに、樂しみに動植物の種々の無限の變化を創造してゐるやうに見える、一々の種にそれは一大藝術としての絕對の價値を賦與してゐる、それは最初に出來たものにも、〔續いて生まれた〕他のものにも、人類にも同じ執着を持つてゐるかのやうである。併し或生物の形は、一旦描き出された後、無限に繰返されて行く、同樣にこの生物の行爲も、一旦遂行されて後は、自らを模倣して自働的に繰返すやうになつて行く、自働機制と反復とは、人類より外の領域に君臨してゐて、そこには停滯があること、そこに觀られる進步のない繰返しが生命本來の運動ではないといふことを吾人に告げてゐるのである。故に藝術家の立場からするやうな觀方は重要ではあるが、決定的ではない。種々の形態の豐富さと獨創性とはよく生命の榮華をあらはしてゐるが、しかしこの榮華のうちに於いて、その華麗さが力を示してゐると同時に、生命は亦その跳躍の一頓挫と前進力の一時的麻痺とを顯はしてゐる、それは恰も少年が自分の滑走の終りをば優雅な旋轉を以つて飾るやうなものである。

人心研究家の見地は更に高い。人間のうちに於いてのみ、殊にわれ等のなかの最も優れた人々のうちに於いて、生命の運動は障碍なく前進し、それが途中につくつた人體といふ此藝術品を通じて、精神生活の無限に創造的な流れを奔出させて行く。人間は、絕えず自分の過去の全體を支持として、より力强く未來へ壓しかかつてゆくやうになつてゐるのであつて、實に生命の一大成功である。し

かし最上の創造者といふのはその行爲が、それ自身強くて、また他人の行爲を強くすることが出來、〔自身〕吝むところがなくて、〔他處にも〕仁厚の源泉をつくり得るやうな人なのである。道德上の偉人、殊に創意的なしかも單純な英雄的行爲によつて德へ達する新しい途を開き創めた人々は形而上學的眞理の啓示者でもある。この人々は進化の最頂點に立つものではあるが、また却つて最も原始に近くもあつて、その內奧から來る衝動を吾人の眼に視え易くする。これらの人々を注意深く觀察し、その感ずるところのものを共鳴して同じく感じようと努めるならば、本能の働きによつて生命の根本そのものへまで徹入することが出來るだらう。最深奧處の神祕を貫く爲には、屢々頂巓に着目せねばならぬ。地球の內部深く在る火はただ火山の頂上にのみあらはれるのである。

生の跳躍の前に開かれた二個の大道、節足動物の系列と脊椎動物のそれとに沿うて、各々異つた方向へ、本能と叡智とが、初めは漠然と互に相蔽ひながら發展して行つた。前者の道を取つた進化の頂點には膜翅類の昆蟲があり、後者に隨つたそれの尖端には人間がある。そのいづれに於いても、最後に到達された形式の根本的な相違と辿られた道の次第に乖離して行く方向とに拘らず、進化の究極してゐる處は社會生活に於いてである、それは恰も此要求が初めから感じられてゐた如くにであり、或は寧ろ生命の本質的な根本的な或希求がその十分の滿足を社會に於いてのみしか見出だすことが出來なかつたからのやうにである。社會は、それが個々の力の共同である處からして、皆の努力から利益を受け、皆の努力を更に容易にする。それは個性を自分に從屬せしめなければ生存し

得ないが、個性を放任して置かなければ進歩することが出來ない、この二要求の衝突はどうしても之を解決せねばならぬ。昆蟲に於いては、初めの條件のみが充たされてゐる。蟻の社會、蜂の社會は感心な程訓練され統一されてゐるが、固定し切つた習慣のうちに凍結してしまつてゐる。そこでは個性が自らを沒却してゐるとともに、社會も亦その目的を忘却してゐる、どちらも、夢遊狀態でのやうに、無限にぐるぐる同じ處を廻つてゐるのみで、進んで、前方へ眞直に、更に大きい社會の力と更に完全な個性の自由へと向つて行くことをしない。ただ、人間の諸社會のみがその實現すべき二個の目的を絕えず眼前に直視して進んでゐるのである。自らと鬪ひ、互に他と戰ひながら、此等の社會はあきらかに、接觸と衝突とによつて、稜角を去り、軋轢を失くし、抗爭を除去して、個人の意志が歪まずに社會意志の中へ入り、各社會も亦、そのめいめいの特徵と獨立とを失ふことなしに、更に大きい社會の中へ入つてゆくやうにと努めてゐる、その狀況は危惧と信賴とを同時に與へるのであるが、之を觀る人は自ら次のやうな感想を持たざるを得ないであらう、すなはち玆でも亦、無數の障碍とたたかひながら、生命は個性を強くすることと之を總括することとによつて、最も大量の、最も豐富な變化の、最も優れた性質の發明と努力とを獲得しようと働いてゐるのである、と。

さて、今この最終の事實の系列から離れてその前のものへ戻つて來るならば、そして、人間の精神活動がその腦の活動以上に出てゐること、その腦の貯藏するものが運動の習慣であつて記憶では

ないこと、思想の諸他の作用が記憶よりも更にはつきり腦から獨立してゐること、隨つて人格の維持、その强調すら身體の分散の後に於いて可能であり、確からしくさへゐること等を考へ合はすならば、現世に於いて物質の中を通つてゆくうちに、意識が鋼鐵の如く鍛へられて一層影響の深い或行爲へ、より强い或生活へと準備されるといふことに想が到らぬだらうか？　その〔彼世の〕生活をば、私はやはり鬪ひの生活であり、發明を要求するものであり、創造する進化であるといふやうに想像する、吾等めいめいは、ただ自然力のはたらきによつて、それぞれの階級の精神境に座を占めるのであらうが、其處へは既に實質上現世に於いて各自がその努力の質と量とに應じて到達してゐる、それは地上から放たれた氣球がその比重の指示する高度へまで昇つてゆくやうなものである。これは、無論、一の臆說に過ぎない。先刻まで吾等は確からしさの領域にゐたのであるが、玆では單なる可能のそれへ入つて來てゐる。いさぎよく吾等の無智は認めよう。しかしそれが決定的だと信じて諦めてしまふことはない。個々の意識に彼の世があるものならば、それを探査する手段が吾人に發見されぬといふ理由はない。苟くも人間に關することならそれは必ず人間に把握される。また屢々吾等の甚だ遠く、無限の彼方に在るやうに想ふ知識が、すぐわれわれの傍にあつて、吾等がそれを採る氣を起こすのを待つてゐるやうなこともある。今一つの彼の世、太陽系の外の宇宙のことが如何して知られるやうになつたか憶ひ出してみよう。オウギュスト・コントは天體の化學成分を永久に不可知のものだと宣言した。それから二三年經つて、スペクトル分析が發明され、今日吾人は其處へ行つて見た以上に詳しく、天の諸星が何から出來てゐるかを知つてゐるのである。

〔註〕（一）此講演は英語でされたものである。そして英語のまま、「生命と意識」といふ題の下に、千九百十一年十月のヒッパアト・ジャアナルに掲載された、千九百十四年刊行の「ハックスリィ記念講演集」中には之が轉載されてゐる。玆に掲げる本文は時として英語講演の敷衍であり、時としてその飜譯である。

二

心と身

千九百十二年四月二十八日、信仰と生活との會に於いてされた講演（一）

此講演の題は「心と身」、言ひ換へれば物質と精神と、すなはち存在するもののすべてであつて、その上、すぐ後に述べる一派の哲學を信ずるとすれば、何か存在しないものをさへ含んでゐる。しかし懼れを懷かれなくて宜い。私は茲で物質の性や精神の性を深く究めようとするのではない。二個のものをそれぞれ區別して、そして或程度まで兩者の關係を規定することは、その各々の性質を識らなくても出來るのである。私を圍んでゐる各位のすべてと知人になる事は、今、私に取つて不可能である、しかしながら私は自分をば各位から區別してゐる、そして私との關係に於いて各位がどういふ位置に在るかをも亦知つてゐる。心と身とに就いてもその通りである、この兩者の本質をば一々定義するとなると非常に面倒な事になつて來る、しかし兩者の結合と解離とは經驗の事實で

あるから。此等を合はすものとそして此等を離すものとを知るのはそれよりずつと容易なのである。

先づ、此點に就いて常識の素朴な直接的な經驗は何を言ふだらうか？　吾等一人々々は一の身體であつて、物質のあらゆる他の部分と同じ諸法則に支配されてゐる。押せば前へ出る、引けば戻る、持ち揚げて置いて手を放すと、落ちて來る。しかし、外からの原因の爲に惹起されるそれ等の運動とは別に、他に内から來るやうに見えるものがあつて、之等は豫見を許さぬといふその性質を以つて前者と截然區別される、之等が「有意的」と呼ばれるのである。その原因となるものは何であらうか？　それは各人が「吾」または「我」といふ語を以つて指すものである。我とは何だらうか？　間違ひか眞實かは別として、それは觀たところ、身體の主であつて之を自己の内に裏み、空間に於いても時間に於いても之を超越するものである。先づ空間に於いては、吾々の身體はそれを局限する的確な輪郭線で終つてゐる、然るに、吾人の知覺能力、殊に視覺のそれによつて、われ等は自分の身體の遙か彼方へ擴がつてゆく、星の世界へまで行く。次に時間に於いては、身體は物質であり、物質は現在のうちにあるに過ぎぬ、過去の痕が其處に殘つてゐるとしても、それは之をば知覺してその知覺するところのものをば自らの記憶のうちに在るものの光によつて解釋するところの意識に取つてしか過去の痕とはならぬ、意識が、それ自身が、この過去を引き留め、時間の展開するに隨つて之を自らの上へ卷き重ね入れ、之と共に未來を準備してその創造に寄與して行くのである。直ぐ前に述べた有意的行爲さへも、絶えず何か新しいものを世界のうちに造り出すのがその任務だと

見える此意識力によつて、過去の經驗のうちに習得された運動の一群が常に新しい方向へ屈折されるものに外ならぬ。即ち、意識は自らの外に於いて新しいものを創造する、何故ならばそれは豫想されなかつた、豫想すべからざる運動を空間のうちに描出するからである。そしてそれは亦それ自身のうちに於いて新しいものを創造する、何故ならば有意的行爲はそれを意志するものの上に反動して、それを行ふ人物の性格を或程度まで變更し、一種の奇蹟によつて、自らによる自らの創造を成し遂げるからであつて、この創造は全く人間生活の目的自體であるやうに思はれるのである。そこで概括すれば、時間に於いて現在の瞬間に閉ぢ籠められ、空間に於いてその占據する場所に局限され、自働人形の如く行動し、外からの影響に對して機械的に反動する身體の外に、吾等は何かを把握するのであるが、それは空間内で身體より更に遙か遠くへ擴がつて行くもの、時間を通じて持續するものであり、最早自働的でなく豫定されず、且つ先見すべからざるそして自由な運動をば身體に要求し强制するところの何物かなのである、此もの、あらゆる點で身體の上に出てゐて、行爲を創造し自ら自身をも新しく創造する此もの、これが「我」である、これが「心」である、これが精神である、――精神とは正しくその含むより以上のものを與へる一の力に外ならぬのである。以上がわれ等の觀ると信ずるところである。觀たところは斯のやうなものである。

すると、或は人が言ふだらう、「よろしい、しかしそれは見かけに過ぎない。更に近寄つて觀よ。

そして科學の言を聞け。先づ此「心」といふものが身體なしでは決して人の前で行動せぬことを誰しも試めねばならぬ。彼の肉體は出產から死去に到たるまで彼につきまとつてゐる、そして、彼が實際それから離れてゐるのだと想像するとしても、すべては彼がそれへ不可分離的に縛りつけられてゐるといふやうになつてゐる。クロロフオルムを嗅ぐと意識は無くなる、アルコオルやカップエを飲むとそれは興奮して來る。輕微な中毒が既に叡智の、感覺の、意志の深い錯亂を起こすことがある。慢性の中毒、例へば或種の傳染病の殘して行くものから精神異常が惹起される。その屍體解剖に際して、精神異常者の內に常に腦傷害を發見するとは言へないとしても、少なくともそれは頻繁にある、そして何等傷害のない場合には、きつと組織の化學的變質が病氣の原因となつてゐたに違ひない。その上更に、科學は大腦の或定まつた廻轉のうちへ精神の或定まつた作用を的確に局限するのである、先刻言はれた有意的運動を行ふ能力の如きも亦局限される。前頭葉と顱頂葉との中間にあるロオランド溝の或定まつた個處の傷害は、上膊と下肢と顏面と舌との運動喪失を惹起する。精神の根本的な作用であるとされる記憶でさへも部分的には局限されることが出來たのである。左側第三前頭廻轉の基部には言語の發聲運動の記憶がある、左側第一及び第二顳顬廻轉にわたる一區域には單語の音の記憶が保存されてゐる、左側第二顱頂廻轉の後部に單語と文字との視象が貯藏されてゐる、等（このことがわかつてゐる）。更に進んで行かう。時間に於いても空間に於いても、心はそれが結び着けられてゐる肉體以上に出てゐるといふことであつた。先づ空間に就いて考へてみ

よう。視覺と聽覺とが肉體の限界より遠くへ行くことは眞實である、しかし何故であるか？　遠くから來た振動が眼と耳とを刺激したからである、それが腦へ傳達されたからである、そして、腦に於いて、刺激が聽覺或は視覺となつたからである、故に知覺は身體のうちに在る、そして之をば擴くしない。次に時間に就いて考へてみよう。精神は過去を抱括する、之に反して肉體は不斷に新しく始まる現在のうちに閉ぢ籠められてゐるとのことであつた。しかし身體が過去の痕を現に保存すればこそ吾人は過去を想起することが出來るのである。外物が腦に與へた印象は其處に滯まつてゐる、それは感光板に影象が或はレコオドに音曲がとどまつてゐるやうなものである、機械を動かすとレコオドがその旋律を繰返すやうに、印象が貯へられてゐる場所に或振動が與へられると腦は記憶を喚び起こす。故に、時間に於いても空間に於いても、「心」は身體の外へ出ない……。しかし實際肉體から區別される心といふものが在るだらうか？　腦の中には種々の變化が、更に的確に言へば、分子と原子との新しい移動と集合とが絶えず起こつてゐる。そのうちの或ものは吾等の感覺と呼ぶものによつて、また或ものは追想によつて飜譯される、また中には叡智的な、感覺的な、及び意志的なあらゆる事實に對應するものが無論在るに違ひない、意識はそれらのものへ燐光の如く添ははつて來る、それはちやうど、闇のなかで、壁に擦り付ける燐寸の動きの痕を描く光の條のやうなものである。此燐光が、謂はば自身で自身を照らして、內部光學のいろいろ奇異な錯覺を造り出だす、斯うして意識が自分の原因であるところの諸運動を却つて自ら變更し、指導し、產出する

と想像する、此事實に於いて自由意志への信仰が成立する。眞理は之に反して次の通りである、すなはち若し吾人が、頭蓋を透して、活動する腦のうちに繼起するものを視得るならば、若し、その内部を觀察する爲に、最も擴大力の強い現今の顯微鏡の更に何百萬倍かの幾百萬倍かを擴大し得るものを使用することが出來るならば、若しそのやうにして大腦皮質を組成する分子、原子、電子の亂舞に參會するならば、そして若し、他方、大腦的なものと精神的のものとの對照表、即ち此亂舞のそれぞれの型をば思想と感情との言語に飜譯する事を可能にする辭書を所有するならば、吾人は、所謂「心」と全く同じやうに、之が思惟し、感受し、意志するもののすべてを、之が機械的に行ふに拘らず自由に行ふと信ずるところのすべてを知悉することが出來るだらう。しかも之自身よりも更に遙かによく知悉することが出來るだらう、何故ならばこの自稱意識心は大腦内奥の亂舞の一小部分をしか照明せず、特權的な或原子群若干の上にのみ飛び交ふ燐光のあつまりに過ぎないのに反して、吾等は全原子の全群を、大腦内奥の亂舞全體を觀覽することが出來るだらうからである。言はれるところの「意識心」とはせいぜい諸結果を知覺する一結果に過ぎない、吾人は、吾人こそは、諸結果と諸原因とを眼前にし得るだらう」と。

以上が時として科學の名に於いて人の言ふところである。しかし若し觀察された或は觀察され得べきもの、證明された或は證明され得べきものを「科學的」と稱へるのならば、今提出されたやうな結論に何等科學的なもののないことは極めて明瞭でないか？　蓋し、科學の現狀に於いては、そ

れを驗證する可能性を窺ふことすら出來ないのである。尤も、人はまた主張して言ふ、エネルギイ保存の法則が宇宙間に於いて運動或は力の極少量でもが創造されるといふ事に反對する、若し事物が今言つて來たやうに機械的に流れて行かなかつたら、若し實効のある意志が自由行爲を行ふ爲に干渉するならば、エネルギイ保存の法則は侵害されるであらうと。しかし斯のやうに推理するのは疑問になつてゐるそのものを簡單に認めてしまふことである、何故ならばエネルギイ保存の法則は、あらゆる物理的法則と同じやうに、物理現象に就いて行はれた諸觀察の要約に過ぎないのであつて、それは何人も其處に氣紛れが、選擇が、或は自由があると決して主張しなかつたところの領域のうちに起こるものをば表(あらは)す、しかも知らうとする處は正しく意識（それは、結局、一の觀察の能力であつて、獨自の方法で實驗もする）が自由活動に直前すると自ら感ずるやうな場合にも猶それが驗證されるかどうかといふ事だからである。感覺や意識に直接提供されるあらゆるもの、内部と外部とに拘らず經驗の對象となるすべてのものは、それが單にさう見えるものだといふことの證明されぬ限りは眞實とされねばならぬ。然るに、吾人が自ら自由であると感ずること、それが吾等の直接の印象であることは疑はれない。故にこの感じが錯覺的だと主張する人々の方に證據提供の義務があるわけである。しかもその人々は何等それに似たものをすら證明しない、そのする處はただ意志が干渉しなかつた場合に於いて驗證された法則を意志的行爲へまで勝手に擴げる事だけなのである。また意志がエネルギイを造り得るとしても、造られたエネルギイの量が非常に弱くて感知される程

の影響を吾等の計量器に及ぼさないといふ事も甚だ可能である、しかしながらその効果の莫大たり得ることはちやうど火花でも火藥庫を爆破して了ひ得るのと同じである。此點の深い研究へは今入つて行かない。ただ次のことを言つて置けば宜いであらう、すなはち若し特に有意的運動の機構を、一般に神經系統の作用を、最後に生命自身をばその本質的なものに於いて觀察するならば、意識が常に使ふ詭計は、最も下等な諸生物形態のうちに於けるその最も貧弱な起源よりして以來、物理的決定機構をば自分の目的内に引き入れて、或は寧ろエネルギイ保存の法則を轉用して、常により善く利用され得る爆發物の常により旺んな製造を物質から獲得するに在るといふ結論に到達する、蓄積されたエネルギイの出來るだけ多大の額を、選擇された方向へ、欲する瞬間に放出するには、或非常に輕い動作、たとへばピストルの引金をそつと壓へる指のそれのやうなもので充分なのである。筋肉中に貯へられてゐるグリコゲンは事實一の眞正の爆發物である、それによつて有意的運動が遂行される、斯の種の爆發物を製造し利用する事が、任意に形を變へ得る原形質の幾塊かのうちに最初あらはれた時から自由に行爲し得る諸有機體のうちに於いて完全に發展するに到るまでの、生命の本質的なまた不斷の苦心であつたと思はれる。しかし繰返して言ふが、此點に就いては他の場所で長く研究したことがあるから茲でこれ以上詳說しない。で或は開かぬでも宜かつたかも知れぬ此括弧を閉ぢて、初めに言つてゐたことへ、すなはち證明されたのでもなく經驗によつて示唆されたのでさへもないところの命題を科學的とは呼び得ないといふことへ戻るとしよう。

事實經驗の吾等に告げる處は何であるか？　それは心の生活或は、さう言ふより斯ういふ方がよければ意識の生活が、身體の生活に結びつけられてゐる事、それ等の間に連帶關係が在る事、それだけを吾人に示す。しかし此點を誰もあらがひはしない、ただ其處から腦的なものが心的なものに置き換へられると言ひ、對應する意識中に起こるすべてのことを一個の腦のうちに於いて讀み得ると主張する處へまでは遠い。釘に懸けられた着物は之と連帶關係にある、釘を拔くとそれは落ちる、釘が動けばそれは搖らぐ、釘の先が尖り過ぎてゐるとそれに穴があく、裂ける、と言ふことから釘の一々の細部が着物の或細部に對應するといふ事も、釘が着物の代りとなるといふことも出て來ない、猶更釘と着物とが同じ物だといふことは出て來ぬのである。斯のやうに、意識が腦に懸けられてゐることは爭はれぬ、しかし其處から腦が意識のあらゆる紆餘曲折を描形するといふ事も、意識が腦の一作用だといふ事も斷じて牽き出されない。觀察が、實驗が、したがつてまた科學が吾等に確言するのを許すのは唯、腦と意識との間に或「關係」があることだけなのである。

此關係は如何なるものか？　嗟呼！　此處に到つて吾々は人がそれから期待する權利を持つてゐたところのものをば哲學が果して與へたかどうかと考へてみることが出來る。心の生活をそのあらゆる發現に於いて研究する役目は哲學のものである。熟練した内部觀察を以つて、哲學者は彼自らの内奥へ降つて行き、そこから、また外表へ昇つて出ながら、意識が緩んで伸び、擴がり、空間のうちに於いて展開しようと自ら用意する漸次的運動を辿つて行かねばならぬ。この物質化の進行を

検閲することによつて、意識が據つて以つて自らを外界化するところの行動を窺ひ視ることによつて、彼は物質の中への精神の挿入が、身體から心への關係がどういふものであり得るかといふ漠然とした直覺をば少なくとも獲得するであらう。これは無論一個の微光のほのかなあらはれに過ぎぬ、それ以上ではない。しかしこの微光は心理學と病理學との把持する無數の事實へ吾等を導いて行く。此等の事實は、また交換的に、內的經驗が不完全或は不十分であつた處を補つて、內部觀察の方法を矯正するであらう。斯のやうに、一は內に、一は外にある觀察の二個の中心の間を幾度も往復する事によつて、吾人はこの問題の解決に次第々々に近いものを取得して行くのである、——それは、形而上學者の諸解決が餘りに屢々さうだと自稱するのと違つて、決して完全なものではない、却つて科學者のそれのやうに、何處までも完全に近づいて行くことの出來るものである。しかもその最初の示唆が內から來たこと、內的視力に吾人がその主な照明を求めたことは動かし得ない、そして此理由に據つてこの問題はそれがさうあるべきもの、すなはちやはり哲學の一問題たることを失はぬのである。

しかし形而上學者はその好んで居るところの高處から容易に降りぬ。プラトンはイデエの世界へ向つて來るやうに彼を招待した。其處に彼は欣んで居を定め、純粹理念の間に出入して、それ等を互讓へ導き、どうにか互に妥協せしめ、この品位高い雰圍氣のうちにあつて學識豐富な外交術をもてあそぶ。それが如何なるものであつても多くの事實、況んや精神病といふやうな諸事實との接觸

に入ることを彼は躊躇する、手を汚すのを懼れるのである。約言すれば、科學が茲に哲學から期待する權利を持つてゐたところの理論、——融通性があり、改善されることが出來、認識された事實の全體に卽するところの理論、——之をば哲學はそれに與へることを欲しなかつたか或は能くしなかつた。

そこで、全く自然に、科學者は次のやうに考へたのである、「心的なものと大腦的なものとの間に假定された對應を、或定まつた諸點に於いて、或定まつた樣式に局限せよと、事實と理由とに據つて、要求することを哲學がしないから、自分は暫くその對應が完全であつてそれらが同等或は寧ろ同一であつたものとして扱つて行かう。自身、生理學者として、自分の使用し得る範圍の方法—純粹に外部的な觀察と實驗とを以つてして私は腦だけしか見ない、そして腦に就いてのみの手がかりしか持たない、故に假に恰も思想が腦の一作用に過ぎなかつたものとして當たつて行かう、斯うすればいつそう大膽に運んで行けるし、いつそう容易に前進することが出來るだらう。自分の權利の限度を識らない時には先づその限度がないと想つてかかることだ、退讓は後から何時でも出來る。」といふやうに科學者は考へたのである、そして若し哲學が要らぬものであつたなら彼は其處に止まつてゐただらう。

しかし哲學は誰にでも要る。で科學に必要な、內部と外界との二重の經驗に當て篏められるやうな、融通性のある理論をば哲學者が持つて來るのを待つ間に、科學者が自らの遵奉するのに有利だ

と自覺したところの方法の規則に最も好く調和するやうな、既製品の、寄せ集め的の學說をば舊い形而上學の手から受け容れたのに不思議はない。また選擇の餘地もなかつたのである。過去三世紀の形而上學が此點に就いて吾等に殘した唯一の假說が恰も心と身體との間の嚴密な竝行論なのであつて、心が身體の或狀態を示すとするか、身體が心をあらはすとするか、或はまたそのいづれでもない一の原本を、違つた言語に、移した二個の飜譯が心と身體とであるとするか、三個の場合に於いて、大腦的なものは正確に心的なものに對して等値となる。此臆說へどうして十七世紀の哲學は導かれて行つたのであらうか？　當時まだ存在するかせぬであつたやうな、腦の解剖學と生理學からでは確かにない、亦精神の構造と作用と傷害との研究からでは猶更なかつたのである。否、此臆說は、近代物理學の諸希望に一の定形を與へる爲に、少なくともその大體に於いてその爲に、構想されたところの形而上學の一般的原理から全く自然に演繹されたものなのである。ルネサンスの後を繼いだ多くの發見、――主にケプレルとガリレオのそれ、――は天文學上及び物理學上の諸問題をば力學の問題に還元することの可能性を初めてあきらかにした。其處から、無機と有機との物質的宇宙の全體をば、數學の諸法則に從屬するところの、一個無際涯の機械として想像しようとする考へが出て來たのである。で、一般に生物體、特に人體も、時計の機構のうちの齒車などと同じ樣にその機械のなかで嚙み合つて動かねばならぬものとなつた、吾々の何人が何を行つてもそれは初めから決定されてゐて、數學的に計算され得るものとなつた。斯くして人間の心の創造力が否

定されてしまつた、若し心が存在するとしても、その繼起する諸狀態は身體が延長と運動とに於いてあらはすのと同じものをば思想と感情との言語へ飜譯するに止まらねばならぬこととなつた。尤も、デカルトは其處まで行つてゐない、その具備する實在感を以つて、學說の嚴密さがその爲に失はれても、彼は猶、自由意志に少しの餘地を殘して置くこととを選んだ。そして、スピノザとレエプニッツとに到つて、體系の論理の爲に掃蕩されて、この留保は解消したのではあるが、そして此兩哲學者が身體の狀態と心のそれとの間に於ける恆常的竝行論の臆說をその完全な嚴密さに於いて設定したのではあるが、併し少なくとも、二人は心を以つて單に身體の一反映とはしなかつた、身體が心の反映であるとも彼等は言つたであらう。しかし二人は小さくされて窮屈になつたデカルト學派に途を開いたのであつて、此派に依ると心の生活は腦の生活の一面に過ぎず、「心」と稱するものは或若干の腦の現象に還元され、意識は此等のものにほのかな燐光の如く添ははると言ふことになる。事實、十八世紀を通じて、デカルト派形而上學の此漸次的簡單化の跡を吾人は辿ることが出來る。自ら縮むにしたがつて、それは愈々一の生理學の中へ浸み込んで行くのであるが、之に取つてそれは、ちやうど、必要な自信を與へてくれるのに甚だ都合の好い哲學となる。斯のやうにしてラメットリ、エルヴェシュス、シャルル・ボネ、カバニスなど、そのデカルト學派に對する派生的關係をよく識られてゐる多くの哲學者が、十八世紀の科學にそれが十七世紀の形而上學から最も善く利用し得る部分をば傳へたのであつた。そこで、今日心理的なものから物理的なものへの關係

に就いて哲學的議論をする科學者が竝行論の臆說に贊同するといふことが、理解されるわけである、形而上學者は彼等に殆んど外のものを提供しなかつたのだ。更に同じ先驗的構成の方法によつて獲得され得る他のすべての理論を措いて彼等が竝行論を採擇するといふ事も、亦認容される、この哲學說のうちには彼等の前進を鼓舞するものが存するのである。しかしそのうちの或者が吾人に向つて之が科學である、腦の生活と心の生活との間の嚴密な且つ完全な竝行を示すものは經驗だと言ふに到つては、呀　否！　吾人は彼を制止して、そして對へねばならぬ、貴君は科學者であるが、此說をば、形而上學者が主張するやうにして、主張されるのに尤も差支へはない、しかしその時君に於いて語る者は最早科學者ではない、それは形而上學者である。貴君は吾人が貸してあげたものを單に返してゐるだけなのだ。君が持つて來た學說を、われわれはよく識つてゐる、それは私達の仕事場から出たのだ、それを製造したのは、哲學者であるところの、私達だ、そしてそれは舊い、もう大へん陳腐な品物なのだ。と云つて無價値でもない事は、確かである、しかしその爲に優れてゐるわけでもない。それをそのあるがままのものとして取らう、そして現代の生理學や心理學の花が開く前に既に、完全な且決定的な形式を取る事が出來たところの、そしてそれによつてすなはち形而上學的構成であると認知され得るところの學說をば、科學の結果として、事實に卽して形成され、また還つて之に當て嵌められることの出來る理論として通用さすのは止すこととしよう、と。

そこであらゆる先入見から離脫してただ認識された事實からのみ考へる時に於いて示されるままに、心の活動から腦の活動への關係をば言ひ定めてみるとどうなるであらうか？　斯の種の定言は、必然的に一時のものであつて、高いか低いか一の確らしさをしか望むことが出來ぬ。が少なくともその確らしさは增して行き、その定言は事實の知識が擴がるにしたがつて愈々正確となることが出來るであらう。

精神の生活とその生理的隨伴とを注意深く吟味すると常識に理由があるといふ事と、一の人間意識のうちには、それに對應する腦のうちに於けるより、無限に以上のものが在るといふ事とを信ずるやうになる。以下が、大體に於いて、私の到達した結論である（二）。活動最中の腦の內部を觀察し、諸原子の來往の跡を辿り且つそれ等のするところのすべてを解釋し得る人、斯やうな人は精神の內に生滅するものの幾分を恐らく知るであらう、しかし僅のことしか知るまい。その人はその內のちやうど身體の擧措、態度及び運動にあらはされ得るもの、心の狀態が進行中の、或は單に生起しかけの動作に就いて含むものだけは識るだらう、その餘は捉へることが出來ぬ。意識の內奧に流れる多樣の思想や感情に對して、彼は、舞臺の上で俳優がする科（しぐさ）をはつきりとは觀るが、しかしその白（せりふ）の一語をすら理解出來ぬ人と同じ地位に居るのである。尤も、俳優の動きと、その所作とその態度とは、演じられてゐる戲曲のうちに於いてそれぞれの存在の理由を持つのであつて、臺本を識つてゐれば、およそ科（しぐさ）を想像することが出來る、しかしその反對は眞ではないので、科（しぐさ）だけの知識

ではその劇に就いて極く僅かの事しかわからぬ、何故ならば好い芝居にはそれを運んで行く動作より遙かに以上のものが含まれてゐるからである。同じやうに、大腦機構に就いての吾人の知識が完全であつて、そして吾々の心理學も亦完全であつたなら、一の定まつた心の狀態に對して腦のうちに起こるものを推量出來るに違ひない、しかしその反對の推測は不可能であらう、何故ならば同一の腦の狀態に對して、いろいろ違つた心の狀態の多數が、等しく適合するからである(三)。但、よく注意すべきは、心の狀態のどのやうなものでもが與へられた腦の一狀態に對應し得ると言ふのではない事である、茲に額緣がある、どのやうな繪でもそこへ入れられるといふ事はない、それと同じ形と同じ大さとでないものは初めから除外されるから額緣は繪に就いて何物かを決定する。腦と意識とに取つても斯の通りである。比較的簡單な行爲、——身振り、態度、運動、——の方へ複雜な心の狀態が推移して行くとする時、それ等を準備するものが腦に違ひない限り、この心的狀態は正確に腦のその狀態の中へ嵌まつて行く、しかし此額緣の中へどれも皆よく嵌まるやうな樣々の繪が夥しくある、隨つて腦は思想をば決定しない、隨つて思想は、少なくともその大部分に於いて腦から獨立してゐるのである。

私の考へでは、心の生活のうちで以上の特殊な一面のみが腦の活動の上に描かれてゐるのであるが、之をば事實の研究によつて更に一層精確に記述する事が出來るやうになるであらう。知覺と感覺とに就ては如何？　吾々の身體は、物質界の中へ入り込んでゐて、刺激を受けるが、之に對して

適當の運動を以つて應へねばならぬ、腦、更に腦脊髓系統一般がこれ等の運動をば準備する、しかし知覺は全く別の物である(四)。意志する能力に就いては如何？　若干の自働機制が神經系統中にすつかり仕組まれてゐて、合圖とともに發動しようと待ち構へてゐるのであるが、身體は之等によつて有意的運動をば遂行する。腦は合圖の且つ發動さへの出發點である。有意的運動の居所とされるロオランド溝は其處に從業員がゐて、到着した列車をば或いづれかの線路へ入らす轉轍器操縱所に實際似た處がある、或はまたそれは一個の換路器であつて、それによつて一の與へられた外部刺激をば任意の發動的裝置と通じさす事が出來る、しかし運動の諸器官と選擇の器官と以外に、まだ他のものがある。選擇それ自身があるのである。最後に思想に就いては如何？　吾々が考へるとき、自らに向つて話してゐない事は稀である、思想を表はす發聲の運動をば實際に行つてゐない時には、吾人はそれを試作してゐるか或はそれを準備してゐる、そしてその幾分かが既に腦のうちに於いて描出されてゐねばならぬのである。けれど思想の腦に於ける機構は、私の思ふに、之に止まつてゐない、發聲の內部的運動は敢て缺くべからざるものでもないが、その奥に、更に精微な何ものかがあつて、それが主要なのである。すなはち精神のあらゆる繼起する方向をば象徵的に指示するところの生まれ出かかる運動がそれである。生きた、具體的な、如實な思想といふものに就いて、今まで心理學者が極く僅かの事しか語つてゐないのは、それが內部觀察に對して容易に手がかりを提供しないからだといふことは注意を要する。その名の下に普通研究されるところのものは思想自身で

あることが少なくて却つて表象と概念とをば一緒に組合せて造つた人工的模倣物であることが多い。しかし位置から運動を作り出せないのと同じで、表象を以つてしては、更に概念を以つてしてさへも、思想は組み立てられぬ。概念は思想の一停滯である、それは思想が、進むのを止めて、停まる時に或は戻る時に生まれて來る、ちやうど、障碍物に行き當たつた彈丸のうちに俄に熱が起こるやうなものである、けれど、熱が初めから彈丸のうちに存在してゐたのではないやうに、概念も亦部分として思想を構成してゐたのではないのである。試みに、一例として、熱と、生産と、彈丸との諸概念を繋ぎ合はせ、そして「內」と「自ら」との兩語に含まれてゐる內部性と復歸との二概念をその間に挿入して、「熱が彈丸のうちに自らを產む〔起こる〕」といふ句で、私のあらはした思想を再び造つてみよう。それが不可能だといふ事、思想が分割され得ない一の運動だといふ事、そして思想の運動の各瞬間に於いて若し思想が停止したなら精神のうちに起こるだらうところの表象がすなはち一々の語に相應する概念なのだといふ事はすぐわかつて來るに違ひない、——けれど思想は停止するものでないのである。で思想の人工的再造は止めにして、思想自身をば觀察してみよう、其處には狀態よりも寧ろ趨向がある、それは本質的に內部趨向の不斷の連綿たる變化と觀られるのであるが、これはまた絕えず外部趨向の諸變化、卽ち、精神の動きをば空間のうちに描いて、謂はば、之を比喩的にあらはすことの出來る行爲と所作とに飜譯されて行かうとしてゐる。これ等の試作された、或はただ準備されただけの運動は、識つても何の役にも立たぬから、大抵の場合、吾等

は之を知覺しない、しかし自分の思想を生きたままに捕へて、猶生きたまま、これを他人の心のうちに移し入れようと眞近く追求する時には吾人はそれ等に注目せざるを得ないやうになる。言葉は幾ら精選されてゐても、若しその律動が、その節調が、その言說のあらゆる音律的展開がそれを助け、生まれ出かかる運動の一連を以つて讀者を導いて、われ等が自ら描くに似たところの曲線をば彼も亦描くやうにするのでなければ、それは吾人がそれに言はさうとするところの事をば言はないであらう。文章の祕訣は斯の事に盡きるのである。それはたとへば音律家の術に似てゐる、しかし茲に言ふ音樂は、普通考へられるやうに、單に耳に訴へるものではない。音樂には如何に聽き慣れてゐても、佛蘭西語を解しない耳は、われわれが音樂的だと感ずる佛蘭西語散文とさうでないものとを、佛蘭西語として完全に書かれたものとそれに近いといふに過ぎぬものとを區別しないであらう、之が音の物質としての調和より全く以外のものが其處にある證據である。眞實には、文豪の術は言葉を使つてゐるといふ事を讀者に忘れさすにある。その求める調和は彼の精神の進み退く抑揚と、言說のそれとの間の或對稱なのであるが、この對稱たる甚だ完全であるから、言句に乘つて運ばれて、彼の思想の波の動きがわれわれに傳はつて來る、その時一々の言葉は、個々のものとして、最早存しない、ただ言語を貫いて脈動する意味在るのみである、直接に、中繼を經ずに、互に共鳴して感動するかの如き二個の精神在るのみである。故に話說の律動は思想の律動を複生する目的より持たぬ、然るに思想の律動とはすなはちそれに隨伴するところの、微かに意識的な、生まれ出か

かる諸運動のそれでなくて何であるか？　これ等の運動は、據つて以つて思想が外部化されて行爲となるものであるから、腦のうちに於いて準備されそして言はば豫め形成されてゐねばならぬのである。活動する腦の中へ若し徹り得た時恐らく見られたものは思想のこの運動的隨伴であつて、思想自身ではないのである。

換言すれば、思想は行爲の方へ向つてゐる、そして、若しそれが一の實際上の行爲として終らないならば、それは一個若くは以上の、單に可能的な假の行爲をば試作する。此等實際の或は假の行爲は、思想の空間に於ける縮小され簡單化された投影であり、その動きの節調を記すものであるが、それに就いて腦實質の內に描出されるものはすなはち之なのである。故に腦から思想への關係は複雜且つ微妙である。若し之を簡單な一定言のうちにあらはさうとするならば、粗野となるのは免れぬが、腦は模倣所作の、そして模倣所作のみの一器官であると言ひたい。その役目は精神の生活を所作にする事また精神が順應しなければならぬ外界の諸狀況を所作にあらはす事に存する。腦の活動が心の活動に對する關係はちやうど樂長の指揮棒の動きが交響樂に對するものに似てゐる。交響樂はその調節を司る此等の運動をばあらゆる點で超越する、同じやうに精神の生活は腦の生活以上に出てゐるのである。しかし腦は、ちやうどそれが精神の生活の內から運動として演じられ、物質化され得るあらゆるものを描出する所から、ちやうどそれが斯うして物質の中へ突き入る精神の尖端を構成する所から、あらゆる瞬間に於いて〔外界の〕諸狀況に對する精神の順應を確保して、精

神に絶えず實在界との接觸を保たしめてゐるのである。故に適切に言へば、それは思想の器官でも、感情や意識のそれでもない、しかし意識と、感情と思想とが實生活へ向つての緊張を維持し、隨つて實効のある行爲をし得るやうにするものはそれなのである。で、腦は生活への注意の器官である、と言ふ事も出來るであらう。

これが腦實質の輕微な變化によつて精神全體が侵されるやうに見える理由である。或種の毒物が精神に及ぼす結果と、更に一般に腦病が心の生活に與へる影響とに就いては前に語つた事があつた。斯のやうな場合に於いて、亂されるのは精神そのものなのであらうか、或は寧ろ事物の中へ精神を挿入する機構がさうなのではないだらうか？　狂人が妄語する時、彼の推論は最も嚴密な論理の規則に適つてゐる事が出來る、被害妄想狂の或者の述べるところを聽くと、その虛妄に陷るのは過度の論理の爲だといふ感じが起こさされる。彼の錯誤は推理の下手から來ないで、夢見る人のやうに、實在の外で、實在を除けて推論する事に存する。實際あると思はれる通り、病が腦實質の中毒から起こつたと想像しよう。腦のなにがしの細胞の中へ毒が推理を探し當てに行つたので、したがつて腦の何々の場所に推理に相應する原子運動があるのだと信じてはならぬ。否、侵されたのは確かに腦全體であらう、結び目が弱かつた時、弛むものは引張られた綱全體であつて、その或部分だけではない。しかし、錨纜の極く少こしの弛みで船が波上に搖れ出すやうに、腦實質全體にわたる僅かでもの變化で、精神も、その常に依り憑つてゐる所の物質的事物とすべての接觸を失つて、實在が

彼の下から脱れ出すやうに思ひ、躊躇として、眩暈する。事實、多くの場合に於いて精神錯亂の始まるのは眩暈感に比べられるやうな感情からなのである。患者は方角を失ふ。彼にとつて物品がこれまでのやうな堅さと、凹凸と、實在性とを持たなくなつたと訴へる。精神がその關係する物質界の部分へ嵌つて以つて集中されてゐたところの緊張の、或は寧ろ注意の弛み、之が實に腦變化の唯一の直接の結果なのである、――事物の作用に對して精神が實際の或は單に生まれ出かかる多くの運動反應のうちから應へられるやうにする裝置の全體が腦であり、それが正確であれば實在の中への精神の完全な挿入が確保されるのである。

精神から身體への關係は、大體に於いて、まづ斯のやうなものであらう。事實と理由とに據つてこの考への基く處を開陳したいがそれは今不可能である。併し自分の言説がそのままに信ぜられる事を要求も出來ない。如何すべきであらうか？　茲に一の方法があり、それを以つて私の攻撃する理論をば一擧に葬むり得るやうに見える、それは之を最も嚴密に解釋すれば腦的なものと心的なものとの間に於ける均衡の臆説は自家撞着に陷るといふことと、之によれば反對の二見地を同時に採用し且つ互に排斥する二個の記號系統を一時に使用せねばならなくなるといふ事とをば示すに在る。私は嘗て此證明をしてみた、それは極めて簡單なのではあるが、しかし實在論と觀念論とに就いての若干の豫備的考察を必要とするのであつて、之を説述してゐると餘り長くなり過ぎる(五)。尤も

均衡の説をば唯物論的な意義へ持つて行きさへしなければ、之に理解され易いやうな外觀を與へるやうにする事も出來るのである。しかも他方に於いて、純粋な推理のみから此理論を棄却すべき事があきらかにされるとしても、何がこの代りとなるべきかをそれは全く言ふ事が出來ない。で結局、前に言つて置いたやうに、やはり經驗の許へ趨らねばならぬこととなる。しかし考慮に入れねばならぬ普通及び病的狀態の多くをばどうして點檢すべきだらうか？　それ等を悉く調べるのは不可能である、そのうちの或ものを特に深く研究するのも餘り長くなる。ただ次のやうにすれば困難から脱けられさうだ、それは現在識られてゐる事實全體の中から、竝行論の主張に最も都合が好いと思へるもの、――それ等に於いてのみ、實を言へば、この主張が證明の一端緒を發見するらしく見えたもの、――記憶の諸事實をば採ることである、若しその時、これ等の事實の深い吟味が如何にして之を論據とする説を薄弱にし却つて吾人の提唱するものを確立するかをば、不完全に且つ粗雜にではあつても、簡單に示す事が出來れば、既に何かは獲られたのである。それで完全な證明が得られたのではない、まだ大いに不十分であるが、少なくとも之を何處に求むべきかは識られるやうになるだらう。以下この通りして行つてみよう。

事實大腦内に於いて或場所をあてがはれ得たところの唯一の思索作用は記憶、――更に的確には言語の記憶である。此講演の始めに、言語の諸疾患の研究が如何にして腦の何處其處の廻轉に言語記憶の何々の形態をば局限せしむるに到つたかに就いて回顧して置いた。ブロカが左側第三前頂廻

轉の傷害から如何にして言語の發音運動の忘却が惹き起こされ得るかを示して以來、失語症とその大腦的諸條件どに就いての愈々複雜な學説が努力の上に建てられて行つたのである。此學説に就いては吾等固より多くの異議を挿まねばならぬ。信頼すべき堪能の諸學者が、言語の疾患に隨伴する腦傷害の更に綿密な觀察に依據して、今日では之を反駁してゐるのである。吾人も亦、それから殆んど二十年になるが（此ことを新しく云ひ出すのは、それを自慢するが爲ではない、內部觀察がそれより有効だと信ぜられる方法に優り得る事を示す爲である）、當時動かし得ないとされてゐた此學説が如何に少なくとも改訂はさるべきものだと主張したのであつた。併しそれはどうでも好い！ 茲に一點があつてそれに就いては誰もが一致してゐる、それは多少とも明確に局限され得る腦傷害によつて言語記憶の諸疾患が惹起されるといふ事である。そこで思想を以つて腦の一作用とする説が、更に一般に腦の働きと思想のそれとの間に於ける一の竝行或は均衡を信ずる人々が此結果を如何に解釋してゐるかをば觀てみよう。

その人々の解釋ほど單純なものはない。多くの追想が其處に、解剖的要素の一群に印された變化の形の下に腦の內に蓄積されてゐる、若しそれ等が記憶から消失したなら、それはそれ等の棲息してゐた解剖的諸要素が變質されて了つたか破壞されたかしたからである。先刻寫眞乾板や蓄音機レコオドを引いて説いたが、記憶のあらゆる大腦的解釋のうちにさういふ引喩をば發見する、外界の事物によつて作られた印影が、ちやうど感光板やレコオドの上に於いてのやうに、腦の內に存續し

てゐるといふことになるのである。細かく觀れば、これ等の比喩が如何に欺瞞的であるかがわかる。たとへば或物に就いての私の視覺の追想が、若しほんたうに、この物によつて私の腦に殘されて行つた印影であつたなら、私は決して一つの物の追想を持たないで、何千、何百萬の物のを持つだらう、何故ならば最も簡單なそして最も動かぬ物でも、それを知覺する私の位置にしたがつて、形と大きさと色合とを變へるからである、故にそれを觀る時私が忍耐して絶對的に固着してしまはない限り、私の眼が眼窩のうちで凍てついてしまはない限り、無數の視象が、決して重ね合はせられないで、交はる交はる私の網膜の上に描かれそして腦へ傳達されるだらう。これが若しその顏の表情は變はり、その身體は動き、會ふ度毎にその衣裳と周圍とが異つてゐる一個の人の視象であつたなら、どうなるだらうか？ しかも私の意識が物なり人に就いて單一の影象をば、或は殆んど單一のやうな、實際的には不變な一個の追想をば提供するといふ事は否み得ない、之が茲に機械的な登錄より全く以外のものがあつた事のあきらかな證明である。また聽覺の追想に就いても之と同じことが言へる。同一の語でも、いろいろの人によつて、或は同じ人によつてでも時を違へて、異なる句のうちで發音されると、それぞれ一致しないレコオド音を生ずる、さういふレコオド音にどうして言葉の音の比較的不變な且單一な追想が比較され得ようか？ 唯これだけの考察で既に、大腦皮質によつて自働的に登錄される追想それ自體の變質や破壞に言語記憶の諸疾患をば歸する説を疑はせるに足るのである。

しかし此等の諸疾患に於いて起こるものを觀て行かう。腦傷害が重大であつて、言語記憶が深く侵されてゐる場合に、多少とも強い刺激、たとへば一の感動が、永久に失はれたやうに見えた追想を急に引き戻して來る事がある。若し變質か破壞かされた腦物質の内に此追想が貯へられてゐたのであつたなら、斯ういふ事が起こり得るだらうか？　寧ろ腦は此追想を喚び起こすのに役立つたのであつて、之を貯藏してゐたのではないとする方が遙かによく事實と符合するのである。失語症患者は想ひ起こさうとする言葉が思ひ出せなくなる、彼はその周圍をぐるぐる廻つてゐるやうで、ちやうど觸れるべきその點へ的確に指を持つて行く氣力を持たぬやうに見える、事實、心理學の領域に於いては、力の外部的標徴は恒に的確といふ事なのである。しかし求める追想は確かに其處に在るやうに見える、よく、忘れたと思ふ言葉の代りに患者がいろいろ遠廻しの事を云つてゐるうちに、ちやうどその言葉を言ふことがある。此場合弱つてゐるものは、大腦機構が確保せねばならぬところの事態に對する調整なのである。更に特別に、侵されてゐるものは、此追想が、若し意識的であつたなら、それによつて行爲へ展開して行くだらうところの運動をば豫め試作して以つて此追想を意識的とする能力である。或固有名詞を忘れてしまつた時、それを思ひ出すのにどうするだらうか？　いろはの一字々々を順に試してみる、先づ口のなかで言つてみる、それでいけなければ、發音してみる、すなはちその中から選ばねばならぬいろいろの運動態勢のうちに、交はる交はる、自分を置いてみるのである、望みの態度が見付かりさへすれば、その言葉の音は恰もそれを受ける爲

に用意された枠緣の中へのやうに其處へひとりでに嵌つて來る。大腦機構が確保せねばならぬのは此實際の或は假の、遂行される若くは試作される模倣の動作なのである。そして之をば、疑ひもなく、病患が侵すのである。

さて次に進行性失語症に於いて、すなはち言語の忘却が次第に重大となつて行く場合に於いて觀られる事を考へてみよう。一般には此場合、病症が文法を識つてゐるかのやうに、言葉は定まつた順序を以つて失はれて行く、最初に固有名詞が、次に普通名詞が、それから形容詞が、最後に動詞が影を隱す。此事は、少し考へると、腦實質のうちに追想が蓄積されるといふ臆説に根據を與へるやうに觀える。固有名詞、普通名詞、形容詞、動詞と、謂はば、順に重なり合つた層を構成してゐるのであつて、そして此等の層を次から次へ傷害が侵かして行くのだと思はれる。しかしながら此病疾は非常に多種の原因に依存して、甚だ多樣の形式を採り、腦の當該部の如何なる點からも始まつて、どの方向へも進んで行くことが出來る、然るに追想消失の順序は恒に同一なのである。若し病疾の侵すものが追想それ自體であつたなら、斯ういふ事が起こり得るだらうか？　故にこの事實は他の説を以つて解釋されねばならぬ。次の甚だ簡單な解釋をば私は提出したい。先づ、固有名詞が普通名詞よりも、後者が形容詞よりも、形容詞が動詞よりも先に失はれるといふのは、普通名詞より固有名詞をば、形容詞より普通名詞をば、動詞より形容詞をば思ひ出す方が難しいからなのである、想起の作用はあきらかに腦の助けを藉りるから、腦傷害が重大となるに隨つてそれは次第に

より容易な場合へと限られて行かねばならぬ。しかし思ひ出す事の難易は何處から來るのか？　そして何故、あらゆる言葉のうちで、最も想ひ浮かべ易いのが動詞なのであるか？　その理由は全く簡單で、動詞が行爲を表はすから、そして行爲が動作に寫され得るからなのである。動詞は直接に動作に寫される、形容詞はその蔽ふ動詞の取次によつて、名詞はその屬性の一をあらはす形容詞と此形容詞中に含まれた動詞との二重の中繼によつて、固有名詞は普通名詞と形容詞と更に動詞との三重の仲介によつて初めて然うされる、故に、動詞から固有名詞の方へ行くに隨つて、直に模倣され得、身體によつて動作され得るところの行爲から益々離れて行くこととなる、求める言葉によつて表はされる概念をば運動として表象するのに益々錯綜した技巧が必要となつて來る、そして此等の運動を準備する仕事は腦に振り當てられたものであるから、またその當該部の傷害が深ければ深い程この點に關するその作用は次第に減少し、退歩し、簡單となるものであるから、固有名詞や普通名詞の想起を不可能にするやうな、組織の變質または破壞が、動詞のそれをば殘して置く事に何の不思議もない。茲でも、他處に於いてと同じく、心の活動から動作として抽出されたものを腦の活動に於いて觀る事を、そして後者を前者に均衡する物としない事を事實は吾々に勸めるのである。

しかし、追想が腦に貯藏されてゐたのでなかつたら、ではそれは何處に保管されてゐるのか？――眞實を言へば、既に物體に就いて語つてゐるのでない時に、「何處に」といふ質問が猶一の意味を有するかどうか疑はしいとせねばならぬ。寫眞乾板は箱の中に、蓄音機レコオドは描出しに保管

されてゐる、しかし見たり觸つたり出來る品物ではない追想に何故容器が要るのだらうか、またどうしてその中へ入れるのだらうか？　しかし若し人が固執するならば、追想が入れられる容器の概念をば、純粋に比喩的な意味に取つて、受け容れよう、そして全く素朴にそれが精神のうちに在るのだと言はう。私は假設を作らぬ、私は神祕的な實體をば引張り出さない、私は觀察に止まつてゐる、何故ならば意識より以上に直接與へられたもの、それより以上に明らかに實在するものはなく、そして人間精神は意識そのものだからである。然るに、意識は何よりも先づ記憶を意味する。今此瞬間に私は諸君と話してゐる、私は、「はなし」といふ語を發音する、私の意識が此語を一擧に表象する事は明らかである、さうでなければ、それは之をば一語と觀ないだらうし、之に一の意味を與へもしないであらう。けれども、私が此語の最後の音綴を發聲する時、最初の二つは既に發音されてゐた、其二つは之に對しては過去である、したがつて之は現在と呼ばれねばならぬ。しかし此最後の音綴「し」をば、私は瞬間的に發聲したのでない、之を言つた間の時間が如何に短かかつたとしても、それは部分に分解出來るもので、そして此等の部分はそのうちの最後のものに對しては過去である、此ものこそ決定的現在であると見えるが之も亦やはり分解出來る、斯のやうにして如何に努めても、過去と現在との間に、隨つて記憶と意識との間に境界線は引けるものでない。事實を言へば、「はなし」といふ語を發聲する時、單に此語の初め、中、終りばかりでなく、更にこの前にあつた諸語と、更に斯の句の中で既に發音したすべてとが私の精神に現に在るのである、さう

でなかつたら、私は自分の言説の筋を失つてしまつただらう。さて、この言説の句切りが異つてゐたなら、斯の句はもつと早く始まり得たのである、それは、たとへば、その前の句を包含したであらう、そして私の「現在」は一層過去の中へ延び擴がつて行つただらう。この推論を徹底的に進めて行くとしよう。私の言説が多年來、私の意識の最初の目醒めこのかた續いてゐて、それが唯一の句に於いて展開してゐて、そして私の意識が十分未來から脱離し、行爲に十分無關心となつてゐて、この句の意味を大觀するのに專ら努めてゐると想像しよう、此場合この句全體の保存に釋明を要しないのは、ちやうど「はなし」の最後の音綴を發音する時、初めの二つのものが存續する事にそれが不要なのと同じである。然るに、私の信ずるには吾等の內部生活全體が意識の最初の目醒から着手された唯一の句のやうなものなのであつて、その句は句讀點で鏤められてはゐるが、何處に於いても段落點で切られてはゐないのである。隨つてまた私は吾々の過去全體が其處に、潛在意識として在る、——といふ意味は吾等の意識が、之に就いて識る爲に、自分自身から逸脱することもまた他の何ものを引き着ける事も要らないやうにしてそれが吾々に現存してゐると思ふのである、その含むすべてのものを或は寧ろその在るがままのすべてを判然と見透す爲に、それは一個の障壁を除きさへすれば、一張の帷幔を揚げさへすれば宜い。しかも、障壁は好い役に立つ！　帷幔は貴重この上もない！　吾人の注意の生命への集中を確保する仕事をば斯の腦がする、そして、生命自らは前方を視つめてゐる、未來を照らして之に備へる爲に過去の助けを藉り得る限りだけしかそれは後

へ引返さない。精神に取つて生きるといふ事は、本質的に、遂行すべき行爲に自らを集中する事である。故に事物の中へ割り入つて行く事であるが、この仲介となる機構が意識のうちから行爲に利用し得るものをば悉く抽出して、餘の大部分を隱してしまふ。これが記憶の作用に於ける腦の役目なのである、それは過去を保存する爲にではなく、却つて先づ之を掩ひ、次にそのうちの實際上有用なものをば露はす爲に役立つ。そして斯れが亦精神一般に對する腦の役目なのである。それは精神の內から運動として外部化され得るものを別け離して、この運動の枠緣の中へ精神を挿入し、以つて大抵の時その視野を制限はするが、しかしまたその行爲を有效にもする。これはすなはち精神があらゆる方面に於いて腦以上に出てゐるといふ事、及び腦活動は精神活動の極小部分にしか相應しないといふ事なのである。

しかしこれは亦精神の生活が身體の生活の一結果ではあり得ないといふ事、却つて精神によつて身體が單に利用されてゐるやうにすべてはなつてゐるといふ事、また隨つて身體と精神とが互に離れられないやうに結びつけられてゐると想像する理由が毫もないといふ事に外ならぬ。無論急いで、まだ殘つてゐる半分間ばかりのうちに、人類の提起し得る諸問題のうちでも最も重要なものを裁斷してしまはうとするのではない。しかし之を避ける事も好もしくない。何處から吾等は來たのか？　此世界で吾々は何をしてゐるのか？　何處へ吾等は行くのか？　人を活殺するに足る此等の疑問に

對して若し哲學が眞に何等答へるべきものを持たぬのなら、或は若しそれが例へば歴史や生物學の問題を人が解明するやうに此等をば漸次明らかにして行けないのなら、若しそれが益々深い經驗と愈々鋭い實在觀とを以つて此等の解決を資けないのなら、若し心と身との假説的實體から抽出して來る理由を以つて一は心不滅を肯定し他は之を否定する兩派の人々をばそれが無限に諍論さして置かねばならぬのなら、これは殆んど、パスカルの言葉を轉用して、哲學全體が一時間の忍耐に値せぬと云ふべき場合であらう。尤も、心不滅その事は經驗的に證明され得ない、すべての經驗は或限られた繼續に關する、そして宗教が心不滅に就いて語る時、それは啓示に訴へるのである。しかし或時間Xに對する「死後に於ける」心の存續の可能性をば更には蓋然性をば、經驗の立場に於いて、確立し得るといふ事は何かになる、大切な事になる、此時間が無際限であるかないかの問題は哲學の領域の外に在るものとして置かう。さて、斯のやうに地味な規模へ縮小されてなら、心の運命に就いての哲學的問題が解決出來ぬものだとは私は斷じて思はぬ。此處に腦が在つて働いてゐる。其處に意識が感じ、思惟し、意志してゐる。若し腦の働きが意識の全體に相應するものならば、若し腦的なものと心的なものとが均衡するならば、意識は腦の運命に隨つて宜く、死がすべての終りとなるだらう、少なくとも經驗はその反對を言ふまい、そして心存續を肯定する哲學者は彼の説をば何かの哲學的構成、――概して壊れ易い物――の上に建てることしか出來ぬ。しかし若し、吾人がそれを示さうとしたやうに、心の生活が腦の生活を超えるならば、若し意識の中に生起するものの

僅かの部分を運動に飜譯することに腦が止まるならば、その時は心の存續が非常に眞實らしくなるから、證據提出の義務は肯定者へよりも遙かに寧ろ否定する者に振りかかることとなる、何故ならば死後に於ける意識の消滅を信ずる唯一の根據は身體壊敗の事實に在るのだが、若し意識の殆んど全部が身體に對して獨立してゐるといふ事も亦確認されるところの事實であるならば、此根據に最早價値はなくなるからである。心存續の問題を斯樣に扱ふことによつて、因襲的形而上學が之をば置く高所から之を降ろすことによつて、之を經驗の分野へ移し入れることによつて、吾等は疑ひもなくその根本的解決をば一擧に獲得することを斷念してしまつたのである、しかしそれは止むを得ないのではなからうか？　哲學に於いては、それが完全と見做される故に改善され得ないところの、決定的な一の結果を目さす純粋推理と、そして無際限に補訂され得る近似の諸結果をしか與へないところの根氣強い觀察との孰れかを選擇せねばならぬ。第一の方法を採るならば、ただちに確實さを獲ようとしたが爲に、吾々は恒に單なる確からしさのうちに或は寧ろ唯の可能性のうちに止まつてゐねばならぬ、何故ならば等しく理路整然とし、等しく眞實らしく見える正反對の二説をば無差別に證明するのにそれが役立たぬことは稀なからである。第二のものは初めは確からしさをしか目指さない、しかしその活動する地盤に於いては、確からしさが無限に增殖し得るから、それは吾人をば次第々々に實際的には確實さに等しい處へまで連れてゆく。哲學研究の此二樣の方法に就いて私の選擇は濟んでゐる。若し少しでも、諸君のを導く上に私が貢獻し得たとしたら私は滿足である。

〔註〕（一）此講演はギュスタヴ・ル・ボン博士の主宰の下に編纂されてゐる科學的哲學叢書（フラムマリヨン刊）の「現代唯物論」と題する一卷のうちに、他の諸君の研究と共に、發表されたものである。

（二）此點の十分な論議に就いては、吾人の著書、物質と記憶、巴里、一八九六年（主に第二及び第三章）を參照されたい。

（三）更に此等の諸狀態は漠然と、粗略にしか表象され得ないだらう、或定まつた人の定まつた心の狀態といふものはすべて、その全體に於いては、何か豫見出來ない且つ新しいものなのである。

（四）此點に就いては、物質と記憶、第一章をば參照。

（五）此書の終りに吾人はそれをば述べてゐる。最後の論文を參照。

三

「生者の靈像」と「心靈的研究」

千九百十三年五月二十八日　倫敦の心靈研究協會に於いてされた講演。

この協會の議長の席に招請される光榮を與へて下さつたことを先づ深く感謝致したい。此光榮に對して、私は殘念ながら何の功績も持つてゐない。この協會の研究される諸現象もただ書物を讀んで識つてゐるだけで、私自身體驗した事も觀察したことも無いのです。それにどうして、各位と同じ研究に沒頭されてゐる諸名家が交互に占められる事になつてゐる此席へ私を御呼びになつたのであらうか？　これにはやはり「透視」或は「遠感」の働きがあつたので、私が各位の研究に對して持つ興味をば遠くから御感じになり。また私がいろいろの御報告を精讀し、御發表になるものを逸さないやう熱心に拜見してゐますのを、四百キロメエトルの距離を隔てて、お視になつたのではないかと思はれる。心靈現象といふ未知境の探險に各位が費された所の工夫と、洞察と、忍耐と、根

氣とは實に賞讃すべきものだと常々感心してゐました。しかしこの工夫よりも更にこの洞察よりも更に、諸君の一貫した粘り强さよりも更に、公衆の大部分の偏見と鬪つて、勇敢の人をすら逡巡させる嘲笑の的と求めて成られる爲に、最初の數年間に於いて殊に、必要だつたところの各位の勇氣に私は感歎するものである。當心靈研究協會の議長に選ばれた事を私が口で言ひ得る以上に得意とする理由は實に玆に在る。私は何處かで或少尉の話を讀んだことがありますが、それは戰ひ激しくなるにしたがつて聯隊長以下相繼いで戰死し或は負傷して倒れ、終に彼自身に聯隊を指揮する榮譽が降つて來た、彼は一生その事を想ひ浮かべ、一生その事を語つてゐたので、その二三時間の追想が彼の全生涯に染みわたつてゐたといふのです。私はこの少尉である、そして諸勇士の聯隊の長官に、私を二三時間ではなく數箇月の間もしてくれた意外の幸運をば常に自ら祝福してゐることでありませう。

心靈研究に對して諸種の偏見を持つてゐる人は猶少なくないが、それはどういふ理由に基くのであらうか？　尤も、各位のされてゐるやうな研究を、「科學の名に於いて」、排斥するのが主に生半可の學者であることは爭はれない、多數の物理學者、化學者、生理學者、醫家が此協會に入つて居られる、また會員ではないが、諸君の研究に興味を持つ科學者も多數になつて來てゐる。しかしながらほんたうの學者達が、實驗室内での業績なら何でも、如何に微細なものでも、進んで受け容れようとするに拘らず、各位の齎されるものに限つて容赦なく排斥し、諸君の研究の成果をすべて一

括して棄却してしまふ事が未だ往々にしてある。これはどうしてであらうか？　自分も亦批判することの面白さの爲に斯の人々の批判を批判しようといふ考へは私全く持つてゐない。哲學上に於いて反駁に費された時間は大體失はれた時間であると自分は思つてゐる。無數の哲學者の間に互に入り亂れて提起された無數の駁論に就いて、果して何が殘つてゐるか？　何もか、或は極く僅かのものかである。看過し得ないものまた存續して行くものは一人が實證的眞理として齎したものに限られてゐる、眞の肯定はその固有の力に據つて錯誤概念に置き換はるものであつて、また、何等の駁論を用ひないで、自然に最も有力な反駁となるものである。しかし玆で私のしようとするのは決して反駁や批判ではない。或人々の抗議とまた或人々の嘲笑との背後に、見えないが而も儼として、一種の形而上學が自らを意識しないで存してゐる、――無意識的であるが故にそれは無定形であり、無意識的である故にそれは、哲學の名に値するものが必ずせねばならぬやうに、觀察と實驗との結果に絶えず自らを一致させて行くことが出來ない、――といふ事と、尤も此形而上學の發生は無理ではなかつたといふ事と、孰れにしても久しい以前から出來上つてゐた人間精神の一習癖にそれが根を持つてゐる事と、斯の理由によつてそれの根强さとそれの通俗的普遍性とが首肯されるといふ事とを私はあきらかにしたいのである。それを蔽ふものを拂ひ除けて、直にそれに迫り、それの價値如何を露はさうと思ふのである。しかし之を遂行して、以つて各位の希望される處へ到達する前に、諸君の使用される方法に就いて一言したい、――此方法が若干の科學者達をまごつかせること

は容易に肯かれ得るのである。

玄人の科學者に取つて一等不愉快なのは、彼のと同じ範圍の科學の中へ、彼が恒に戒心して避けてゐたところの探究と驗證との手段が導入されるのを見る事である。彼は傳染を恐れる。その最も正當な權利として、彼が自分の方法に執着するのは恰も工人が各自の道具に對するやうなものである。彼はそれをばそれ自身の爲に、それの與へるもの如何に關せず、愛する。ウイリアム・ゼエムズが素人科學者と玄人との區別を定義して、前者が獲得された結果に特に興味を持ち、後者がその爲に使用された手段に之を置くとしたのも、全くこの事實に基いたのだと私は思ふ。然るに、各位の扱はれる諸現象は自然科學の對象になるものと無論同種である、にも拘らず各位の餘儀なくしてではあるが、適用される方法は自然に關する諸科學のそれと屢々何の關係も持つてゐない。

私はそれ等が同種の事實だと言ふ。その意味はそれ等が確かに法則をあらはしてゐるといふ事と、及び、それ等も亦、時間と空間とに於いて無際限に繰返され得るといふ事とである。それ等は、たとへば歴史家の研究する事實のやうなものではない。歴史、之は繰返さない、アウステルリツの會戰は一度あつた、そして最早決してないだらう。同じ歴史的諸條件が反復される事はあり得ないから、同じ歴史的事實も起こり得ない、そして法則といふものは常に同じい若干の原因に對して、亦常に同じい一の結果があるといふことを必ずあらはすものであるから、本來の意味に於ける歴史は、法則の上にではなく、却つて特殊的な諸事實と、及びこれ等がそのうちに起こつた處の、等しく特

殊的な諸情態との上に立つものである。其處に於ける唯一の問題は、事件が果して空間の或定まつた點に於いて、時間の或定まつた瞬間に生じたか、またそれが如何にして起こつたかを知るに在る。之に反して、たとへば一の眞の幻覺——非常に遠く、地球のちやうど反對側などにでも住んでゐる親類や知人に病人或は瀕死者のあらはれる事——は、若しそれが眞實なら、物理的、化學的、生物學的諸法則と同じやうな法則を疑ひもなくあらはすところの一の事實なのである。暫く、假定して、此現象は兩意識の一が他に働きかける作用から生ずるのであり、意識は斯のやうに眼に視える仲介なしに互に交通し得るのであつて、諸君の言はれるやうに「遠感」があるのだとしよう、若し遠感が一の實在する事實ならば、それは無際限に繰返され得る事實である。更に進んで考へると、若し遠感が實在するなら、それはあらゆる瞬間に於いて總べての人々のうちに作用してゐるのであるが、たゞその力が甚だ弱いから注意されることがないか、或はそれが吾人の意識の閾を跨えて入つて來ようとする瞬間に、吾人の更に大きい利益の爲に、大腦機構がそれを制止するのだといふ事があり得る。吾々は恒に電氣を起こしてゐるのであつて、空氣中には常に電氣があり、人は磁流の中を往來してゐる、にも拘らず無數の人々が非常に多くの年代の間電氣の存在に全く氣が付かずに生活して來た。吾人も亦、遠感の傍を通りながら、それを知らなかつたのかも知れぬ。しかしこれはどうでも宜い。孰れにしても次の點は否定され得ない、それは、若し遠感が實在するなら、自然現象としてであつて、そして、一度それの諸條件を識るならば、遠感の働きを見る爲に、「生者の靈像」

を待つ必要がなくなるのは、恰も電光を觀る爲に、昔のやうに天空の好意と暴風雨の光景とを今では俟たなくて宜いのと同じだといふ事である。

故に茲に在る現象は、その性質上、物理的、化學的、または生物學的事實と同じやうにして研究されねばならぬやうに觀える。然るに、諸君はそのやうにされない、各位が止むを得ずして擇られるものはそれと全然別個の一方法で、歴史家のそれと豫審判事のそれとの中間に位するやうなものなのである。ずつと前に起こつた眞幻覺を扱ふ時には、諸君は史料を研究し、之を批判して、歴史の一頁を書かれる、すぐ昨日あたりの事なら、各位は一種の豫審をお始めになる、幾人かの證人を訊問し、對質を行ひ、彼等の身許性行を調べられる。自分としては、三十年の間諸君が撓まずに續けられた見事な調査の結果を回顧する時、誤謬を避けるに就いての各位の愼重さに想到する時、各位が選定された諸件の大多數に於いて、幻覺が眞であると認定される前に既に、如何にその幻覺の話が一人或は以上の人物に傳へられ、屢々書き止められてさへゐたかをば觀る時、事實の莫大な數と、殊にそれ等の相似と、それ等が同一型に屬する事と、一々分析され、檢査され、批判を受けて來たところの、互に無關係な多數の證言の一致とを考へ合はす時、——私が遠感を信ずる樣になるのは、たとへば、天下無敵アルマダ艦隊の擊滅をば私が信ずるのと同じである。これはピタゴラスの定理の證明が私に與へる數學的確實さではない、これはガリレオの法則の驗證が私に齎らす物理的確實さでもない。しかしこれは歴史的或は法律的材料に於いて獲得し得る全確實さなのである。

しかし茲に恰も識者のかなりの多數を錯誤させるものがある。この人々は自分等の嫌忌の斯の理由をば善く辨へないで、若し實在するなら、確かに法則に從ふところの、また延いて諸自然科學で使はれる觀察と實驗との方法に當て嵌まるべき筈の諸事實をば歴史的に或は法律的に扱はねばならぬといふ事を不思議に思ふのである。此等の事實が工夫されて實驗室内で起こり得るやうになつたなら、彼等は進んで之を受け容れるだらう、それまでは、之を疑はしいとするのである。「心靈研究」が物理學や化學と同じやうに進行しないといふ事から、それが科學的でないと彼等は結論する、そして或事實が實驗室内へ入り得る爲に之に必要な抽象的な單純な形式をば「心靈現象」は未だ採るに到らないから、この人々はそれを虚妄だと憚らず言つてしまふ。以上が、私の思ふのに、ある科學者達の「潜在意識的」推論なのである。

諸君の結論中の或ものに向つて提起される多くの反駁の根抵にも、之と同じ氣持ち、具體的なものに對する同じやうな侮蔑がまた發見される。その例を一つだけ紹介したい。先頃のことであるが、私の往つた或社交的な集まりで、話題がちやうど諸君の研究される現象へ入つて來た。わが醫學界に於ける屈指の名家で、また科學者として最高の一權威である人も其處に居合はせてゐた。周圍の話をばその人は注意深く聽いてゐたのであるが、さて自分も口を開いて大體次のやうな言葉で意見を述べたのである、「諸君の言はれる事はすべて私に取つて非常に興味がある、しかし何等かの結論を抽き出される前に猶考へていただきたいと思ふ。私、自分も亦、一個の異常な事實をば識つて

ゐるのです。そして此事實に就いては、私がその眞實性をば保證出來る、といふのは之を私に語つた人が眞に聰明な一婦人であつて、その言葉は絶對的に信用して宜いからなのです。此婦人の夫君は將校でした。そして或戰ひの最中に戰死した。ところで、夫君が倒れたちやうどその瞬間に、妻女の方にその光景の幻覺、しかも正確な、すべての點に於いて實在と符合する幻覺があつた。玆から恐らく、彼女自身もさう結論したやうに、諸君も透視、遠感、その他が在ると結論されるであらうか？　ただ一つ、諸君の忘れてゐるものがある、それは良人がまつたく健康であつたのに、その死や瀕死を夢見た經驗を多數の妻女が持つてゐるといふことである。人は幻覺の適中する場合を觀て、その他を顧みない。統計表を作つてみれば、符合が偶然の結果だとわかるであらう。」

それから話題がどんな方へ移つて行つたかは覺えない、尤も哲學上の議論を始めることは問題にならなかつた、その場所でもその折でもなかつたのである。しかし食卓を離れる時、よく聞いてゐた一人の少女が私に云ひに來た、「先生は先刻間違つて考へてゐられたやうに思ひます、何處にお考への缺點があるか私にはわかりません、しかしきつと缺點があるのです。」呀！　然り、缺點があつたのである！　少女に道理があつて、大學者に過誤があつたのである。この現象の持つ具體的なものに對して彼は眼を閉ぢてゐた。彼は次のやうに推論したのである、「夢、或は幻覺が親類の死や瀕死を知らす時、それは眞でなければ僞である、その人は死ぬか死なないかである。隨つて、この幻覺が適中しても、それが偶然でない事を確立する爲には、「眞である場合」の數と「僞である

場合」のそれとを先づ較べてみねばならぬ、」と。彼は自分の論證が一つ置換に基いてゐる事を見なかつた、彼は具體的なそして生きた情景、――或定まつた場所に於いて或定まつた瞬間に倒れるこの將校と、彼の周圍の誰それの兵士と、――の敍述をば「此婦人は眞を視た、そして僞を見なかつた」といふ乾涸びた抽象的な言型を以つて代へてしまつたのである。噫、若しこの抽象的なものへの轉置を受け容れるならば、事實吾人は眞である場合の數と僞である場合の數とを抽象して比較せねばならぬだらう、すると恐らく眞より僞の方が多いに違ひないから、國手に道理があつたことになるだらう。しかしこの抽象は玆に在る本質的なもの、すなはち彼女から遠く離れた非常に複雜な情景をちやうどそのあるがままに再現するところの、此婦人の知覺した畫圖といふものをば切捨てる事に於いて成立するのである。畫家があつて、自分の想像に任かせて、畫布の上に戰場の一隅を描いたところが、偶然に惠まれて、此繪が恰もその日或戰場で實際に畫家のゑがいた通りの動作をしてゐた實際の諸兵士をばそのまま寫してゐたといふやうな事が了解出來るだらうか？　無論出來ない。その出來ないといふ事は、人の援用する確からしさの計算が之をあきらかにする、何故ならば定まつた各人が定まつた諸態度を採る情景は唯一獨特のものであつて、そして人間相好上の多くの線が既に獨自なものであるから、したがつて各人――況や各人を聚める情景――は吾人に取つて互に獨立する無限數の要素に分解されることとなり、延いて偶然が想像の光景を以つて實在する情景の再現とする爲には無限數の暗合を必要とするからである（一）、換言すれば、畫家の想像から

出た畫圖が戰場の或事件をば、その起こつた通りその儘に、描くといふ事は數學的に不可能なのである、ところで、戰場一隅の幻景を視た此婦人はちやうど此畫家の位置に居た、彼女の想像が一個の繪畫を製作したのである。若し此畫圖が實在する情景の再現であつたなら、必ずきつと、彼女は此情景を知覺したのか或は之を知覺した一の意識と連絡してゐたのかでなければならぬ。「眞である場合」の數と「僞である場合」のそれとの比較などは全く無用である、統計に關はつたことでもない、その全內容とともに之を取るならば、今茲に提供されてゐる唯一個の場合で既に十分なのである。そこで、若し國手と議論しても宜いやうな折だつたら、私は彼に次のやうに言つたであらう、「お聞きになつた話が信憑すべきものであるかどうかは知りませぬ、此婦人が果して遠くに展開してゐた光景の正確な幻影を視られたものか否かも私は識りませぬ、併し若し次の點が私に證明されるならば、若しその場に居あはせたところの彼女の識らない一兵士の顏が、その實際あつた通りに、彼女にあらはれたといふ事だけを確め得たならば、——その時こそは、たとへ虛妄の幻覺が幾千あつたと證明されても、亦たとへ此ものを外にして眞實の幻覺が絕えて無かつたとしても、遠感、即ち更に一般的には、その能力を擴張するあらゆる器具を使つても猶、吾等の感覺に達せられ得ない事物なり事件なりをば知覺する可能性が、嚴密にそして決定的に、確立されたと私は斷定します。」

しかし此點に就いてはこれ位で宜い。學者の活動を他の方向へ導いてこれまで「心靈研究」の進歩を阻んで來たもつと深い原因の前へ吾々は今到着したのである。

近代科學は、實驗的であるから、觀察と實驗との材料になるものはすべて受け容れねばならぬのに、各位の研究される諸事實を顧みない事が屢々不思議とされる。しかし先づ近代科學の特徵に就いて誤解を無くして置かねばならぬ。それが實驗的方法を創めて造つた事、之は確かである、しかし之はそれ以前に探究されてゐた經驗の領野をばそれがあらゆる方面で擴げたといふ事にはならぬ。却つて反對に、それは多くの點でこれを狹くしてしまつた、そして此事がすなはちそれの力を造つたのである。上古の人も多く觀察し且つ實驗さへもした、しかし彼等は何處といふ方向なしに、何でも觀察してゐた。で「實驗的方法」の創造とは何であつたのか？　それは既に行はれてゐた觀察と實驗との諸手段を採用する事と、そして之等をば出來る限りあらゆる方向へ適用しないで、寧ろ唯一點、計畫、——或變化する大さであつて同じく計畫され得るところの他の變化する大さの函數であると想像されるものの計量——へ之等をば集中させる事とであつた。「法則」とは、此言葉の近代的な意味に於いては、すなはち變化する二個以上の大さの間に於ける或恒常的關係の表現なのである。故に近代科學は數學の所產である、それは代數學が自己の能力と順應性との充分な發達によつて實在に絡みつき、之をば自己の計算の網の中へ收め得るやうになつた日に誕生した。先づ天文學と力學とが、之等に近代人の賦與した數學的形式の下に、出現した。次に物理學、——同じく數學的な一物理學——が發達し出した。物理學は化學を招來したが、之も亦計畫の上に、重量と容積との比較の上に立つものであつた。化學の後を承けて起つたのは生物學であつて、尤も、之は未

だ數學的形式を採るに到つてゐず、また急に採りさうでもない、しかしやはり、生理學の仲介によつて、生命の諸法則をば化學と物理學とのそれへ、即ち、間接に、力學のそれへ還元しようとは努めてゐるのである。斯のやうにして結局吾人の科學は恒に數學へ、恰も一個の理想へのやうに、向つて行つてゐる、それは本質上計量をば目的とする、そして未だ計算を適用し得ないものに就いて、之を記述するか或は分析するかに止まつてゐねばならぬ時には、それは後に計量されるやうになり得る部分をしか注視しないやうにしてゐるのである。

然るに、精神の諸事象はその本質上計量を受容しない。故に近代科學の採つた最初の處置は何か計量されることが出來て且精神現象の代りとなり、之に置き換へられ得るやうな現象をば求める事でなければならなかつた。事實としては、意識が腦に對して多くの關係を持つてゐることが認められる。そこで人は腦に占據して、腦的事實——その性質は確かにわかつてゐないが、しかしそれが終には分子と原子との運動、即ち力學的範圍の事實に還元され得ねばならぬといふ事はわかつてゐる、——を把つて離さず、そして恰も腦的なものを以つて心的なものに換へ得るかのやうにして進むこととした。吾々があらゆる精神の科學、あらゆる吾等の形而上學は、十七世紀以來今日に到るまで、やはり斯のやうに兩者を代換し得る事をば宣言してゐる。思想と腦とは、どちらがどちらであつても宜いのであつて、或は唯物論の欲するままに、心的なものが腦的なものの「副現象」とされるか、或は同じ原本の違つた言語に於ける二個の飜譯と見做されて心的なものと腦的なものとが

同列に置かれるかするのである。つまり、腦的なものと心的なものとの間に於ける嚴密な竝行論の臆說は非常に科學的なやうに見える。此臆說を否定し或は之に逆ふやうなものをば、その本能からして、哲學と科學とは排除しようとする。そしてこれが、一見して、「心靈研究」の對象となる諸事實、或は少なくともそのうちの多數のものの場合なのである。

さて今こそ、此臆說に直面して注視し、之が何に値するかを考ふべき時が來た。之が惹起するところの理論上の多くの困難に就いて詳說するのは控へることとしたい。之をその字義通りに取るだけで之が自家撞着に陷るといふ事を私は他の處で示したことがある。今附け加へて置きたいのは大腦皮質が原子若くは分子運動の言葉で既にあらはしたところのものをば更に意識の言語で繰返すといふやうな贅澤をば自然がしなかつたに違ひないといふ事である。すべて餘計な器官は萎縮し、無益の作用は悉く消滅する。働きかけない、且副本に過ぎぬといふやうな意識は、たとへそれが何時か生じたことはあつたとしても、久しい以前に宇宙から消えてしまつてゐただらう、習慣が吾等の行爲を機械的にすればするほど之はしたがつて無意識的となるではないか？　しかし此等の理論的考察へ深く立ち入つて行くのを私は好まない。私の主張するのは、事實が公平に參考されるならば、竝行論の假說を肯定もしなければ暗示さへもしないといふ事なのである。

或一個の知的能力に就いてのみ、事實、大腦內に於いてその場所を局限出來ると經驗に據つて言ひ得るやうに信ぜられてゐた、それは記憶、殊には言語の記憶である。判斷に對しても、推理に關

しても、思想の如何なる他の行爲に就いても吾人は此等が大腦內部の諸運動に從屬してゐてその痕跡を描きあらはすものだと想像する何等の根據も持つてゐない。之に反して、言語記憶の諸疾患——卽ち、謂はれる所の、失語諸症——は或若干の腦廻轉の傷害に對應する、そこで人は記憶を以つて腦の一作用に過ぎぬと考へ、——明暗の影象を保存する寫眞乾板や音の振動を記錄する蓄音器レコオドや何かのやうに、——言語の視覺的、聽覺的、運動的諸追想が皮質內部に貯藏されてゐるのだと信ずるやうになつた。心の生活が腦の生活に對する適應または一種の膠着の證據だと言はれる諸事實を精査すると（勿論、感覺と運動とは除外する、何故ならば腦は確かに感覺——運動的器官だからである）、之等が結局記憶の諸現象に歸せられることと、そして失語諸症の局所限定が、また此局所限定のみが、竝行說に對して經驗的證明の初步を提供するやうに見えるのだといふこととがわかつて來る。

然るに、諸種の失語症の更に深い研究はすなはち追想を以つて腦のうちに貯藏された乾板やレコオドのやうなものだとし得ない事を的確に示すのである、私の考へでは、腦は過去の表象や寫象をば保存しない、それはただ運動の習慣をば蓄積するのである。私は嘗つて失語症に關する通說をば檢討して之に批判を加へた事があるが玆でそれを繰返しはせぬ、——當時この批判は逆說的と見られたもので、實際それは一の科學的信條を攻擊したのであつたが、しかし病理解剖學の進步はそれを確認するに到つてゐる（ピエル・マリイ教授とその門下との研究業績は世に知られてゐる所であ

る）。で私の結論のみを簡單に再述するに止めて置きたい。私の觀るところでは事實の注意深い研究から出て來るものは、各種の失語症に特徵的な腦の諸傷害が追想自體をば侵すのではないといふ事と、隨つて、大腦皮質の何々の個所に蓄積されて、疾患に破壞される追諸想が在るのではないといふ事とである。眞實は此等の傷害が追想の喚起をば不可能或は困難にするのである、それは想起の機構に、そして此機構のみに影響する。更に正確には、精神が或追想を必要とする時、この求められた追想を受け容れる枠緣となるところの生まれ出かかる運動或は態度をば、それが身體に呈し得させるやうにする事に腦の役目は存する。枠が其處にあれば、追想は、ひとりでに、その中へ篏まり込んで來る。大腦器官は枠を用意する、追想を供給するのではない。以上が言語記憶の諸疾患の吾人に敎へるところであつて、また一方記憶の心理的分析からも豫想され得ることなのである。

さて他の思想の諸作用へ移つて行つても、事實が先づ吾人に示唆する臆說は心の生活と腦の生活との間に於ける嚴密な竝行論のそれではない。思想一般の働きに於いても、記憶の作用に於いてと同じやうに、精神の考へるもの或は種々の事情がそれに考へさすものを所作にするところの運動なり態度なりをば身體に植ゑ着けることのみが腦の任務であるやうに見える。腦は「模倣所作の器官」であると或場所で私が言つたのは卽ち斯の事を言ひ表はしたのである。猶私は附け加へて言つた、「人があつて活動最中の腦の內部を縱覽し、諸原子の來往の跡を辿りそれ等のするところのすべてを解釋し得るならば、この人は精神內に起こつてゐるものの幾分を恐らく知ることが出來るだ

らう、しかし僅かしか知り得まい。彼はそのうちのちやうど身體の擧措、態度、運動にあらはされ得るもの、心の狀態が遂行されつつある或は單に生起しかけの動作に就いて含むもののみをば識るであらう、その餘は捉へる事が出來ぬ。意識内部に流れる多樣の思想や感情に對して、彼はちやうど、俳優が舞臺の上でする科は殘らずはつきり見るが、その白の一言をも理解しない人と同じ位置に居るのである。」と。或は更に彼は、一の交響樂に就いて、樂長の指揮棒の運きをしか見ない人のやうなものだらう。事實腦現象の心の生活に對する關係は樂長の身振り手振りが交響樂に對するものと同じである、それ等は孰れも之の運動の節調を描き出すものであつて、他の事をするものではない。故に大腦皮質の内部から精神の高等な作用を採り出す事は出來ぬ。腦は、その感覺的作用の外には、心の生活をば、最も廣汎な意味に於いて、動作に模す役目をしか持たぬのである。

尤も私はこの模倣動作が非常に重要なものであると認める。それに據つて吾々は實在の中へ割り入つて行き、これに順應し、諸事情の促がすところに對して適當な行爲を以つて應へ得るのである。意識が腦の一作用ではないとしても、少なくとも腦は意識をば吾等の生活する世界に卽して持續的に集中させる、それは生活へ向つての注意の器官なのである。そこで輕微な腦變化、例へば酒精または鴉片による一時的中毒——最も多くの場合精神錯亂の原因になつてゐると思はれる慢性中毒とすれば猶更である、——が心の生活の完全な錯亂を惹起するに到ることも、出來て來る、これは精神が直接に侵されたのではない。或推理の物質的な相である何かの機構をば毒が大腦皮質の中へ搜

しに行つて、此機構を亂したから、その爲に患者が妄語するのだと屢々信ぜられるが、これは間違つてゐる。障害は謂はば齒車仕掛を損じさせて、思想が最早事物とかつちり嚙み合つて行かないやうにするのである。一の狂人があつて、被害妄想に侵されてゐるとしても、彼は猶論理的に推論することが出來る、しかし彼は實在の傍で、實在の外で、恰も吾人が夢中に於いて推理する如く推論する。吾等の思想をば行爲の方へ向かはす事、諸情況の要求する行動をばそれが準備するやうにする事、この事の爲に吾人の腦は造られてゐるのである。

しかしこの爲にそれは精神生活の流れをば、運河の中へ導き、亦狹くする。それは吾々が右へ左へ、また、多くの場合、後へさへ眼を遣るのをば妨げる、進むべき方へ向つて、眞直に吾人が前方を視る事をそれは要求するのである。既に記憶の作用に於いて此事が見られないだらうか？　過去がその最も微小な細部に到たるまで保存されてゐる事と眞實の忘却がないといふ事とは多くの事實によつて示されてゐるやうに見える。水に溺れた者や首を吊つた人が、蘇生してから、如何に彼等が、一瞬の間に、その全過去を鳥瞰圖的に眺めわたしたかを語るといふのはよく聞くところである。この現象を以つて假死の徵候だとする說もあるが、さうでない場合の例も擧げることが出來る。斷崖の底へ滑り落ちる登山家や、自分を狙擊しようとする敵を見てやられたと思ふ兵士にも之は起こる。すなはち吾人の全過去が其處に、不斷に在るのであつて、回顧しさへすればそれは看得るやうになつてゐる、ただ、吾々は回顧し得ないのであり亦すべきでもないのである。すべきでないとい

ふのは、吾等の運命が生きる事、働きかける事であつて、そして生命と行動とは前へ向つてゐるからである。し得ないといふのは、腦機構の作用が即ち茲で吾人に過去を蔽ひ隱して、各瞬間に、現在の情況を照明し吾等の行爲を援助し得るもののみをしかその内から露はし出さないことに存するからである、それは追想のすべてをすら暗闇にしてしまつて例外的に一個の——吾等の役に立つものであつてそして吾人の身體が既にその模倣所作によつて試作してゐるところの——有益な追想を呼び喚び起こす。さて、生活へ向つての注意が一瞬間弱くなると、——私は茲で有意的注意に就いて言つてゐるのではない、それは一時的で且個人的である、いま言つてゐるのは萬人に共通であり、自然によつて賦課された所の、「種の注意」とも呼ばれ得るやうな一の恒常的な注意に就いてである、——その時、これまで力づくで前へ向つて見張らされてゐた精神が、弛んで、隨つて振り返る、そして其處で彼の全歴史を再見する事となる、故に今直ぐ死ぬるといふ遽な確信によつて起こるところの、急激な生活からの離脱が過去の鳥瞰的眺望の原因となるのである。そしてその瞬間まで腦が記憶の器官として働いてゐたのは、注意を生活に即して集中させ、意識の領野を有益に狹くする爲にであつたのである。

しかし私が記憶に就いて言ふところのものは知覺に就いても亦眞なのである。嘗つて試みた證明の細部へ入つて行く事は茲では出來ぬ、ただ次の事を言つて置きたい、すなはち腦の諸中樞を以つて物質の振動をば意識の狀態に變へ得る器官と看做すならば、すべてが曖昧となりわからなくなつ

てしまふ、之に反して此等の中樞（及びそれに繫がつてゐる諸感覺器官）に於いて、吾人の潛在的な知覺の無邊の領野の中から、現實化さるべきものを選んで來るのが任務の淘汰の諸機關を看るならば、すべては分明になつて來る。レエプニツの言によると一々のモナド、したがつて、猶更、彼が精神と呼ぶところの各モナドは、それ自身のうちに全實在の意識的な或は無意識的な表象を持つてゐることとなる。私は其處まで行かない、しかし吾々が現實に知覺するより遙かに以上の事物をば吾人は潛在的に知覺するのであつて、茲でも亦吾等の身體の役目はすべて吾人に取つて實際上有用でないもの、すべて吾等の行爲を受け容れないものをば意識から遠ざけるに在るのだと私は思つてゐる。故に感覺の諸器官、諸感覺神經、腦の諸中樞は外からの影響に對して溝を設けて之を取捨するものであつて、また斯うして吾人自らの影響の及ぶ方向をも記してゐるものなのである。しかし、其處から、それ等のものは吾々の現在の視野をば制限する、それは記憶に關する腦機構が吾等の過去の視野をば緊縮するのと同じである。然るに、何か無益な追想、或は「夢」の追想が、生活へ向つての注意不足の或瞬間を利用して、窃かに意識内部へ入つて來れるものならば、吾人の普通の知覺の周圍に、最も多くの場合無意識的ではあるが、何時でも意識内へ入つて來ようと窺つてゐて、そして何か例外的な場合や或特殊な素質の人物のうちに於いては實際其處へ侵入して來るところの諸知覺の一層の圈があり得ないだらうか？　若し斯やうな諸知覺があるならば、それ等はただ正統的な心理學に屬するばかりではない、それ等に就いては「心靈的研究」が行はれねばならぬの

である。

尤も、空間が明確な區別を造るものだといふ事を忘れてはならぬ。吾々の身體は空間に於いて互に離れてゐる、そして吾々の意識も、これ等身體に繋がつたものとしては、距離によつて隔てられてゐるのである。しかしそれ等がそれ自身の一部分を以つてのみ身體についてゐるのならば、その殘餘部に關しては、相互の出入を推測しても宜いこととなる。種々の意識の間に、各瞬間に、滲透現象に似た交換が行はれ得ることとなる。若し斯の相互交通が存在するならば、自然は之を無害なものにするやうな豫防策を取つたに違ひなく、また或種の機構は確かに、斯のやうにして混入した諸寫象をば、それ等は日常生活に於いて非常に邪魔になるものであるから、無意識内へ棄却する任務を特に持つてゐるやうに思はれる。しかしながらそれ等のうちの何者かが、玆でも亦、殊に禁止機構が善く作用しない時には、掟を破つて入つて來る事がある、そして之等の者に就いても亦「心靈的研究」が行はれるだらう。斯うして眞實の幻覺が生じ、「生者の靈像」があらはれて來るのである。

有機體を超過する意識といふ此概念に慣れるに隨つて、身滅後に心の存續する事を吾々は愈々自然だと思ふやうになる。無論、若し心的なものが腦的なものに卽して嚴密に臨摹されたものならば、若しその腦に記入された以上の何ものも人間意識のうちにないならば、意識が身體の運命を逐つて之と共に死滅するといふ事も認められるだらう。しかし若し事實が、すべての體系から獨立して研

究された結果、之と反對に心の生活が腦の生活より遙かに廣大であると吾人に考へさすならば、心不滅は非常に確からしくなるから證據提供の義務は肯定者よりも遙かに寧ろ否定者側に歸せられる事となる、何故ならば、他の場所で言つた事があるやうに、「死後に於ける意識の消滅を信ずる唯一の根據は身體壞敗の事實に在るのだが、しかも身體に對して意識の殆んど全部が獨立してゐる事も亦、人の確認する事實であるならば、この根據は最早何の價値も持たない」からである。

以上が、概略すれば、認識された諸事實の公平な檢討によつて私の到達する結論なのである。卽ち之によつて觀れば、心靈的研究に向つて開かれてゐる領野は非常に廣く、且無際涯でさへもある。此新しい科學は出遲れた時間をば直ぐ取り戻してしまふだらう。數學は古代希臘に溯る、物理學は既に三四百年の歷史を持つてゐる、化學は十八世紀に出現した、生物學も同じ程古い、しかし心理學は最近のものでそして「心靈的研究」は之よりも猶新しいのである。この立ち遲れを痛惜すべきであらうか？　近代科學が、數學から出發して力學、天文學、物理學、化學といふ方向を擇つて進む代りに、そのすべての努力を物質の研究へ集中させる代りに、若し精神の考察から發足してゐたならば、――たとへば、若しケプレル、ガリレオ、ニウトンが心理學者であつたなら、どういふ事が起こつたらうかと時に私は自分で自分に尋ねてみる事がある。その場合の心理學が如何なるものになつたかを今日吾人は全く推測することが出來ない、――それは吾々の物理學が如何なるものであるかを、ガリレオ以前に於いて、想像出來なかつたのと同じである、この心理學は恐らく吾等の

現在の心理學に對してちやうど吾々の物理學がアリストテレスのそれに對する關係に在つたであらう。そのとき科學は機械的世界觀を全然知らないから、諸君の研究されるもののやうな諸現象をば、先驗的に排斥してしまはないで、進んで之を採取したに違ひない、恐らく「心靈の研究」はその主要な課題の中に入つてゐたであらう。精神活動の最も一般的な諸法則が（實際に於いては、力學の基礎的原理がさうであつたやうに）、發見されるのを待つて、人は精神から生命へ移つて行つたであらう、生物學が構成されただらう、しかし之は活力論的で、吾人のとは全く異つたものであり、生物の知覺され得る諸形態の背後へ、之等がそのあらはれであるところの、見えない、內在的な力をば搜し索めに行つたに違ひない。この力を吾々はどうする事も出來ぬ、それは卽ち精神に關する吾人の科學がまだ幼稚なからである、そしてその爲に活力說を不生產的だとして非難する學者にも道理がある事となる、今日この說は不生產的である、永久に然うではあるまい、また若し近代科學が、その起源に於いて、逆の方向から進んで行つてゐたなら、然うではなかつたであらう。その活力論的生物學と同時に一の醫學が興つて來ただらうが、それは生活力の不足を直接に救治するもの、諸原因より結果をば、外圍でなくて中心をば狙ふものであつたに違ひない、暗示、すなはち更に一般的には精神の精神に對する影響による治療法が、吾人の豫想外の形態と重要さとを取り得た事と思はれる。精神活動の科學は斯やうにして成立し、斯のやうにして發展して行つただらう。しかし、精神の諸發現を上から下へ逐づて行き、生命と生物質とを通り過ぎて、最後に、それが無生物質へ

到達した時には、斯の科學は、驚愕狼狽して立ち停まつてしまつたであらう。それはこの新しい對象にその慣用の方法をば適用しようと試みただらうが、何の手がかりをも作れなかつたに違ひない、計算と計量との諸手段が今日精神の事象に取付き得ないのも之と一緒である。精神界では最早なくて、物質界が祕密の王國となつたであらう。そこで或未知の國、——たとへば亞米利加でも宜いが、未だ歐羅巴に發見されず且つ鎖國してゐる亞米利加——で、吾々の現在の科學と同一な科學が、その總ゆる力學的應用を伴づて發達してゐたと想像しよう。愛蘭やブルタァニュの沖遠く出漁する漁夫達が、時々、遙か水平線に、風に逆つて全速力で走つてゐる一隻の亞米利加船——吾々が蒸汽船と呼ぶもの——を見かけることがあつただらう。彼等はめいめいの見たものを話して歩く。人がそれを信用しただらうか？　恐らくはしなかつたであらう。純粹に心理學的であつて、物理學や力學とは正反對の方向を指してゐる科學に造詣の深い人ほど、學者ほど、猶更之を信じなかつたであらう。そこで各位のそれのやうな一の協會、——しかし、此場合には、物理研究協會——が組織される機運となつて、この會が證人を呼び出し、彼等の陳述を批判檢討して蒸汽船の諸「出現」の眞實性を確定する事となつたであらう。しかしながら、猶暫くは斯のやうな歷史的或は批判的方法をしか持たなかつただらうから、——これ等奇蹟的な船の存在を信ずる以上、——その一隻を造つて且之を走らせよと要求するやうな人々の懷疑をばその會は未だ解くに到らなかつたに違ひない。

斯んな事を夢想して私は時々面白がつてゐる。しかし此夢想をする時、私はすぐ之を止めてそし

て考へるのである、否！　人間精神が斯のやうな進路を取る事は出來得ることでも亦望ましいことでもなかつた。それが出來得ることでなかつたといふのは、近世の黎明に於いて、既に數學が存在してゐたからであり、隨つて先づ始めに吾等の生活してゐる世界を識る爲に之が與へ得るすべてのものをば之から抽き出して置く必要があつたからである、恐らくは幻影に過ぎぬものを逐つて獲物を放棄すべきではなかつたのである。しかし、それが出來得ることであつたとしても、人間精神が初めから心理科學に沒頭するといふのは、此科學自身に取つても望ましいことではなかつた。何故ならば、勿論、物質の諸科學にささげられた天才と勘能と努力との總額が此方面で使はれたとしたら精神に關する知識は非常に廣く押し進められることが出來たであらう、しかし無限に貴くてそれがなかつたら之全體の價値が大いに低下するところの何物か、即ち正確さと嚴密さと、證明が重んぜられる事と、單に可能な或は確からしいものから確實なものをば區別する習慣とが、恒に之に缺けてゐたに違ひない。此等のものが固から叡智に屬してゐる性能だと考へてはならぬ。人類は非常に長い間これ等を持たなかつた、そして往昔希臘の一隅に、一小民族が出現して、いいくらゐで滿足せず、正確といふ事を發明しなかつたならば、此等のものは恐らく永久に世にあらはれなかつたであらう(二)。數學的證明――即ち希臘精神の一創造――は此等のものの結果だつたのか或は原因であつたのか？　それは知らない、しかし證明の要求が人の叡智から叡智へ擴がつて行つたのは數學によつてであり、數學が、力學の仲介を經て、物質現象の更に多數を抱擁したに連れて、それも

亦人間精神のうちに地歩を占めて行つた事は疑はれない。故に數學的思索の特徴である正確と嚴密との諸要求をばそのまま具體的實在の研究へ持つて來る習慣なり傾向なりは、物質に關する諸科學が吾等のうちに作つたものであつて、そしてただそれ等のみによつて作られ得たものなのである。さうした譯だから直ぐさま精神の事象に沒頭して行つた科學といふものは、それが如何に進歩したとしても、何時までも不確實で曖昧だつたであらう、それは單に眞らしいものと確定的に容認されねばならぬものとを恐らく永遠に區別しなかつたであらう。しかし今日に於いては、吾等の物質界探究の結果として、吾人はこの區別をすることを識り、またそれに必要な諸性能を獲得具備してゐるのであるから、僅かに踏査され出した心理的諸實在の領域へ危惧するところなく入つて行き得るのである。思慮深い大膽さを以つて進み、働きを不自由にする惡い形而上學を棄てれば、精神の科學は吾等のあらゆる希望以上に出るやうな成果を擧げることが出來るであらう。

〔註〕(一)　これでもまだ時間に於ける符合、すなはち內容を同じくする二情景が、あらはれる爲に、同じ瞬間を選擇したといふ事實を勘定に入れてないのである。

(二)　希臘人の正確さ發見といふ事に就いては佛蘭西學院での種々の講習、殊に一九〇二年と一九〇三年との講義のうちで縷說して置いた。

夢

四

千九百一年三月二十六日　心理學總協會に於いてされた講演。

心理學協會の好意ある懇請によつて諸君の前で扱ふこととなつた此題目は甚だ複雑なものをあらはしてゐる、それは非常に多數の問題を惹き起こすのであつて、之等のうちの或ものは心理學的であるが、また或者は生理學的、形而上學的でさへもある、それは極めて長い解説を必要とする、――しかも吾々に與へられた時間は短い、――そこで前置きをすべて省略してしまつて、傍系的なものは除去し、問題の中心へ最初から入つて行くのをば許されたい。

で茲に一の夢がある。種々雑多のものが眼前に展開する、事實存在するものは一つもない。忙しく動き廻つて、一場の轉變に遭遇すると思ふ者が、極めて安穩に、床中に横臥してゐる。自分の言つてゐる言葉を聞き、何人(ひと)が之に應へるのも聽くが、しかし私は獨り居て何も言つてゐない。斯(こ)の

錯覺は何處から來るのか？　人や物やをば、それ等が事實現に在つたかのやうに、何故知覺するのか？

けれど先づ、全く何も無いのだらうか？　何か感覺され得る材料が、睡つてゐる時でも覺めてゐる時のやうに、視覺なり、聽覺なり觸覺なりに對して提供されてゐはしないか？　眼を閉ぢてそして何が見えるか試してみよう。大抵の人は何も無いと言ふだらう、それは注意して視ないからである、實際には、いろいろの物が看える。先づ闇黑の地がある。次に種々の色の斑文が、時にぼんやりと、時に奇異に光つて見える。これ等の斑文は脹れて大きくなり、縮み、形と色合とを變へ、侵したり侵されたり互にしてゐる。この變化は遲く靜かにも行はれる。また時には急激な速度で起こつて來る。この幻華は何處から來るのか？　心理學者や生理學者は之を「發光細塵」、だの、「眼のスペクトル」だの、「閃光現發」だのと呼んでゐて、網膜に於ける血液循環の上に絶えず起こる輕微な諸變化に、或はまた閉ぢられた眼瞼が眼球に加へる壓迫のため視神經の受ける機械的刺激に之等の假象の原因をば歸してゐる。しかし此現象の解釋と之を呼ぶ名とはどうでも宜い。之は萬人のうちに在るもので、そして、疑ひもなく、吾等がいろいろの夢の多くを裁つ生地となるものなのである。

既にアルフレッド・モオリィ及び、殆んど同じ頃に、デルヴェ・ヅ・サンーヅニ侯は此等流動する形態の着彩斑文が人の睡りに落ちるとき固定して、さうして種々の物の輪郭を描き出して一箇の

夢を組み立てゝ行く事に注意した。しかし此觀察は、元來半睡半醒裡の心理學者によつてされたものだから、猶稍訝かしいものであつた。亞米利加の哲學者で、エール大學教授のジェ・テ・ラッドが、その後もつと嚴密な方法をば案出したが、それは一種の訓練を必要とするので、適用が難しい。即ち目醒めるときに眼を開けないで、消えかかつて行く、――視覺の領野からそしてすぐ亦、無論、記憶のそれからも消える夢をば暫くの間留めるのである。すると夢中の物が閃光に分解して、眼瞼を塞いでゐたとき實際見られた着彩斑文と一緒になつてしまふのが看える。たとへば新聞を讀んでゐた、これが夢だとする。目醒める、行のぼやけた新聞の代りに漠然と黑い條(すぢ)のある白斑文が殘こる、これが現實なのである。或はまた夢で大海に逍遙する、涯目の限り、大洋は灰色の波に白泡を湧かせてうねつてゐた。覺めると、すべては點々と光る箇所のある薄い灰色の大斑文のうちに消え去つてしまふ。此斑文とまた此等光る諸點とが彼處にあらはされてゐたのである。故に實際、睡眠中の吾等の知覺に對して、一の視塵が提供されてゐたのであつた、そして此視塵が夢の製造に役立つたのである。

此だけが役立つのであらうか？　暫く視官だけに就いて言へば、內部的起原の視覺の他に外部の原因から來るものがある。眼瞼は塞がれてゐても、眼は依然として光を闇から區別し、またその光の性質を、或點まで辨別さへする。然るに、實在する光によつて惹起された感覺を根柢とする夢はなかなか多い。急に蠟燭を點すと、眠つてゐる人のうちに、若しその睡眠が餘り深くなければ、火

災の念を中心とする一群の幻覺が惹起される。ティスシエは之に就いて二つの例を引いてゐる、すなはち「B……夢でアレクサンドリアの劇場が火焔を上げるのをば觀てゐる、其處等一帶の町々が焔に映えて赤い。突然彼はコンジュル廣場の泉水の中央へ來てゐる、泉水の周圍に繞らされた太い石杭を結ぶ鎖に沿つて火焔の欄楯が走つてゐる。と思ふと巴里へ戻つてゐて、博覽會の火災に遭つてゐる……、凄慘な情景を目擊したり、何かする。喫驚して目醒める。巡回の看護尼僧が通りがかりに彼の病床へ向けた龕燈の光線が正面に眼に中つてゐたのであつた。――M……は前にゐた事のある海軍陸戰隊へ入つた夢を見てゐる。フォル・ヅ・フランスへ、ツウロンへ、ロリヤンへ、クリミアへ、コンスタンチノプルへ行く。電光を見、雷鳴を聞く……、終に戰鬪に參加して砲口から火が出るのを見る。喫驚して目が醒める。B……と同じやうに、巡回の看護尼僧の龕燈から射す光線で彼も目醒めたのであつた。不意の且つ强烈な光によつて惹起される夢は斯の樣なものなのである。

たとへば月光のやうな、軟いさうして持續的な光の示唆するものは之と餘程相違する。クラウスは或夜、眠りから覺めて、未だ手を差し伸べてゐるのに氣が付いた、夢の中ではそれは一人の乙女の方へであつたのに、その時は早自分を暈なく照らす月に向つてであつたと語つてゐる。斯のやうな場合は外にもある、月光は、眠る人の眼を撫でさすつて、處女のまぼろしを現出させる德を具へてゐるやうに見える。女神セレネ（言ひ換へれば、月）の深い愛に愛撫されながら、永遠に眠る牧

耳にも亦內部感覺がある、――唸り、響き、耳鳴り、――これ等は覺醒時に於いては識別されないが睡るとはつきり浮き上がつて來る。尤もまた、吾々は眠つてゐる時でも、外から來る幾らかの音をばやはり聞いてゐる。家具の軋り、煖爐に燃える火、窓を打つ雨、煙突に吹き入つて種々の響聲となる風の音などは猶耳へ入つて來る、そして之等をば談話、叫聲、演奏等に夢が變へてしまふのである。眠つてゐるアルフレッド・モオリィの耳の傍で鋏とピンセットとを擦りあはせたら、彼は警鐘を聞いて千八百四十八年六月の事變を目擊してゐる夢を見た。斯やうな例は幾らでも擧げられる。しかし大抵の夢に於いて音は形や色程の重要さを持つてゐない。視覺が優越してゐるのである、見もし聞きもしてゐると思ふのに、ただ見てゐるだけである事さへ屢々ある。マクス・シモンの注意したところに據ると、夢で一場の會談を續行してゐるうちに、不意に誰も發言してゐない事、誰も發言しなかつた事に氣付く場合が往々にしてある。對話者と吾々との間に、思想の直接交換が、無言の談話が在つたのである。奇異な現象であるが、しかし解釋は容易にされる。夢に音聲が聞かれる爲には、普通實際に知覺された音響がなければならぬ。何も無しでは夢は何も作れない、そこで材料になる音響が提供されない時にはそれは音聲を製造するのに困難を感ずるわけなのである。

觸覺も亦聽覺と同じ位の働きは持つてゐる。或接觸、或壓迫が、人の眠つてゐる間でも、意識へ猶到達して來る。この時視覺の領野を占めてゐるいろいろの寫象が、この觸覺の影響に浸潤されて、形相と意義とを變へさせられる事がある。身體と肌着との接觸が急に感じられ出したと假定しよう、

眠つてゐる人は自分が薄着してゐるのを想ひ起こすだらう、若しちやうどその時この人が自ら街上に遊歩してゐると信じてゐたなら、往來の諸人の注視の前へ彼はこの非常に單純な服裝で立つことになる。尤も人々は之を訝まないだらう、何故ならば夢に於いて吾々の敢行する種々奇拔なことが、吾等自身をば如何に羞らはすとしても、之を看る人々を動かす事は稀だからである。今引いたのはよく知られてゐる夢である。茲にまた一つあるが、大抵の方はそれを見られたに違ひない。それは浮き上がり、ふわりふわりと、地に觸れずに空間を過ぎつて行くやうに思ふのである。普通、それは一度あつた以上、繰返されて行く傾向がある、そしてそれを新しく經驗する毎に人は夢で考へる、「地上高く浮いて行く夢をよく見たことがある、しかし今度こそ自分は全く目醒めてゐる。重力の法則から離脱し得るといふ事を、今こそ知つたし、また他人に示しも出來る」と。若し急に目を醒ますなら、次の事に、恐らく、吾々は氣が付くだらう。すなはち事實横臥してゐたのだから、足を何處にも着けてゐないと感じたのである。また一方に於いて、眠つてゐないと思ふから、寢てゐるのだといふ事も意識しなかつたのである。そこで自分は立つてゐるのに、地から既に離れてゐると吾々は考へた。この確信をば夢が敷衍したのである。注意すべきは、浮かんで行くと感ずる場合に、羽搏きに似た急激な腕の運動で身體を引き上げて、之を右側或は左側へ飛ばすやうに思ふ事である。然るに、恰も此側を下にして吾等は横臥してゐる。目醒めると、寢臺に對する腕と身體との壓迫感が卽ち飛んで行く爲の努力の感覺だつたといふ事がわかる。此壓迫感は、その原因から離されては、

一の努力に歸し得るところの、漠とした疲れの感じに過ぎなかつた。それが吾等の身體は地から離れてゐるといふ確信に結び着けられて、飛翔して行く努力と謂ふ的確な感覺に限定されたのである。

いろいろの壓迫感がどうして視覺の領野まで昇つて行つて、其處に在る視塵を利用して、自ら轉じて形と色とになつてしまふかを觀て行くとなかなか興味がある。マクス・シモンは或日積み重なつた金貨の二箇の棒の前にゐて、此等の棒が同じ高さでなかつたから、同じにしようと力めてゐる夢を見た。しかしどうも成功しない。そこで强い苦痛感を覺えて來た。此感情が、おひ〳〵增大して、彼は終に目を醒ましてしまつた。その時氣が付くと彼の片足が毛布の襞に捲き込まれてゐたので、兩足の先が上下に離れてゐたのを、合はさうとしてもうまくゆかないのであつた。茲から瞭かに一の漠然とした高低の感覺が生じて、それが視覺の領野へ侵入し、其處で恐らく（之は私の提出する臆說なのだが）一箇若くは數箇の黃色の斑紋に出會つて、二本の金貨棒の高低として視覺的にあらはれて來たのである。故に、視覺化されて、さうしてこの變へられた形で夢の中へ割り込んで行く傾向は睡眠中の觸覺に內在するものなのである。

身體のあらゆる點、殊に內臟から發生して來る「內部觸感」の諸感覺は更に重要だ。一種奇異な細緻さと鋭さとをば睡眠はそれ等に與へると言ふより、寧ろ恢復させる事が出來る。勿論それ等は覺醒時に於いても等しく存在してゐた、併し行爲に心を奪はれて吾人はその時それ等を見なかつた、吾等自身の外に吾々は生活してゐたのが、睡眠によつて自分のうちへ喚び歸へされたのである。喉

頭炎、扁桃腺炎等の經驗を持つ人々が夢で病の再發に遭つて、喉の方に不愉快な疼痛を覺える事がある。ただ然ういふ氣がしたのだ、と覺めてから思ふ、噫！　さういふ氣のしたことが直ぐ事實になつて來る。種々重大な疾病や故障、癲癇の發作、心臟障害等が、斯のやうに夢で豫見され、豫告された例がよく擧げられる。で共感神經系統から來た震動をば夢が意識の爲に飜譯するのだとショペンハウエル等の哲學者が主張しても、一々の器官はそれ〴〵をば象徴的に代表するところの種別的な夢を惹き起こす能力を持つとシェルナア以下の心理學者が言つても、乃至は夢の「徴候學的價値」と之をば病患の診斷に利用する方法とに就いてアルティグの如き醫家が著作の筆を執つても別に異とするに足らぬ。最近に到つて、ティスシエは消化、呼吸、血液循環の諸疾患が如何にして夢の定まつた種類に飜譯されるかをば、あきらかにした。

以上を概括してみよう。自然の睡眠に於いては、吾々の諸感覺は決して外部刺激に對して閉鎖されてゐない。無論その明確さは減じてゐる、しかしその反面には多くの「主觀的」印象の復活がある、萬人に共通の外部世界の中に吾等が動いてゐる間、目が醒めてゐる間は此等のものは感知されなかつた、睡りに落ちると吾人は最早自分に對してのみしか生活しなくなるから、此等が再び現れて來る。眠つてゐる時には知覺が狹くなると言ふことも出來ない、寧ろそれは、少なくとも或若干の方向では、その作用の範圍をば廣くする。尤も伸びて行き得ただけ緊まりに於いては失ふ。それ

はただ漫然且つ雜然としたものを齎らすに過ぎない。けれどやはり實在する感覺を以つて夢は製造されるのである。

どうして製造されるのか？　材料となる感覺は茫漠曖昧としてゐる。最前面に在るもの、眼瞼を閉ぢる時吾等の前に展開する着彩斑文を採つてみよう。白地の上に黑い縞があるとする。それは絨毯、棋盤、字の書かれた紙、その他多くのものをあらはし得るだらう。誰が選擇するのか？　未定着の材料の上に捺されて之を定着する形は何であるか？——斯の形は追想である。

夢は一般に何も創造しないといふ事を先づ注意せねばならぬ。勿論夢の裡で仕遂げられた藝術的、文學的、科學的勞作の例が幾らか擧げられてはゐる。そのうちの最も有名なもの一つだけを取り出してみよう。十八世紀の音樂家、タルチニは、一の作曲に苦心慘憺してゐたが、藝術の神の寵を得なかつた。で眠つてしまつた、すると惡魔が自ら躍り出て、ヴィオロンを引つたくり、望みにぴつたり合ふソナタを奏で了へた。此ソナタをば、タルチニは眼が醒めてから憶ひ出して樂譜に記した、今日傳はつてゐる「惡魔のソナタ」が之だと言ふのである。しかし斯のやうに大まかな話からは何も引き出せない。それを憶ひ出さうと努めてゐる間にタルチニは此ソナタを完成しつつあつたのかも知れぬ。覺醒後の想像は夢に屢々何等かを附け加へる、之を溯及的に變へる、時にはそのうちに在つた非常に大きい間隙を塡充もする。もつと精密な、そして殊にもつと確かな眞實性のある觀察がないかと搜してみたが、ただ英吉利の小說家スティヴンソンのそれしか見付からなかつた。「夢

に關する一章」といふ題の奇文で彼の告白してゐるところに據ると、スティヴンソンの物語中でもすぐれて獨創的なのは夢の裡に於いて製作、或は如何に少なくとも考案されたものだといふ。併し注意して此一章を讀むと、この著者は、彼の生涯の或時期の間、自ら睡つてゐるのか醒めてゐるのか知り分け難いやうな心理狀態を經驗したといふ事があきらかにされる。事實、精神が創造する時、一の制作の構成若くは或問題の解決に必要な努力をそれがしてゐる時に、睡眠は無い、と私は信ずる、――少なくとも精神の働いてゐる部分はその夢見てゐる部分と同じでない、前者は潛在意識の內に於いて、夢に影響しない且つ覺醒時に於いてしか發表され得ない研究をば進めてゐるのである。夢自身の方は、殆んど過去の蘇生に過ぎぬ。しかし斯の過去に就いては吾々に覺えがなくても宜い。それは忘れてしまはれた小さい事や、消滅したやうに見えて實は記憶の最深處に隱されてゐた追想等であることが多い。また覺醒時に於いて、不注意に、殆んど無意識的に知覺された物なり事なりの寫象も頻繁に喚び起こされる。殊に、記憶が此處彼處から引つ掻き寄せて來て、辻褄もあはさずに眠る人の意識に提供する追想の諸破片が多い。この無意味な掻き集めに對して、叡智は（茲でも、人がそれを如何に否定しても、やはり推理し續けてゐるから）何かの意義を索める、その辻褄のあはないのは脫落があるからだとして、之を補ふ爲に、それは他の諸追想を喚び起こすが、これ等も亦屢々同じ亂雜さを以つてあらはれて來るから、更に新しい說明が必要となり、際限なく同じ作用が續けられて行く。しかし今は此點に就いて詳說しない。ただ感覺の諸器官から傳達される材料に

通報の價値を與へる能力、卽ち眼と、耳と、身體の全表面と及びその全內部とから來る漠然とした諸印象をば的確な且つ決定された事物に變へる能力、それは追想であるといふ事を、先刻提起された質問に應へる爲に、言つて置けば足るであらう。

追想！　目醒めてゐると、いろいろの追想が消えてはあらはれ、代る替る吾人の注意を要求して行く。しかし此等は吾々の狀態と吾等の行爲とに密接に結び着けられた追想なのである。私は今デルヴェ侯の夢に關する著書を憶ひうかべてゐる。それは私が夢の問題を扱つてゐるからで、そして心理學協會に來てゐるからである、私の周圍と私の仕事とが、私の知覺する物と私のしようとしてゐる事とが、私の記憶の活動をば特定の一方向へ導いてゐるのである。目醒めてゐる間に喚び起こされる追想は、それがその時吾々のしてゐる事に如何に沒交涉であるやうに見えても、恒に何處からか之に結び着いてゐる。動物に於ける記憶の役目は何であるか？　それは、一々の狀態に卽いて、之に類似の過去の場合に隨伴して起こつた有益或は有害の結果を想起させて、その行ふべきことを彼に敎示するに在る。人間に於いては、記憶は之程まで行爲に縛られてゐない、それは私も認める、併し猶之に合流はしてゐる、與へられた或瞬間に於いて、吾々の諸追想は一の聯繫的全體、謂はば、一箇のピラミッドを形造つてゐるのであるが、その頂點は絕えず動いてゐて吾等の現在と合致し之とともに未來の中へ突き進んで行く。しかし斯やうに吾人の現在の仕事の上に集まり着いて之に據つて自らをあらはす諸追想の背後に、意識によつて照明された舞臺の下に、底に、猶他の何千、何

禹といふものがある。そして、其處に吾等の過去の生活が、その微小な細部に到たるまで失はれずに在つてそして吾人は忘れるといふ事がなく、また吾々の意識の最初の目覺めより以來吾等の知覺し、思惟し、意志したすべてのものが無際限に存續するのだと私は信ずる。しかし私の記憶が斯やうにその最も闇黑な深處の内に保存する諸追想は見るべからざる幻影の狀態で其處に存してゐるのである。それ等は明るい世界へ出ようと希つてゐるだらう、しかしそこへ昇つて行かうとはしない、それが不可能だといふ事と、私、生き且つ働いてゐる存在である、私がそれ等に關つてゐるより外に、せねばならぬものがあるといふ事とを知つてゐるのである。しかし與へられた或瞬間に現在の狀態から、急を要する行爲から、そして要するに記憶のあらゆる活動を唯一點に集中させたものから私が關心を失ふと假定しよう。言ひ換へれば、私が眠りに落ちる、と假定しよう。するとぢつとしてゐたそれ等の追想も、自分等の閉ぢ籠められてゐた意識の地下倉庫の蓋が開かれ、障碍が除かれたのを感じて、動き出す。起きて來る、騷ぎ始める、そして潜在意識の夜の更けに、見わたす限りの亡者の舞踏を踊り續けて行く。そして、みんな一緒に、細目に開いた戸口へ驅け寄る。皆そこから出たいのである。しかしそれは出來ぬ、人數が多過ぎる。この驅け集つた群集の中から、誰が幸に出て行くだらうか？　それは直ぐわかる。先刻、眼が醒めてゐた時、採用された追想は現在の狀態と吾々の現實の知覺とに對して同族關係を主張し得るものであつた。今は、もつと漠然とした諸形象が眼に浮かべられてゐる、耳を刺激するものは定かならぬ音である、身體の表面にわたつて

瀰漫してゐる觸覺は甚だ分明でない、しかしまた諸器官の内部から來る感覺も殖えて多數になつてゐる。そこで、色を、音を、つまりは物質性を攝取して己が體を充たしたく渴望する追想——幻影のうちで、知覺されてゐる着彩微塵、聞かれてゐる外と内との音響、その他斯のやうなものを同化し得て、しかも、更に、身體の有機的諸印象が組成する全般の感情的狀態と調和するやうなもののみがその希望を遂げるのである。追想と感覺との間に斯の接合が行はれる時、人は夢を見る。

プラトンの祖述者であり解釋家である哲人プロチノスは、エンネアデスの詩趣渺茫たる一節に於いて、人間がどうして生命にうまれ出るかをば說いてゐる。彼の言ふに、自然は衆くの粗形的身體を造る、しかしただ粗形を造るだけである。それのみの力に放置されてゐたのでは、自然は完成へまで行き得ない。他方に於いて、諸心はイデエの世界に棲んでゐる。行爲し得ず亦もとよりしようと思ふこともなしに、それ等は時間を超えて、空間の外に逍遙してゐる。しかし衆くの身體のうちには、その形によつて、孰れかの心の憧憬に、より好く呼應するものがある。また諸々の心のなかにも、孰れか或身體のうちに自分をばよりはつきりと認めるものがある。身體は、充分生活し得るやうになつて自然の手から放されたのでないから、心の方へ牽かれ昇つて行つて其處で完全な生命を受ける。そして心も、身體を視てそこに己れの影が映つてゐるやうに思ひ、鏡を凝視する時のやうに魅惑されて、牽かれるままに、傾いて行つて墮ちる。この墜落が生命の始めなのである。これ等浮動する心に私は無意識の深處で待つてゐる諸追想をば比較したい。吾々の夜の感覺はまた漸く

粗形の成りかけた身體に似てゐる。斯の感覺には溫熱が、多彩が、響聲が、そして生氣さへあるが、ただ定かな形がない。追想は一定し確然としてゐる、しかし無內容で無生命である。感覺は一の形を見付け出して自分のはつきりしない輪郭をばそれに卽して固定させようと希つてゐる。追想は或物質を得て自己を充たし、重くし、そして遂に現實化しようと望んでゐる。兩者は相牽く、そして追想——幻影は、彼に血と肉とを齎らす感覺のうちに自らを物質化して、それ獨特の生活、夢に生きる存在となる。

で夢の發生には何等の神祕もない。吾等の夢は殆んど吾々の觀る現實界と同樣にして仕上げられる。その操作の機構も大體に於いて違はない。眼の前に置かれた事物に就いて吾人の見るところのものは、耳の傍で發音された言句に就いて吾々の聞くところのものは、吾等の記憶がそれ等に添加するところのものに較べれば、事實、僅かなのである。新聞を看る時、書籍を繙く時、各語の一々の字を、或は各句の一々の語をすら實際知覺してゐるだらうか？ 若しさうだつたら一日かかつて幾頁も讀めまい。事實は語、或は句さへの中でちやうど殘りを想像するに必要なだけの幾字か、又は幾らかの目立つ線が知覺されるに過ぎぬ、他はすべてそれを見るとは思ふけれど、實際はそれに就いて自己幻覺をしてゐるのである。此點は多數の且つ一致する實驗によつて確立されてゐる。ゴルドシャイデルとミュエラァとの行つたものだけを引用したい。兩實驗者は《Entrée strictement interdite》〔入る事かたくおことわり〕、《Préface à la quatrième édition》〔第四版への序文〕、

と謂つたやうな慣用の型の通りの句を書き記すか印刷する、しかし字を變へ殊に落して、誤脫をわざと拵へて置く。被實驗者になる人は此等の型通りの句の前に坐らされるが、闇くしてあるから、何が書かれてあるか固より判らない。さて非常に短い、注視者が字の全部を知覺するには短か過ぎる時間だけ斯の書かれた句を照らす。尤もその前にアルファベットの一字を知覺するに必要な時間は實驗的に決定してあつた、で此慣用句を構成する三四十字のうちに就いて、たとへば、せいぜい八九字位しか被實驗者に識別され得ないやうになど容易に加減出來るのである。然るに、大抵の場合、彼は此慣用句を樂に讀み了はる。しかし吾々が此實驗に最も教へられる點は外に在る。

確かに知覺したと信ずる字は何々かと注視者に尋ねると、實際在つた字を指しもする、しかし亦それが他の字を以つて代へられてゐたか或はただ省かれてゐたかして、そこに無かつた字であることもある。斯やうに、感覺がそれを要求するやうに見えたから、彼はしかも皎々たる光の中で實際其處に無い字が浮かんで來るのを視たのである。故に事實知覺された諸文字は追想を喚起するのに役立つたのであつた。それ等によつて成立の端緒を與へられた慣用句をば、無意識的記憶が思ひ出して、その追想を外へ射影して幻覺的な狀態にしたのである。書かれたもの自體と共に且つそれより以上に、注視者は此追想を見たのであつた。つまり普通の讀書は一の推測の作業なのである、しかし抽象的な推測のではない、それは追想、すなはち單に憶ひ出されただけの隨つて非現實的の知覺が、其處此處に見出だされる自己の部分的實現を利用して完全に現實となるところの、外界化の

作用なのである。

斯のやうに、覺醒の狀態に於いて、吾々が事物に就いて得る知識には夢で遂行されるものと同じやうな作用が含まれてゐる。吾人は物に就いてその概略をしか知覺しないが、之がその物全體の追想に向つて救援を請ふのである、するとその全體の追想は、吾等の精神には意識されずに、とにかく單なる念として吾人の內部に留まつてゐたのであるが、此機會を利用して外へ躍り出て來る。實存する枠緣に嵌め入れられた斯の一種の幻覺をば、吾々はその物を視る時に自分で起こしてゐるのである。尤も斯の操作中に於ける追想の態度なり行動なりに就いても出來れば猶多く說かねばならぬであらう。ただ記憶の深底をその居所とする諸追想が其處に無生氣且つ無關心で靜止してゐるといふ考へは破つて置きたい。それ等は待望してゐる、それ等は殆んど待機してゐるのである。多少でも何かを考へ込みながら新聞を擴げると、恰もその考へてゐたものに適する語の上に直ぐ眼の行く事がないだらうか？　しかし讀み續けると意味がわからないから、直ぐ印刷してない字を見たのだと氣付く、ただ何處か似てゐる同じやうな格好の字があつたのである。故に考へつめられてゐた想念によつて、無意識の中で、それに繫がるあらゆる寫象と、それに適する諸語のあらゆる追想とが喚び醒まされてゐて、謂はば、意識への復歸を匂はされてゐたのに違ひない。それ等のうちで實際知覺された或語形によつて現實化されかかつてゐたものが現實に再び意識的となつたのである。

以上が本來の意味に於ける知覺の機構なのであつて、また夢のそれなのである。兩者の孰れの場

台に於いても、一方には、感覺器官上に接受された現實の諸印象があり、そして、他方には、これ等の印象のうちへ嵌まり入りその生氣に乘じて蘇生する追想がある。

しかし然うすると、知覺することと夢見ることとは何處が違ふのか？　睡るとはどういふ事なのか？　勿論、夢の生理的諸條件を云爲してゐるのではない。それは生理學者の間で論議さるべき問題だが、未だ解決には遠い。眠つてゐる人の心の狀態をどう考ふべきかに就いて言つてゐるのである。といふのは、精神は睡眠中でも作用してゐる、それは——今視て來たやうに、——感覺と追想との上に働いてゐる、そして睡つてゐても、醒めてゐても、感覺に追想を喚び起こさせて兩者を接合してゐる。操作の機構は孰れの場合に於いても同じいやうに見える。然るに一方には普通の知覺があつて、他方には夢がある。故に、彼處と此處とで、この機構は同じやうに働いてゐないのである。何處に相違があるのか？　そして何が睡眠の心理的特徵となるのか？

理論に賴りすぎてはいかぬ。睡るとは外界との交涉を斷つ事だと言ふ說がある。しかし睡眠が感覺をば外から來る諸印象に對して鎖さない事と、それが大抵の夢の材料をば之等に藉る事とは吾人の示した通りである。また思惟の高等作用に與へられた休息をば、推理の停止をば睡眠に於いて見る說がある、これも然う確かだとは思はれない。夢のうちでは、人は屢々論理に對して無關心になる。しかし論理する事不能にはならぬ。逆說に近くなる懼れはあつても、夢見る人の過誤は寧ろ推

理し過ぎるに在ると言つて宜い。展開するまぼろしを單純な傍觀者として看てゐれば迷妄は避けられる。しかしどうしてもそれを説明しようとすると、聯絡のない寫象をいろいろ綴り合はさねばならぬから、彼の論理は理性の論理を歪めてしまつて迷妄と相摩すの外ない。尤も叡智の高等な諸作用が睡眠中は弛緩する事と、及び、寫象の亂離が之を促進しなくでも、此場合屢々推理の能力が正常な推論を變に歪めて娯しむ事とは私も認める。併しこれは他のあらゆる能力に就いても亦同じ事だ。故に夢の狀態の特徴となるものは推論の放棄でもなく感覺の閉鎖でもない。理論はこれ位で放つて置いて事實に當つて行かう。

決定的な實驗は自分自身に卽して行はれねばならぬ。夢覺めた時——夢の最中に反省分析は殆んど出來ぬ——睡眠から覺醒への推移に瞳を凝らして。之を出來るだけ精察する、その本質上注意の外に在るものに注意して、覺醒時の觀察點から、眠る人の心の狀態を未だ消え去らぬうちに機敏に把へてみるのである。これは難かしいが、氣長く練習すれば出來ぬ事はない。茲で講演者に自分の見た一の夢と、それが覺めてから確かに認め得たと思ふ事とを語るのを許されたい。

で、夢で演壇に立つて、何かの集會で演説してゐる。後方の聽衆席が騷然として來た。それが次第に不穩となつて、喧噪となり、轟々となり、恐怖すべき怒號叱咤となつた。終に會場全體から、「放り出せ！（アラ・ボルト）放り出せ！（アラ・ボルト）」といふ叫聲が、拍子を取つて規則的に、涌き起つて來る。その瞬間はつと眼が醒めた。犬が隣家の庭で吠えてゐる、そして犬の「ワン、ワン」の一つ一つのうちに「放

り出せ」といふ叫聲が一つ宛消えて行く。この瞬間を摑まへるのである。今現はれて來た覺醒時の自分は、まだ其處にゐる夢の自分を引き留めて、言ひかける、「君を現行犯で捕へたぞ、君は怒號する集會を見せるが、ただ犬が吠えてゐるだけなのだ。逃げようとすな、放すものか、祕密を綺麗に白狀してしまへ、君のしてゐた事を讃せ（あらは）」と。すると夢の自分は答へるだらう、「覽てくれ、僕は何もしてゐなかつたのだ、そしてこれがすなはち、君と僕と、おたがひに違ふところなのだ。君は犬の吠えるのを聞いて、之は犬が吠えてゐるのだと了得（と）るのに、何も手間は要らぬと思ふのか？きつい間違ひだ！　自分では知らんでも、君はその爲に非常な努力を費してゐる。君は自分の記憶をば全部、自分の蓄積された經驗をば全部把づて、さうしてそれを急に締め付け、聞かれた此音に對してそれが最早唯一箇の點をしか、すなはち此感覺に最も多く類似してゐて且つ之を最も善く解釋する所の追想をしか提供しないやうにせねばならぬのだ。その上、此結合は完全でなければならぬ。兩者の間に些少の喰違ひもあつてはならぬ（さうでなかつたら、君はすなはち夢見てゐることとなる）、しかも君は注意によつてのみ、或は寧ろ感覺と記憶との同時の緊張によつてのみ斯の調整を確保することが出來るのだ、それは裁縫師がただ「假縫」された衣服を試みる時と同じである、そのなかへ嵌まる身體に沿つて彼は出來るだけ布を締め付け、針で止める。で君の生活は、覺醒の狀態に於いては、何もしてゐないと思ふ時でも、働いてゐる生活なのである、何故ならばあらゆる瞬間に於いて君は選擇し、且つあらゆる瞬間に於いて排斥しなければならぬからである。睡ると直

く戻つて來る無數の「主觀的」感覺をば君は意識外へ遠ざけてゐるから、君は自分の感覺のうちで選擇してゐる。君の現在の狀態に嵌まらない追想はすべて斥けてしまふから、君は非常な的確さと纖巧さとを以つて追想からも選擇してゐる。君の不斷に行つてゐる此選擇と、絶えず更新されて行く此適合とが、常識と呼ばれるものの本質的條件なのである。しかし適合と選擇とは君に不休の緊張狀態を續けさせてゐる。君はいま斯の事に氣が付かない、それは大氣の壓力をば感じないやうなものだ。しかし終には君も疲勞して來る。常識を持つといふ事は甚だ人を疲らすのである。

「然るに、先刻君に言つた通り、僕が君と違つてゐるのは正に僕が何もしないからなのだ。君が間斷なくしてゐる努力といふものをば、僕は單純にあつさり止めてしまつてゐる。君は生活に固執してゐる、僕はそれから遊離してゐる。すべては僕に取つてどうでも宜い。僕はすべてに無關心でゐる。睡るとは、無關心になることなのだ(一)。無關心になつてしまふ程度だけそれだけ人は睡る。我子の傍に眠る母は雷鳴の音には氣が付かずとも、子供の漏らす苦しさうな息の一つに眼を覺ます。自分の子に對して彼女はほんたうに睡つてゐたのだらうか？　絶えず自分の心にかかつてゐるものに對しては吾々は眠らないのである。

「僕が夢を見る時に何をしてゐるか問ふのだな？　眼が醒めてゐる時君のしてゐる事を言つて上げよう。君は僕を――夢裡の我である僕を、君の過去の總體である僕を――把る、そして君の現在の行爲を繞つて君が區劃する極めて小さい圓周の中へ、縮めて縮めて、遂に僕を閉ぢ籠めてしまふ。

斯の事がこれ覺醒してゐることなのである、これが普通の心理的生活に生きてゐることなのである、これが意欲してゐることなのである。夢の方は、更に說明する必要があるだらうか？　それは君が君自身を拋棄してしまふと同時に、自らを唯一點に集中するのを君が怠ると同時に、意欲するのを止めると同時に、君に自然に起こつて來る狀態なのである。更に詳しく知りたくば何か說明を求めたい事があれば、君の所有するすべてのものを君の心のかかる一點へ瞬時に且つ殆んど無意識的に集中さす爲に、覺醒時のあらゆる瞬間に於いて、君の意志がどう作用してゐるか尋ねると宜い。しかしその時には覺醒時の心理學に向つて聽かねばならぬ。それは君の疑問に答へるのを主な仕事としてゐる、といふのは覺醒してゐることと意欲することとは同一不二のものだからである。」

と夢の裡の私は言ふだらう。そして放つて置けば更にいろいろ多くの事を語るだらう。しかしもう結論する時である。夢と現との本質的な相違は一體何處に在るのか？　吾人の結論を概括して述べれば、覺めてゐても夢みてゐる時でも、同じ諸能力が働いてゐる、ただそれ等が此處では弛緩し、彼處では緊張してゐる。夢は心の生活全體の總和から、集中の努力を引いたものである。吾々は猶知覺する、追想もする、推理もする、知覺と追想と推論とが夢見る人の內に充ち溢れることもある、それは充溢といふ事が、精神の領域に於いては、努力を意味しないからである。努力を必要とするのは、調整の的確さなのである。犬の吠え聲が吾々の記憶のうちから、通りすがりに、集會の喚き叫びの追想を引つかけて來る事は、何等吾人を勞しない。しかしそれが其處へ往つて、他のあらゆ

る追想を排して殊更に、犬の吠え聲の追想に自ら接着する爲には、さうしてそれが吠え聲として解釋され得る、卽ち實際に知覺され得る爲には、積極的な努力が要る。夢を見てゐる人には最早それをするだけの力がない。斯の人が覺めてゐる人から區別されるのは、此點に於いてであつて、そして此點に於いてのみなのである。

斯れが相違である。それはいろいろな形であらはれてゐる。委曲へ入つて行く事は控へて、二三の點、すなはち夢の儚なさと、その展開の自眩く迅さと、無意義な追想に對するその好みとに就いて、各位の注意を惹いて置くに止めたい。

儚なさは容易に說明される。感覺と追想との關係を正確に調整しないで、却つて亂調子のままに放つて置くのは夢の本性だから、同一の感覺に對して甚だしく相違した追想の多數が夢では無差別に適合するやうになる。例へば玆に、視野の中に、綠色の斑文があつて白い點々がその上に散らばつてゐるとする。それは花の咲いてゐる芝生、球の轉がつてゐる玉突臺、——その他多くのものの追想を物質化することが出來る。これ等は皆感覺のうちに蘇生しようとして之を追つ驅け廻はしてゐるのである。時としてこれ等はあとさきに交はる交はる追ひ付く、すると芝生は變じて玉突臺となり、吾人はただならぬ轉變に遭遇する。また時には皆が一緒に追ひ詰める、すると芝生はそのまま玉突臺であつてしまふ、——夢みる人は推論によつて斯の迷妄を除かうとするだらうが、それは之をば猶甚だしくする。

或種の夢の展開の迅さも亦同じ原因から來る異つた一結果であるやうに思はれる。數秒のうちに、覺醒時に於いてはまる何日かを充たすやうな事件の系列をば夢は吾人に提供する。これに就いてはアルフレッド・モオリィの觀察(二)がよく知られてゐる、それは依然典型的たるを失はぬのであつて、最近にはいろいろと疑はれたけれど、夢の文獻の中には似たやうな話もあるから、私は眞實だとしたい。しかし諸寫象の斯やうな奔溢には些の神祕もない。よく視れば夢の裡の諸寫象は主に視覺的なのである、夢みる人が聞いたやうに思ふ談話は大抵の場合覺めてから造り直され、完成され、誇大にされてゐる、恐らくは更に、或場合に於いては、それは諸寫象に隨伴してゐた談話の念、すなはちその大體の意味に過ぎなかつたかも知れぬ。然るに、視象は如何に多數であつても、鳥瞰圖的に、唯一擧に與へられることが出來る。汎んや若干數の瞬間の繼起のうちには易々と包攝される。故に覺めてゐる時の數日間に亘るべきものをば夢が二三秒中に引つ裏んでも驚くことはない、それは縮尺して觀る、それは、つまり、記憶のするやうに爲て行くのである。覺醒時に於いては、視覺を解釋する爲に吾人の利用する視覺的追想は正確にその上に重ならねばならぬ、故にこれはその展開に隨つて、同じ時間を占めて行く、短かく言へば、外界の諸事件を認識する知覺は之等と同じだけ繼續する。しかし、夢では、視覺を解釋する追想が自己の自由を恢復して來る、視覺の流動性の爲に追想がそれへ固着し得ないやうになる、故に解釋する記憶の步調が最早實在のそれを採用しないで宜いやうになる、そこで寫象も、意が向けば、恰も速度を調節しない活動フイルムの映象のや

うに、目眩くほど迅速に急變し得るやうになる。が急變は、奔溢と一緒で、精神の領域に於いては努力を標示しない、努力を要するのは調節である、つねに調整の的確さなのである。解釋する記憶が緊張すれば、それが生活へ向つて注意を起こせば、つまりそれが夢から出離すれば、外界の諸事件はその進行を句切つて歩調を緩くする、――それはたとへば、時計に於いて、若し抑制するものがなかつたら殆んど瞬間的に戻つてしまふゼムマイの弛みをば、振子が刻々に分斷し數日の間にわたつて繼續させるやうなものである。

さて終りに等しく現實の感覺の上に重ねられ得る諸追想のうちから、夢は何故特にこれこれのものだけを選び擇るかといふ問題がある。夢の氣紛れも覺醒時のそれと同樣で殆んど説明し難い、ただそれの最も著しい傾向を指摘する位のことは出來る。普通の睡眠に於いては、夢は寧ろ閃光のやうにちらと思つた事や別に注意しないで看過した物を連れて戻つて來る。夜に、晝間起こつた事の夢を見ると、重要な事實でなくて、取るに足らぬ些事が最も再出し易い。此點に就いてはドラァジュ、ダブリュ・ロベアト、フロイド諸氏の意見に私も全く贊成する(三)。路で、電車を待つてゐる、歩道に立つてゐるのだから跳ね飛ばされる事はあり得ない、私とすれすれに車體が通つて行く、その時、起こり得る危險の念がふと心に浮んだなら、――ではない、危んでゐると自分で意識もしないのに、本能的に私の身體が後すさりしたなら、その夜、私は電車に轢かれた夢を見るかも知れぬ。

恐怪狀態の病人の傍に晝の間ゐる。一瞬時のうちに仄かな希望、――ほんの束の間の、殆んど氣付かれない幽かな微光――が心の裡に萌しかけたとする、その夜の夢で病人は快くなつてゐるかも知れぬ、いづれにしても死や病の夢をみるよりは寧ろ全快の夢を見るだらう。つまり、好んで還つて來るのは最も氣付かれなかつたものなのである。これは毫も不思議でない。夢見る我は弛緩してぼんやりしてゐる。それと最も善く調和する追想はうつかりしてゐた時の、努力の痕をとどめない追想なのである。

夢といふ事に就いて各位の批判に供したく思つた私の意見は以上のやうなものである。その盡くさない處は甚だ多い。しかもそれは今日吾人に識られてゐる夢、即ち寧ろ淺い睡眠に屬してゐて憶ひ出され得るものにしか關しない。人の深く眠る時には、恐らく之とはまた違つた性質の夢が見られてゐるだらう、しかし覺めるとそれに就いては殆んど何も殘らない。私の推測では、――主として理論的な隨つて假定的な理由に基いてではあるが、――吾々はその時、吾等の過去を遙かに廣遠に且つ精細に見渡すのではないかと思ふ。心理學は斯の深い睡眠をば目指してその努力を導く必要があらう、そして其處に於いて無意識的記憶の構造と作用とを研究するばかりでなく、更に進んで「心靈的研究」に屬する一層神祕な諸現象をも究明すべきであらう。私はこの境域へ漫りに侵入したくない、しかしながら「心靈研究協會」の驚くべき不撓の熱心によつて聚集された多くの觀察を尊重しない事も決して出來ぬ。無意識を踏査する事、特にそれに好適した方法を以つて精神の洞底深く入つて研究する事、斯れが新しく始まる世紀に於ける心理學の主要な仕事であらう。その前

遂には物理學や諸自然科學が、過去數世紀間に於いて、完成したものに恐らく匹敵する重要さを持つところの、華々しい幾多の發見がそれを待ち受けてゐるに違ひない。少なくともこれは斯學の爲に懐いてゐる自分の希ひであり、そして終りに臨んでそれへ送る私の祈りなのである。

〔註〕（一）私が茲に述べる考へは此講演の中で提唱されて以來次第に採用され展開されて行つた。睡眠――無關心の此思想が心理學へ入つてから、眠つてゐる人の意識の一般的狀態を指す爲に、「關心喪失」といふ語が案出された。クラパレエド氏は此思想に一の甚だ興味ある說を接いだが、それによると睡眠は有機體が自己防衛の一手段、一箇の立派な本能だといふ事となる。

（二）「私は自室で寢てゐた、枕頭には母がゐた。〔佛蘭西革命〕恐怖時代の夢をみる、虐殺の情景を目擊する、革命裁判所へ引き出される、ロベスピエルが、マラァが、フキエ・タンヴィユが、……、ゐる、彼等と激論する、裁判されて、死刑を宣告される、荷車に積まれて革命廣場へ連れて行かれる斷頭臺へ上る、執行人が自分を裁斷板へ縛り着ける　板が跳ねる、利刀が落下する、首が胴から離れるのを感ずる、餘り激しい苦しみに眼が醒めると、鎧臺の矢形の飾が頸に觸はつてゐる、何かの拍子で脫け離れたものが、ちやうど斬首臺の刀のやうな工合に、頸椎骨の上へ落ちてゐたのである。これはほんの束の間の事だつた、母も確かに然うだと言つてゐた、然るに私は此外部感覺を起點として…。。。[illegible]の繼起した夢を見たのである」（モオリィ、睡と夢、第四版、一六一頁）。

（三）フロイド一派の非常に多數の研究の材料となつてゐる抑壓された傾向と謂ふものに就いて茲で語るべき順序なのである。此講演のされた當時に、夢に關するフロイドの著書が公にされた、しかし「心理分析」はまだまだ今日の盛況には達してゐなかつたのである。

五

現在の追想と價の再認識（一）

よく知られてゐる一種の錯覺に就いて理論上の意見を二三開陳したい、或情景に對してゐるとき若くは何かの談話を交へてゐる時、急に、現に見てゐることを既に見た事があり、聞いてゐることを既に聞いた事があり、言つてゐることを既に言つた事があつて、――其處に、同じ場所に、同じ氣持ちで、同じものを感じ、知覺し、考へ、欲しながらゐた事があつて、――そしてつまり自分の過去の生活の幾瞬間かをその最も微小な細部に到るまで繰返して生きてゐるのだといふ確信の起こることがある。この錯覺は時として非常に强くなるから、その續いてゐる間、あらゆる瞬間に次に起こつて來ることを殆んど豫言し得るやうに思はれる、それをば前から識つてゐたと思ふに違ひないのだから、どうしてそれをば既に知つてゐないといふ事があらうか？　そのとき外部世界が、恰

も夢の中に在るかのやうに、奇異な相（すがた）の下に知覺される事も珍しくない、人は自分自身に對して他人となり、危く二重に分かれて、自分の言ふ事する事をば單なる傍觀者として眺めさうになる。斯やうな錯覺が極端になると「人格喪失(二)」に達するのであるが、之は躄の再認識と必ずしも恒に結合はしてゐぬ、しかし關聯はしてゐる。尤もすべて此等の徵候は強くも弱くもあらはれる。錯覺も、屢々完全な形を採るに到らないで、出來かけのままに停滯してしまふことがある。しかし、完と未完とに拘らず、それは恒に獨自の風貌を具備してゐるのである。

躄の再認識を觀察した記錄は極めて多いが、孰れも非常によく似てゐる、頻繁に同じ語句が出て來る。內省には熟練してゐる或文士が特に吾々の爲に書き記してくれた自己觀察を玆に持つてゐるが、この人は躄の再認識の錯覺といふものを全く知らず、それを經驗するのは自分だけだと思つてゐたのであつた。その叙述は十句ばかりから成つてゐるが、孰れの句もすべて、殆んどそのままで既に發表された觀察のうちに出て來てゐる。ただ最初は一の新しい言ひ表はし方を拾ひ得たと思つた、卽ち記述者によると斯の現象に君臨するものは「避け得ないといふ事」の感覺であつて、世界の如何なる權力と雖も次から次へ起こつて來る言葉なり動作なりをば抑制出來ぬやうに思はれると言ふのである。然るに、ベルナアルールロア君のあつめた觀察錄を讀み返してみたら、そのうちの一つに之と同じ言葉が載づてゐた、「私は自分のするいろいろの事を眺めてゐた、それ等は避け得ない事であつた(三)」と。實際、これほど的確に型に嵌つた錯覺はあるまいと思はれる。

躄の再認識と多少の共通點はあるが、全體の樣子は違つてゐて、その中に含まれない錯覺が二三ある。一八九六年にアルノオ君は一の著しい例を記述してゐるが、それは同君が既に三年前から研究してゐたものであつて、その三年の間、患者はずつと繼續して、躄再認識を經驗してゐたか或は經驗すると信じてゐて、自分の全生活をもう一度繰返してゐるのだと思つてゐたのであつた(四)。尤も斯ういふ例は之ばかりでなくて、餘程以前にピックの擧げた場合(五)、クラエペリンの一觀察(六)、フオレルのそれ(七)なども之に酷く似てゐる。此等の觀察を讀んで直ぐ考へられるものは躄の再認識とは大分違ふ。それは最早俄に起こつて急に去り、その奇異さで人を驚かす印象ではない。患者は却つて自分の經驗するところのものが普通だと思つてゐる、時には斯の感じを要求するそれが無い時には搜し求める、そしてまた實際より以上にそれが續いてゐると信ずるのである。さて、更に詳しく觀ると、之とは違つてもつと深い相違點が見出だされる。躄の再認識に於いては、錯覺された追想が決して過去の或一點に局限されてゐない、それは不足の過去のうちに、過去一般のうちに在る。反對に、玆では、患者は屢々自分等の過去の經驗だといふものをばはつきりした日附に結び着ける、彼等は眞性の記憶の幻覺に罹つてゐるのである。尙これ等がすべて精神錯亂者だといふ事も注意せねばならぬ、ピックの扱つたのもフオレルのも、アルノオのも被害妄想に侵されてゐる、クラエペリンのは幻視幻聽を有する精神異常者である。恐らく彼等の精神障害はコリアが「重複性記憶錯亂症(八)」の名の下に記述し、又ピック自身も、近年の研究に於いては、「記憶錯亂

症の一新型(九)」と呼んでゐるところのものに屬するのであらう。この後者の疾患に於いては、患者は自分の現在の生活をば既に二三度も生きて來たことがあると信ずる。アルノオの扱つた病者の持つてゐたのは正しく斯の錯覺であつた。

精神衰弱に關するピエル・ジャネ君の諸研究が起こす問題は之よりも要點に觸れてゐる。多くの研究家とは反對に、ジャネ君は覺の再認識を以つて、明確に病的な狀態だとするが、比較的まれな、孰れにしても曖昧渾沌としたものであつて、之は記憶特有の錯覺と觀るのは、稍輕卒に過ぎるとしてゐる(十)。實際に於いてはもつと廣範圍にわたる障礙だとしてゐる。「實在把握の作用」が弱くなつて、患者は現實をば完全に摑み得ない、それが現在なのか過去なのか判らず、未來だとさへ思へる、過去だと決めるのはいろいろ質問されてこの考へを暗示されるからなのである。——ピエル・ジャネ君の非常に深く研究された精神衰弱といふものが多くの異常現象を育む地盤になる事は爭へない。覺の再認識もそれ等のうちに入る。また吾人は覺再認識一般の精神衰弱的な性質をば否定するものでもない。しかし此現象が、的確、完全であつて、知覺と追想とに判然と分析される時、殊に何等他の異常を示さない人々のうちに起こる時、その內部構造が、精神衰弱の諸徵候をば遺憾なく呈する精神のうちに、漠然たる形式のもとに、單なる傾向或は潛在の狀態としてあらはれるものに於けると同じだとは言ひ難い。事實本來の意味に於ける覺の再認識——常に一時的であつて且つさまで重要でない障害——は、或種の能力の不足が心的生活の全面に伸び擴がつて精神衰弱とならないやうに、之をば或一點、或二三の瞬間に局限して、之にその最も害の少ない形をとらせる爲に自然の案出した一の手段であると想像する事も出來る。するとこの唯一點への集中がその結果として生ずる心の狀態に著しい的確さと、複雜性と、そして殊に個性とをば付與することはあきらかであるが、之等は一般の精神衰弱者のうちにはないものである。其處では根本的な能力不足の障害が漠然とした覺再認識、及び他の多くの病的現象に分散されてしまふ。故に此錯覺は此處では一個の心理的實體を形成するけれども、精神衰弱者のうちに於いては然うでないのである。尤も精神衰弱者に起こる此錯覺の研究もすべて利用はされねばならぬ。併し何故にまた如何にして「既に見たことがある」といふ感情が、現在の知覺とその上に之と同じだつたとされる過去の知覺とが殊に判然と確認される場合——吾々の意見では、それは極く頻繁なのであるが——に於いて特に起こつて來るかといふ事も亦やはり考へねばならぬ。エンゼン、クラエペリン、ボナテルリ、サンダア、アンエル等、覺再認識を研究した諸家の多くが彼等自身その經驗者であつた事も記憶さるべきで、彼等は單に多くの觀察を採錄したばかりでなく、心理學者としての職業上、その體驗した處のものをも記してゐる。然るに、すべてこれ等の諸家は等しく此現象をば過去の極めて明確な反復として、一面に於いて知覺であり、他面に於いて追想である重複現象として記述してゐるのであつて、——之をば唯一面的な現象としては、單に實在が宙に浮いてゐて、時間から離脫し、任意に、知覺若くは追想としてあらはれ得るやうな狀態としては觀てゐない。斯のやうに、精神衰弱者に關してジャネ

君が吾人を啓發された事は決して無駄でないのだが、しかし吾々はやはり本來の意味に於ける覆再認識現象に就いて特に説明せねばならぬのである(十一)。

この説明を何處に求むべきか？

先づ最初浮かぶ考へとしては現在の知覺と、內容上或は少なくとも感情的色合上、事實之に似てゐた或以前の知覺とが同一視される事から覆再認識が生ずるものと思はれる。斯の以前の知覺は、或人々（サンダア(十二)、ヘフヂング(十三)、ル・ロォラン(十四)、ブゥルドン(十五)、ベリユグウ(十六)）によると覺醒時のものであり、他の人々（ゼエムズ・シユリイ(十七)、ラビイ(十八)、その他）によると夢に屬するが、現にしても夢にしても恒に無意識的なものであるとグラゝセは言つてゐる(十九)。孰れにしても、それが或見られたものの追想であるとしても若くは或想像されたものの追想であるとしても、要するに事實存在する或追想の混雜した若くは不完全な想起があるといふ事となる(二〇)。

この説明はその提案者である諸家の一三が之を限定する範圍の內に於いてならば受け容れられる(二一)。事實、それは幾らかの點に於いて覆再認識に類似する或現象に當て嵌まるのである。初めて見る情景に對して、それを前に見たことがあるのでないか、と思ふ場合がよくある。反省すると、現在の經驗に何處か似てゐる同じやうな知覺が以前あつた事に氣付く。しかし今茲で研究してゐる現象は之と非常に違つたものなのである。茲で扱ふものに於いては二つの經驗が嚴密に同一なもの

としてあらはれるのであつて、如何に反省してみても此同一性が漠然とした類似になつてしまはないといふ事を吾々は深く感ずる、何故ならば、茲で吾人は單に「見たことがある」ものに對してゐるのでなく、更に突き進んで、「經て來た生活」のただ中を通つてゐるのだからである。過去の一瞬或は數瞬間の全部が、そのあらゆる表象的、情緒的、行爲的內容を伴つて、また再び始まつてゐると信じられるのである。この第一の相違點を强調したのはクラェペリンであるが、彼は更に第二のそれを指摘してゐる(二二)。覆再認識の錯覺は忽然と人を襲つて、又忽然と去り、跡に夢のやうな印象を殘してゆく。斯ういふ事は或現在經驗と之に類似する以前の一經驗との混同に於いては看られない、此混同は成立するのに多少の時間を要し、また多少の難易さを以つて解消されるのである。猶付け加ふべき事には（そして之が恐らく根本であらうが）この混同は他の誤謬と同じ一誤謬であり、單なる知性の領域內に限定された一現象である。之に反して、覆の再認識は人格全體を搖がす事がある。それは知性と等しく感情をも意志をも侵す。それを經驗する者は屢々一種特徵的な情緒に襲はれる、多少とも自分自身に對して他人となりそして「自働化された」やうになる。すなはち吾人が茲に直面する錯覺は種々の要素を含み且つそれ等をば單一結果のうちに統制して、心理學上儼然たる個性的存在を形成してゐるのである(二三)。

その中心は何處に在るのだらうか？　表象のうちにか、情緒のうちにか、或は意志の狀態のうちに在るのだらうか？

第一の觀方を採る說では、知覺の最中か若しくはその少し前に發生して、そして直ぐ過去の中へ追ひ遣られる寫象によつて覆再認識が說明される。この謎の寫象を明らかにする爲には、まづ腦が二重になつてゐて、同一瞬間に二個の寫象が產まれる、そのうち一つは或場合には他より遲れる事が出來て、その强さも弱い處から、追想のやうな役目をする、と想像されるのである(ヴイガン(二四)、エンゼン(二五))。フイエ(二六)も亦「腦の諸中樞間の協同作用と同時性との缺乏」、其處から生ずる「複視」、「內部的反響と反復との病的現象」といふものを說いてゐる。——心理學は今日これ等の解剖的圖式から離脫しようとしてゐるのであつて、腦二重の假說も旣に完全に棄却されてしまつた。そこでこの第二の寫象を以つて知覺自體に卽した或物であるとする立場が殘る。アンエルの考へでは、知覺にはすべて二つの相がある。すなはち一方には意識に捺された生の印象と、他方には精神による此印象の領得とが識別されねばならぬ。普通では、この兩過程が一緒に行はれる、併し若し後者が遲れて起こるなら、其處に一の二重寫象が生じ、それが覆再認識の原因となるのである(二七)。ピエロン君も同じやうな考へを述べてゐられる(二八)。ラランド君の說で(二九)、アルノオ君(三〇)の敷衍してゐるものによると、一の情景は吾等に瞬間的で且つ僅かに意識的な第一印象を與へる事が出來る、次に數秒間の放心が來る、それから後で普通の知覺が確立される。若し、この最後の瞬間に最初の印象が戻つて來るならば、それは漠然とした追想のやうに思はれて、時間的に限定されることが出來ず、したがつて吾々は覆再認識を經驗する事となる。マイヤアスの提議する解釋もこれ等

に劣らぬ巧妙なものであるが、それは意識する我と「意識線下」の我との區別に基礎を置いてゐる、前者は眼前の情景からただ總括的な印象を受けるだけであつて、此印象の細部はいつも外部刺激のそれより稍遲れてあらはれる、後者はこの細部をば發生と同瞬間に次々に撮影してゆく。故に後者は意識よりも前進してゐる、で若し後者が急に之へあらはれると、之が今知覺しつつある所のものの追想をばそれが之へ持つて來る事となるのである(三一)。ルメエトル君はラランドとマイヤアスとのあひだの中間的立場を採つてゐる(三二)。マイヤアスより以前に、ヂュガ君は人格重複の假說を述べた事がある(三三)。最後にずつと前のことであるが、リボオは知覺に繼いで起こつてそして知覺よりも强い一種の幻覺を假定し、この幻覺の爲に知覺が後列へ退けられて薄くなり追想のやうになつてしまふと說いて、二重寫象の說に非常に大きい力を與へたものである(三四)。

これ等の說の一々が要求する精細な檢討を茲で試みることは出來ぬ。ただこの諸說の原則とするところは容認するといふに止めたい、一は他の複寫である二個の寫象が意識內に事實存在する事が覆再認識に必要なのをば吾々は信ずる。吾人の考へでは、大なる困難は此等二寫象の一が過去に退けられてゐる理由と及びこの錯覺が繼續的である理由とをば同時に說明する事に在る。若し過去中に退けられた寫象が現在のうちに局限された寫象より以前のものであるとするならば、若しそれをば强さの足らぬ、或は僅かに注意された、或は微かにしか意識されなかつた最初の知覺と觀るならば、それが追想の形をとる理由は少なくとも說明されようとするわけである、併し此場合それは知

覺の或瞬間の追想でしかあり得ない、錯覺が知覺の全長にわたつて繼續し、維持される事は出來ぬのである。また若し、之と反對に、重複する二寫象が一緒に形成されるものならば、錯覺の繼續といふ事はずつとよく理解される、しかしそのうちの一つが過去の中へ追ひ退けられる何等の理由もなくなつてしまふ。尤も此等のうちの孰れの臆說を採るとしても、第一類のものによつてさへも、斯の退斥が事實果して說明されるかどうか、そして或知覺の薄弱または潛在意識的といふ性質が之に追想の形態を與へるに充分であるか否か甚だ疑問だとせねばならぬ。いづれにしても、覺再認識の理論は今述べて來た二つの要求を同時に滿たす必要がある、そして此二つの要求が互に衝突するものでない事を理解し得る爲には、純粹に心理學的な見地から、普通の追想の性質をば考究せねばならぬと思ふのである。

以上の困難を避ける爲に二重寫象說を否定し、「既に見たことがある」といふ「知的感情」が時として吾人の現在知覺の上に添ははつて來て、過去がまた始まつてゐると思はせるのだとしたらどうであらうか？ 斯の考へをばエ・ベルナアルール ロア君はその有名な著書の中で述べてゐる(三五)。現在の再認識が大抵の場合何等過去の想起を伴はぬといふ點に就いてはわれわれ全く彼に贊同する。吾人自身も亦日常經驗するところの事物の「親しみ」といふものがその喚び起こす反動の自働性に基づくのであつて、寫象—知覺に重なつて來る追想—寫象の存在に由るのでない事を以前明らかにした事がある(三六)。しかし此「親しみ」の感情は覺再認識のうちに起こつて來るものとは確かに違

ふ、且つベルナアルール ロア君自身もこの二つをば注意して區別してゐる(三七)。そこで結局同君の言ふところの感情は道で人に擦れ違つて、何處かで遭つた事があるに相違ないと思ふ時のそれに當たる事となる。しかし、第一に、斯の感情は疑ひもなく或實際の追想に、その人か或は似た人かのそれにしつかり結び着いてゐる、恐らくそれはこの追想の茫漠として消えかかつた意識の上に、之を喚び戻さうとする極めて弱い努力の氣持ちが加はつたものに過ぎまい。次に斯のやうな場合には「此人を何處かで見たことがある」と思ふのであつて、「此人をば此場所で、同じ事情の下に、現在の瞬間と識別し難い過去の生活の或瞬間に於いて見た事がある」と信ずるのでない事を注意せねばならぬ。で假に覺再認識の根源が或感情に在るとしても、此感情は全く特殊なものであつて、意識內を彷徨する普通の再認識のそれが戸惑ひしたものとは一緒に出來ぬ。特殊なものであるから、それは特にまた研究を必要とする特殊な諸原因に基づかねばならぬのである。

最後に此現象の起原をば、感情や表象の世界よりも寧ろ、行爲のそれのうちに求める途が殘つてゐる。これが最近に於ける覺再認識諸說の傾向となつてゐる。既に、餘程前に、心理的生活の緊張或は調子の高低を區別する必要をば吾人は指摘した事がある。その時吾々の言つたのは、行爲へ向つて緊張してゐるに隨つて意識が愈々完全な均衡の狀態に在り、一種の夢想のうちに弛緩してゐるに隨つてそれがますます躊躇として來ること、この兩極端面、行爲の平面と夢想の平面との間に、あらゆる中間的平面があつて「生活への注意」と實在への順應とが段々減つて行くあらゆる階梯に

對應してゐるといふことであつた(三八)。此點に就いて吾人の開陳した思想は當時容易に受け容れられなかつた、或人々はそれをば逆説的だと判定した。事實、それは一般に承認されてゐた諸理論に、心の生活の原子論的觀方に衝突したのであつた。しかしながら心理學は漸次、殊にピエル・ジャネ君が獨特の方法で、違つた途から、吾人の結論に全然當て嵌まるやうな結果に到達されて以來、目立つて之へ近づいて來る。そこで再認識の起原も心の調子の低下といふ事に求められるやうになつて來た。ピエル・ジャネ君にとつては、斯ういふ低下が直接に、普通の知覺に隨伴する綜合の努力を減らす事によつて、此現象を産む、普通の知覺がこの時漠然とした追想或は夢の姿をとるのである(三九)。更に的確に言へば、それはジャネ君が非常に獨創的な方法で研究された「不充足の感情」の一例に過ぎない、之を經驗する者は、自分の知覺のうちに含まれてゐる實在性が完全でなく、隨つてその現實性も亦不十分なのに困惑して、それがいつたい現在であるのか、過去に屬するものなのか、或はまた未來の事なのかと迷つてしまふ。レオン・キャンドベルグ君は斯の綜合の努力の減退といふ考へを再び採つて敷衍した(四〇)。他方ハイマンズは如何にして「心力の低下」が吾人日常周圍の有様を變更し、其處に展開する諸事件に「既に見られた事がある」ものの外觀を與へるかといふ點を明瞭にしようとした。彼は言ふ「吾人日常の周圍によつて常には規則的に誘發される聯想が極めて弱くしか生じないやうになつたと假定しよう。此時起こるものは正しく、嘗て見慣れ聞慣れてはゐたけれど長い間忘れてしまつてゐた場所や、事物や、歌の節やをば、多年の後、また再び

見聞きする場合に起こるものと同じである……。然るに若し、後者の場合に、聯想が弱くしか伸びないのをば以つて、それが現在のものと同じ過去の事物と關係してゐた以前の經驗である徵だと解釋するのならば、前者の場合に於いても、即ち心力減退の結果、日常周圍の聯想誘發力が甚だしく減殺された場合に於いても、吾々に起こる印象は其處に、同じ様に、茫漠たる過去の奥處から抽き出された種々の事件なり事情なりが繰返されてゐるといふ事でなければならぬと思はれる(四一)」と。最後に、價再認識の非常に透徹した分析をば自己觀察の形で含んでゐる一の深い研究に於いて(四二)、ヅロマアルとアルベスとの兩君は此現象をば「注意强度」の減退から起こる「下級精神」と「高級精神」との乖離によつて説明してゐる。前者が、後者の助けを藉らずに作用して、現在の事物を機械的に知覺する、そして後者は、事物そのものを觀ないで、前者の採錄した寫象をのみ專ら見るといふのである(四三)。

これ等の諸説に就いても、以前のものに就いてと同じく、吾々はその原則を承認すると言ひたい價再認識の最初の原因は無論心理的生活一般の調子の低下に求められねばならぬ。困難な點は生活への注意不足が茲で取る極めて特殊な形態を導き出す事と、またそれが吾人に現在をば過去の繰返したと信じさせる理由を説明する事となのである。知覺の要求する綜合の努力の弛緩が實在に夢の相(すがた)を與へるといふのは宜い、併し何故此夢が既に生活されて來た或瞬間の全體的な反復としてあらはれるのか? 「高級精神」が出て來て自己の注意をば斯の無注意的知覺の上へ加へると想像して

も、さうして造られるものはせいぜいのところ注意深く觀察された追想に過ぎぬ、追想を隨伴する知覺ではない。また、ヘイマンズの想像するやうな聯想記憶の不活潑はただ周圍の再認識を困難にするだけであつて、この珍らしくないものの困難な再認識と、現在經驗にあらゆる點で一致する或以前の定まつた經驗の追想との間には非常な距離がある。之を要するに、後の說明法と前のそれとを組合せて、覺再認識が同時に心理的緊張の減退とさうして寫象の重複とに基づいてゐることを認め、斯の重複を產む爲には斯の減退がどういふものでなければならぬか、單なる減退をあらはすものとしての重複とは何であるかといふ事を考へねばならぬと思はれる。しかし人工的にこの二つの說を互に近寄らせるといふことは問題とならぬ。接近が自然にひとり行はれる爲には、記憶の機構をば此等の指示された二方向に沿うて研究して行く必要がある。

しかしその前に病的或は異常的な心理學上の諸事實に關する一の一般的な考察をば提出したい。此等の事實の中には、無論明白に普通生活力の不十分に基づくものがある。それは知覺喪失、健忘、失語症、麻痺等、すべて或種の感覺、或種類の追想、或種の運動の廢棄をば特徵とする諸狀態である。此等の狀態を定義する爲には、ただ簡單に意識から消え去つたものを指摘すれば宜い。これ等は缺乏の上に成立してゐる。誰が見ても心理的缺陷なのである。

之と反對に、病的或は異常的諸狀態で普通の生活の上に更に付け加はり、之を貧弱にしないで豐

富にするやうに見えるものがある。譫妄、幻覺、固定觀念等は積極的な事實である。此等は或ものの解消の上にでなくて、その存立の上に形成される。精神のうちに何か新しい感じ方と考へ方とをば導入するやうに觀える。これ等を定義する爲には、否定し且つその奪ふところのものを言ふにとどまらないで、却つて肯定しそしてその齎すところのものをば考察せねばならぬ。精神錯亂徵候の大多數が此第二類に屬するのであるが、心理的異常性及び特異性の多くに就いても亦斯の事は言へる。覺再認識もそのうちである。後で述べるやうに、それは眞の再認識とは別の一種獨得の形容を備へてゐるのである。

しかし、哲學者として考へるならば、精神の領域に於いて、疾病と退化とが眞實何かを創造する能力を有するか否か、また茲で異常現象に新奇の外觀を與へる一見積極的な諸特徵も、その性質を追求すれば、內部的空隙に、普通現象の缺損に還元され得ないか、甚だ究明の要があると思はれる。誰しも一般に病氣は減衰であると言ふ。尤もこれは曖昧な言ひ方であつて、意識から何等見るべきものが失はれなかつた場合には、何に於いて意識が減らされたかを的確に指摘せねばならぬ。吾々は嘗つて斯樣の事を試みた、それは少し前にも言つた通りである。吾人の說いたのは意識の諸狀態の數に關する減衰の外に、それ等の堅實性或はそれ等の重壓を侵す他の減衰があるといふことであつた。前者の場合に於いては、疾病はただ簡單に或諸狀態を抹殺するだけで他へ觸れない。後者に於いては、一個と雖も心理的狀態は減らぬ。しかし總べてが侵される、すべてがそれぞれの重壓を、

卽ちそれぞれが實在の中へ分け入り押し徹つて行く力をば失くしてしまふ(自殺)。これは「生活への注意」が衰へたからなのである、そしてあらはれて來る種々の新現象は斯の離脱の外貌たるに過ぎぬのである。

尤も斯やうな形式の下に於いてさへ、この考へは猶甚だ一般的であつて心理學的解釋の精細な用には立ち難い。しかし少なくともそれは說明を見出す爲に採るべき道程をば指示する。

事實、それを承認するならば、特異な諸性質を備へてあらはれる病的或は變態的現象の爲に、之を起こす能動的原因を求める事は無駄となる、何故ならば斯の現象は、外觀に拘らず、何等積極的、創意的のものを持たぬからである。之は既に通常時に於いて造られてゐた、しかしあらはれようと欲する時にはいつも、恒に働いてゐて生活への注意をば確保する之と反對の諸機制の爲に、妨げられてゐたのである。通常の心理的生活は、吾人の考へるところでは、組織された種々の作用から成立つが、これ等は皆各自々身の裝置をば持つてゐる。一々の裝置は、それ自身に放任されたのでは、夥い有害無益の結果を展開して、他の作用を攪亂し、ひいて吾々の滑脫な均衡をば、實在に對して不斷に更新される吾々の順應をば不整にしてしまふ。しかし除外と、修正と、整合との作業が絕えず行はれてゐて、そこから精神の健全さが生まれて來るのである。この作業が緩くなると、いろいろの徵候があらはれる、それ等をば吾人はその時創めて造られたものと信ずるのであるが、しかし實際は、それ等は恒にそこに在つたか、或は少なくとも放任されてゐたならそこに在つたに違ひな

いかなのである。無論、理論家は當然病的諸事實の性質の特異さに强く打たれる。これ等の事實は複雜であるに拘らずその錯綜のうちに或統整を呈するから、彼の先づ試みるのはこれ等をば一の能動的原因に關係さして、之にその種々の要素の統合を歸する事である。けれど若し、精神の領域に於いては、疾病の力で何物も創造されぬならば、之は或自働機制が緩くなるか停まつてしまつた結果、普通の狀態に於いてはその爲に妨げられてゐた他の機制が十分發動するやうになつたといふ事實に存するの外はない。したがつて心理學がその重大使命として玆で說明すべき事は如何にして斯く斯くの諸現象が病者のうちに起こるかといふ事でなくて、反對に何故それ等が健全な人間に於いては觀られないかといふ事となる。

吾人はすでに此見地から夢の諸現象をば觀察した。夢は一般に覺醒時のしつかりした知覺や概念の上に更に加はり添ふ多くのまぼろし、現を超越して浮遊する鬼火のやうなものだと觀られてゐる。それは別種特異な事實であつて、心理學はその研究を特別の一章中に包含せねばならぬが、その後は之に關心しなくて宜いことになつてゐる。そして人が斯う考へるのも無理はない、といふのは覺醒時の狀態が實際上吾人に大切であるに反し、夢は世界中で最も行爲と無關係であり、最も無用なものだからである。また、實際的に觀て、それが副產物であるところから、理論的にも、吾々はそれを偶然事と看做し易い。斯の先入見を排除すれば、夢の狀態は却つて吾等の普通狀態の「地盤」としてあらはれて來る。それが現の上へ付け加ははるのでない、現を生ずる爲に夢の生活が、伸び

擴がつた心理的生活が限定され、集中され、緊張するのである。或意味に於いては、夢のうちの知覺や記憶やは覺醒時のそれ等より自然に働いてゐる、意識は其處で自ら娛んで知覺する爲に知覺し、追想する爲に追想してゐて、何等生活への、即ち遂行すべき行爲への關心を持つてゐない。しかし覺めてゐるといふ事は除外する事、選擇する事、夢の伸び擴がつた生活の全體をば實際問題の突出して來るその點へ不斷に集中してゐる事に外ならぬ。覺めてゐるといふのは意志してゐる事を意味する。意欲を捨て、生を離れ、超脱すれば、現の我は夢の我となり、緊張に於いて失ふが、延長に於いて增大する。故に現の機制は夢のより複雜であり、いつそう微妙であり、また更に積極的であつて、そして現が、寧ろ遙かに夢にも增して、說明を要求するのである。

さて、夢があらゆる點で精神錯亂に類似するならば、夢に就いて吾人の述べた處は又精神錯亂の多くの事實に適用出來るであらう。ただ餘り體系的な考へでこれ等の現象の研究に着手するのはどうかと思はれる。これ等をすべて同じ方式で解釋し得ることはあるまい。また、これ等のうちの多くは、未だ充分明確に定義されてゐず、說明を與へられる時期に達してゐない。先きに言つて置いたやうに、吾人は吾人の說をば單なる方法論的指示として提出するのであつて、目的とする處は唯或方向へ理論家の注意を向けようとするに在る。併しながら病的或は異常諸事實の中には今から既にそれを適用し得ると思はれるものもある。その最も著しいうちの一つが覺再認識なのである。知覺の機制と記憶の機制とは、吾等の意見では、正しくこの二つの能力の働きが自然の結果として覺

再認識を生ずるやうに出來てゐる、ただ一の特殊な機制が直ぐに介入して之を未然に防ぐのである。故に重要問題は何故之が或瞬間に、或人々のうちに現はれるかといふのでなくて、寧ろ何故に之があらゆる瞬間にすべての人のうちに起こらないかといふ事となる。

事實、追想がどうして形成されるかを觀察してみよう。しかし斷つて置くが、玆に言ふ追想は常に一の心理的狀態なのであつて、時に意識的、時に半ば意識的、大抵は無意識的である。腦中に殘された痕跡としての追想に就いては、吾人既に他の場所で說を述べて置いた。吾々の考へによると種々の記憶はよく腦のうちに局處され得る、その意味は腦が追想の各種に對して各別の裝置を備へてゐて、之が純粹の追想をば知覺なり寫象なりの發端へ展開せしめるといふ事なのである、この限界を超えて、あらゆる追想にその腦物質中に於ける場所をば指定しようとするのは、ただ疑ふべからざる心理學上の事實を甚だ疑ふべき解剖的言語に飜譯する事に過ぎぬのであつて、その到達する結果は觀察によつて拒否される。實際、吾々が追想に就いて語る時には、吾々は何か吾人の意識の所有するものか或は之が何時でも、謂はば、己の方へ手繰り寄せて掴へ得るものかをば想つてゐる、事實、追想は意識と無意識とのあひだを往來してゐるのであつて、この二狀態間の推移は完全に繼續的であり、限界といふものが殆んどないから、その間に根本的な性質の相違が想像される何等の理由もない。で吾人がこれから扱つて行かうとする追想も亦斯のやうなものなのである。それから

猶、簡單にする爲に、知覺の名をばすべて現在の或ものの意識に、それが內部知覺であつても外部知覺であつても等しく與へる事としたい。吾々の主張するのは追想の形成が知覺のそれに決して遲れるものでなく、彼と此とは同時に行はれるといふ事なのである。知覺が生起するに隨つて、傍にその追想が出來て行く、ちやうど形が影を落すやうなものである。しかし意識は普通それをば見ない、振り返つて影を見る時、眼が之を照らすなら影は見えるだらうか。

實際追想が知覺自體の全長にずうつと沿つて起こるものでないと假定しよう、すると如何なる瞬間にそれは生まれるのか。知覺が過ぎ去るのを待つて出て來るのか？　一般にそれとはなく、無意識的追想を以つて一の心理的狀態とする人も、之をば腦の或變化と觀る人も、共にさういふ風に考へてゐる。先づ現在の心理的狀態があつて、次に、それがなくなつてしまつた時に、なくなつた斯の狀態の追想があるとされる。先づ或一群の細胞の發動がある、そして之が知覺である、次に知覺の消滅後に此等の細胞のうちに殘る痕跡がある、そして之が追想であるとされる。しかし、ものが斯ういふ風に行く爲には、吾々の意識的存在の流れが截然と區別された諸狀態から成立つてゐて、また此等の一々が客觀的に一の始發點と、また客觀的に一の終着點とを具へてゐなければなるまい。けれど斯やうに吾等の心理的生活を、芝居でこの場あの場といふ如くに、分段する區劃が決して絕對的のものでなく、それは吾々の過去の解釋の仕方につれて、如何樣にも、變はるものだといふ事を考へないで濟むだらうか？　自分の採る見地の如何によつて、興味の中心を何處に置くかに隨つ

て、私は樣々にきのふの日を分割する、種々の事情と事件とがいろいろの群を作つてゐるのを見分ける。これ等の區分が皆等しく人工的ではないにしても、心理的生活の展開は不斷のものであるから、そのうちの孰れもそれ自身に於いて存するものはない。午後は郊外で友達と一緒に過したのであるが、之は晝食＋散策＋晩餐、或は談話＋談話＋談話、その他に分けられる、そして此等の談話は互に侵し合つてゐるから、その孰れを取つて截然と形成され區別された一存在とすることも出來ない。分段の方法は幾らでも可能である、どの方法も實在の明確な節調に適合するものはない。如何なる權利によつて記憶がそのうちの一つを選び、心理的生活を劃然たる段落に區分し、各段落の結末を待つて知覺との決濟を果たすと想像するのであるか？

或はまた主張して外物の知覺はそれのあらはれると同時に始まり、その消え去ると同時に終はる、故に少なくとも此場合に於いては、追想が知覺に替はるその的確な瞬間をば指示し得ると言へばどうだらうか？　これは知覺が普通繼續する諸部分から組成されてゐて、そしてこれ等の部分が又全體に優るとも劣らぬ個性を具へてゐる事實をば忘れたものである。その一々に就いてその對象がそれと共に消え去ると充分確言し得るのである、それに如何にして追想は全體が終はつた時でなければ產まれないのだらうか？　また如何にして記憶は、この展開の或瞬間に於いて、全體が未だ終つてゐず、猶何か殘つてゐるといふ事を識るのだらうか？

此點に就いて深く考察する程、若し追想が知覺自體に沿つて同時に造られるのでなければ、一體

それはどうして出來るものなのか益々わからなくなる。現在が記憶のうちに何等の痕跡を殘さぬか、でなければそれは總ゆる瞬間に、その奔出そのものの内に於いて、對應する二つの方向へ岐かれ出て二重となり、一方は過去の方へ落ちて行くと同時に他の一方は未來を指して躍進するかなのである。後者は所謂知覺であつて之に就いてのみ吾人は關心を持つ。事物自身を把握してゐる間はその事物の追想は全く無駄なのである。で實際的な意識が斯の追想を無用として斥ければ、理論的反省は又之を存在せぬものとしてしまふ。斯うして生ずる錯覺が追想は知覺の後を繼ぐとするのである。

しかし斯やうな錯覺には今一つの、更に深い根源がある。

それは喚起されて意識的となつた追想が、吾々に、知覺自身の蘇生してほのかな形をとつたもの、そして此知覺より外のものではあり得ないものとして觀える事から來るのである。それで知覺と追想との間には强さ或は程度の相違があるが、性質上のそれは決して存しないとされる。知覺は强い狀態、追想は弱い狀態と定義される、ひいて或知覺の追想はこの知覺の弱くなつたものでしかあり得なくなるから、記憶が一の知覺を無意識内に記錄する爲には、此知覺が睡りに陷ちて追想となつてしまふのを待たねばならぬ事となる。斯の理由によつて知覺の追想はこの知覺と共には造られ得ないし又之と同時に進展する事もないと考へられるのである。

しかし現在知覺を以つて强い狀態とし、喚起された追想を以つて弱い狀態とし、斯の知覺が減衰して斯の追想となるとする說は最も初步的な觀察に撞着する。吾々はこの事を以前の一著作のうち

であきらかにして置いた。或强い感覺を採り之をば次第に弱めて零にしよう、若し感覺の追想と感覺自身とのあひだに程度の相違しかないならば、感覺は消え去る前に追想となるだらう。然るに或瞬間に於いては、勿論、そこにあるものが體驗されてゐる弱い感覺なのか或は想像されてゐる弱い感覺なのか判らなくなつてしまふ、しかし決してこの弱い狀態が强い狀態の追想となつて、過去の中へ追ひ放たれはしない。故に追想は他のものである。

或感覺の追想とはこの感覺を暗示し得るもの、即ち之を生き回らせて、初め弱いのを、次第に强くし、注意が之に集中されるに隨つて之を更に愈々强くして行き得るものなのである。併しそれはそれが暗示する狀憶とは別である、そして暗示された感覺の背後にそれの存在が、恰も惹起された幻覺の背後に催眠術師があるやうに、感じられればこそ吾人は現に經驗するところのものの原因を過去の内に置くのである。事實、感覺は本質的に現實且つ現在のものである、しかし追想は、無意識の深底から纖かに浮び出て之を暗示するのであつて、つねに斯の一種特異な暗示の力を帶同して表はれるが、之は即ち既に過ぎ去つてしまひながら、猶滯まらうとしてゐるものの標徵に外ならぬ。暗示がわづかに想像に觸れると直ぐ暗示されたものの發端が描き出される、したがつて經驗される弱い感覺と日附なしに憶ひ出される弱い感覺とを識別するには非常な困難がある。しかし暗示は如何なる程度に於いてもそれが暗示するところのものではない、或感覺なり知覺なりの純粹な追想は如何なる程度に於いても感覺や知覺や自身ではない。でなければ、眠りに陷ちた被術者に彼等

の口中砂糖或は鹽があると暗示する爲には、催眠術師の言葉が既にそれ自身やや甘いか鹹いかの味を有たねばならぬこととなる。

斯やうな錯覺の基く處を更に究めて行くと、その根本に於いて發見されるものは吾等の精神に內在する一の要求、卽ち現實の實在のうちに嵌入されて、之を知覺し之の上に働きかける吾等自身の極めて小さい一部分の型の通りに吾々の內部生活の全體をば考へようとする要求である。吾々の知覺と感覺とは吾々のうちにあつて最も明るく照らされてゐるものであると同時に吾人にとつて最も重要なものである、此等は吾々の身體と他の個體との絕えず變化する關係をば各瞬間に於いて錄示する、此等は吾人の行爲を決定する或はその方向を指定する。茲から他の心理的諸事實のうちに知覺や感覺の不分明となつたもの若くは減衰したものをしか觀ないといふ吾等の傾向が生まれて來る。吾々のうちで最も此傾向に支配されない者、思想のうちに寫象の活動より以外のものがあると信ずる人でさへ、ある知覺の追想が根本的にこの知覺自身と別なものである事を容易には會得し得ない、追想は如何なる場合に於いても知覺の言語であらはされ得べきもの、寫象の上に施される何等かの作用によつて造らるべきものと彼等も思考するのである。ではこの作用は如何なるものか？ 先驗的に考へれば、それは寫象內容の性質か、或はその量か、或は同時にこの二つかに働くものである。しかるに、それが性質の上に變更を及ぼし得ない事は必定とせねばならぬ、何故ならば追想は過去を變質させずにあらはさねばならぬからである。それでは量の上にとしてみる。しかし量は、自身

又、擴がりに關するか、强さに關するかの二つとなる、何故ならば寫象は或一定數の部分を包含し、また或度の强さを示すからである。前者の場合を吟味してみよう。追想は寫象の擴がりを變へるだらうか？ 否、これは言ふまでもない、若しそれが何かを過去に加へたなら、それは不忠實となり、また若し其處から何かを除いたなら、それは不完全となるからである。故に殘るのは變更が强さに關する場合となる、そしてこれは明らかに增大でないから、減少である。斯ういふ本能的辨證法の微かに意識されかかつたものによつて、吾人は除外から除外へ進み、結局追想を以つて寫象の弱くなつたものとするに到るのである。

斯の結論に達して、すべて吾等の記憶心理學は之を基とする、吾々の生理學自身も之に感化されてゐる。知覺の大腦的機制をどういふ風に考へても、吾人は追想のうちに之と同じ機制の今一度の發動、之と同じ事實の輕微化された反復をしか觀ない。しかし經驗は儼然として、その反對を宣べてゐるやうに觀える。それは視覺記憶を失つても依然として視得る事を、聽くことは續けてゐても、聽覺記憶はなくなり得る事を、心理盲や心理聾が必ずしも視覺或は聽覺の喪失を隨伴せぬ事を吾人に向つて示してゐる、若し知覺と記憶とが玆で同じ中樞に關係してゐたものならば、同じ機制の活動を起こしてゐたものならば、斯ういふ事があり得るだらうか？ しかし知覺と追想との根本別差別を承認するよりも、寧ろ吾人は無理に此點を押し切つてしまふ。

啟に一點に聚まる二つの途によつて、卽ち吾々の心理的生活をば截然區別された諸狀態から再建

する事と及びすべて此等の諸狀態が寫象の言語にあらはされ得るとする事とによつて、斯の推論は結局追想をば弱くなつた知覺、何か知覺に繼起するもので之と同時ではないものとしてしまふ。斯ういふ論證は廢棄されねばならぬ、それは吾々の知性にとつて自然なものであり、言語にあらはすに都合好く、恐らく實際上は必須のものなのであらうが、しかし決して內部觀察の示唆するものではない。それを棄てれば、追想はすべての瞬間に於いて知覺に沿ふもの、之と共に生まれ、之と同時に展開し、そして之と別種のものであればこそ、之に殘存するものとしてあらはれて來るのである。

しからばそれは何だらうか？　心理的狀態の明瞭な記述はすべて寫象に依つてされるのであるが、吾人のいま言つた通り寫象の追想すらも既に寫象ではない。隨つて純粹の追想は漠然とした方法で、比喩的言語を以つてしか記述され得ない。で、物質と記憶の中で說いたやうに(四五)、それが知覺に對するのは鏡上に看られる像が鏡前に置かれた物に對するのと同じであると言ふことにしよう。物は觸れられ又視られる、それは吾等に働くが吾等も亦それに働く、それは可能な多くの行爲を孕んでゐる、それは現實である。像は假虛である、物に似てはゐるが、物の爲る事を少しも爲る事が出來ぬ。吾々の現實的存在は、時間のうちに展開するにしたがつて、斯やうな假虛の存在、鏡上の像に己の影を落して行く。故に吾々の生活のあらゆる瞬間は兩面を備へてゐる、それは現實であり假虛である、一方に於いて知覺であり他方に於いて追想である。それは起こると同時に岐れる。或は

寧ろ此分岐そのものに於いてそれは成立してゐる、といふのは現在の瞬間は、進んで息まぬものであり　はや其處にない直接の過去とまだ其處にない直接の未來との捕捉し難い境界線なのであるから、それが恰も知覺を不斷に追想に映して行く動く鏡でなかつたなら、ただ單純な抽象に墮してしまふが故にである。

或精神があつて斯の重複を意識すると想像しよう。われわれの知覺や行爲の反映が吾々に歸つて來る、しかも知覺が完結し行爲が遂行された時にでなくて、吾等の知覺し且つ行爲するに連れて歸つて來ると假定しよう。その場合吾人はわれ等の現實の存在とその假像とをば、一方に對象と他方にその反映とをば同時に觀る事となる。尤も反影が對象と混同される懼れはない。此は知覺のあらゆる性質を具備してゐるし、彼は既に追想だからである、若し彼が今から既に然うでなかつたなら、永久に然うであり得ないのである。後に、普通の作用をする時、それは吾々の過去に過去の徵を付けてあらはす、發生の瞬間を襲はれても、それはやはりその本質を形成する過去の徵を伴つてあらはれて來る。この過去は如何なるものか？　それには日付がなくまたあり得ない、それは過去一般であつて如何なる特殊の過去でもない。嚴密には、もしそれが單に或見られた情景若くは或感じられた情緒から成立してゐるのならば、思ひ違ひして、今見るものを既に見たことがあり、今感ずるものを既に感じたことがあると誤信するかも知れぬ。しかし茲にあるのは斯樣なものではない。各瞬間に於いて知覺と追想とに分裂するものは、總べて吾等の見るもの、聞くもの、感ずるものの全

體、すべて我等があるものと吾等をとりまくあらゆるものとである。若し斯の分裂を意識するなら、吾人の現在の總體が同時に知覺として及び追想としてあらはれて來る。併しながら歴史の同一瞬間が二度起こらない事と時間が溯流しない事とを吾人はよく知つてゐる。如何にすべきか？　事情は奇異で逆説的である。それは吾等の普通の考へを全部覆へす。茲に追想がある、それは追想である、それは普通此名を以つて呼ばれる諸狀態の特徴的標識を備へてゐる、この諸狀態はその對象が消滅した後でなければ意識に描き出されぬものである。しかるにそれは何か過ぎ去つたものをあらはさないで、却つてただ現に在るものをあらはしてゐる、それはその複寫する知覺と一緒に歩調を揃へて歩いてゐる。それは、現在の瞬間のうちに於いて、この瞬間の追想である。それは形式に於いて過去であり内容に於いて現在である。それは現在の追想なのである。

狀況が展開するに隨つて、之に沿ふ追想はその一々の過程に「既に見られた事がある」、「既に識られてゐる」ものの形相を付與して行く。しかし此狀況は、完結點に達しない前からも、終に一の全體として成立すべきものと思はれる、經驗の繼續中からその時の關心によつて截り取られてゐる故にである。若し此狀況の全體を既に生活した事がなかつたならば、どうしてその一部が既に生活され得ただらうか？　現に展開してゐるものを再認識する爲には未だ捲き込まれてあるものを識つてゐねばならぬではないか？　少なくとも、各瞬間に於いて次に來る瞬間を豫知出來ねばならぬではないか？　この來かかつてゐる瞬間は既に現在瞬間に侵されてゐる、彼の内容は此の内容から離

脱し得ない、此が疑ひもなく過去の再現であるならば、どうして來かかつてゐる瞬間も亦等しく然うでないのか？　私は前者を再認する、故にきつと後者をも再認するに違ひない。斯うして私は絶えず、まさにあらはれかかつてゐるものに對して再認するに違ひない。隨つて熟知してゐる者の態度に在る。しかし之は熟知の態度に過ぎぬ、之はその形式だけで内容を伴はぬ。あらはれて來るものをば豫言出來ぬから、私がそれを知らぬのは確かである。しかしそれを見たならそれを再認するに違ひないといふ意味で、私が既にそれを知つてゐた事も初めから確かである、そして斯の豫期されてゐる再認識は、私の再認する能力の加速度的な躍進に乘じて避け得ないものと感じられ、先んじて私の現在の上に溯及的影響を及ぼす、その爲に私は一種奇異な境地に置かれ、知らないと自ら知つてゐるものをば識つてゐるやうに感ずるのである。

以前暗記してゐたけれど今は忘れてしまつた或教程をば、忽ち、心に驚きながら機械的に反復し出すとしよう。各語は發音されると共に再認されるから、發音される前に把持されてゐたと思はれるが、しかし發音されなくては見付けられない。自分の現在が絶えず知覺と追想とに分岐して行くのを意識する人も之と同じ狀態に置かれてゐる。少しでも自己分析をすれば、斯の人は自分を俳優に比べて、持役を機械的に演じながら自分で自分の演技を觀たり聽いたりしてゐるやうだと言ふだらう。その感ずるところのものを深く吟味する程、彼は一が他に看られる二個の人物に岐れてゆく。一方に於いて確かに彼は依然として彼がこれまでもあつたものたるを失はぬ、すなはち狀況が要求

するところに適應して思考し且つ行爲する所の一の自我、現實の生活中に分け入り、自己の意志の自由な努力を以つて之に順應して行くところの我たるを續けてゐる、斯れは彼の現在知覺によつてあきらかである。しかし此現在の追想がまた其處に在つて、彼に自分が既に言つたことをそのまま繰返し、既に見たことをばその通り見てゐるのだと信じさせる、で彼は持役を演ずる俳優になつてしまふ。玆から二つの異つた我があらはれて來るがその一は、自己の自由を意識して拘束されない觀劇者の地位に就き、他が機械的に演ずる芝居を眺める事となる。しかし此重複は決して最後まで行かない。それは寧ろ自己自身を觀る二つの立場の間をさまよふ精神の動搖なのであり、知覺に過ぎぬ知覺とそれ自身の追想に沿はれた知覺との間に於ける精神の往來なのである、前者は吾人の自由に就いて吾々が持つ日常の感情を含んでゐて最も自然に現實世界の中へ分け入つて行く、後者は自ら覺えた役を繰返してゐるのだと吾人に信じさせて、吾々を機械人形に變じ、吾人を芝居や夢の世界へ引き入れてしまふ。急迫の危難に直面して數瞬のうちに、絶對必要の諸動作を突如果敢に斷行して漸く免れ得た人々は、皆之と同じやうな種類の經驗を持つてゐる。それは事實よりも寧ろ假の重複である。人は働くがしかしまた「働かれてゐる」。選擇し意志するとは感ずるが、課されたものを選び且つ避け得ないものを意志すると思ふ。ひいて諸狀態は相互に透徹融合し直接意識のうちで渾然と同一にさへなつてしまつてゐるが、しかし此等はやはり論理的には互に相容れぬから、反省する意識は斯の事實をばあらはすのに自我が二重になつて二個の違つた人格が出來て、そのう

ちの一つがすべて自由なものを自分の方へ取り、すべて必然なものは今一つの方の爲に殘される——前者は、自由な看客となつて、後者が自己の役を機械的に演ずるのを觀る——と考へるのである。

普通の狀態に於いて、若し吾人の現在の分岐するのを看得たなら、吾人自身が吾々に以上述べて來たやうな三つの形相を取つてあらはれて來るに違ひない。しかるに、之等は恰も的確に實再認識の諸特徴なのである。此現象が一層明確であり、一層完全であり、一層深くその實驗者によつて分析されてゐるにしたがつて、之等も亦愈々強くあらはれて來る。

事實、或人々は自働機制の感じ、持役を演ずる俳優のそれに似た狀態といふものをば語つてゐる。言はれるものと行はれるものと、自分が言ふところと行ふところと、すべて「避け得ない」やうに觀える。自分自身の動作や、思想や、行爲やに立會つてゐる(四六)。すべては恰も自分が二重になつたかのやうに運ばれて行く、しかし事實に於いて自分が二重になつたのではない。或經驗者は「此重複の感情は感覺のうちだけに在る、物質上から言へば二個の人格は唯一になつてしまふ」と記してゐる(四七)。この意味は彼が二重感を經驗はする、しかしそれが同一人格内の事だと意識もしてゐるといふことに解し得るであらう。

他方、初め言つたやうに、之の經驗者は屢々奇異な狀態に陷つて次に起こつて來るものを識つてゐると思ひながら、それを豫言する事が出來ぬと自覺もする。「續いて起こる事をいつも豫見し得るやうに思ふがそれを實際言ふ事は出來ぬ」とその一人は言つてゐる。また一人は「記憶の入口ま

で來てゐる名をば想ひ出すやうに(四八)」次にあらはれ來かけてゐるものを想起する。最も古い諸觀察のうちにも自分の周圍のする事をすべて先きから知つてゐると想像する人物がある(四九)。で之を以つてまた覺再認識の一特徴とする事が出來る。

しかしそのあらゆる特徴の中で最も一般的なのは最初述べたもの、すなはち喚び起こされた追想が宙に浮いた追想であつて、過去中に支持點を持たぬといふ事である。それは以前の如何なる經驗とも照應しない。人はそれをば識つてゐる、と固く信じてゐる、併し斯の確信は推理の結果ではなく、直接なのである。そして喚起された追想が單に現在知覺の副本であるに違ひないといふ感情と一緒になつてしまつてゐる。ではそれは「現在の追想」なのであるか？　人が然う言はぬのは、恐らく斯の言ひ方が自家撞着するやうに見えるからであり、追想をば過去の反復としてしか考へないからであり、表象がそのあらはす內容とは獨立に過去の符徴を具へ得る事を承認しないからであり、つまり人が自ら然うと知らないで理論家だからであつて、そしてすべての追想をばその再生する知覺より後に來るものと決めてしまつてゐるからである。併し斯の言ひ方に近い事は云はれる、現在から些の距離もない過去といふものが述べられてゐる、即ち「私は自分の內部に一種の陷沒が起こつて此過去の瞬間と私のゐた瞬間との間に在る過去の全部が除外されたと思つた(五〇)」と。茲に、實際、此現象の最大特徴が在る。「覺再認識」に就いて語る時必ず明示すべき事だが、それは何も眞正の再認識を實際に僞造するものでもなく又その錯覺を與へるものでもない。事實普通の再認識

とは何であるか？　それは二種の方法によつて生ずる、即ち現在知覺に隨伴する習熟感によつてか、または現在知覺が反復するやうに見える過去の知覺の想起によつてかである。しかるに覺再認識はこの二個の作用の孰れでもない。前の種類の再認識の特徴は、それが何か決定された、個人的な狀況のあらゆる喚起をば、即ち其處では再認された事物が既に以前に知覺されたものであるといふやうな喚起をばすべて排拒する事に存する。私の書齋、私の机、私の書物が私の周圍に習熟の雰圍氣を組成する爲には條件としてそれ等が私の生活史中の何等定まつた事件をば想起せしめない事を要する。若しそれ等がそれ等のうちに起こつた或事件の的確な追想を喚び起こすならば、私はそれ等を之に參加したものとして更に再認する、しかし斯の再認識は初めのものの上に更に加はるのであつて、此が彼から深く區別されるのは恰も個人的なものが非人格的なものから區別されるのと同じである。然るに、覺再認識は斯の習熟感とは全然違ふ。それはいつも或個人的な狀況の上に生じて來て之を他の個人的な狀況の再生と確信するのであるが、この二つは孰れも同じやうに的確であり且つ決定されたものである。故に殘るのはそれが後の種類の再認識、即ち現に處る所のそれに似た狀況の喚起を含むものだとされる場合である。しかし、注目すべきは、斯のやうな場合に、常に言はれるものは類似の狀況であつて同一の狀況ではない事である。後の種類の再認識はただ二つの狀況を區別するものと及び之等に共通なものとが同時に表象される場合にのみ產まれることが出來る。二度目に或芝居を看ると、私は各白を、各場を一つ々々再認する、終に私は芝居全體を再認してそ

れを既に觀たことを想ひ出す、しかし私は前には他の場所にゐたし、他の人々と隣りあつてゐたし、他の氣持ちで來てゐた、孰れにしてもその時の私は今日の私ではなかつた、その間を私は生きて來てゐるのである。で二つの寫象は同じであつても、それ等は謂はば違つた額緣の中へ嵌まつてあらはれる、そして緣が同じでないといふ漠然とした感情が、總の樣に、兩寫象の同一性を把握する意識の周圍を繞つてゐるから私は何時でもそれ等をば區別し得る。之に反して、覆再認識に於いては、額緣も寫象自身のやうに同一となつて來る。私は同じ情景に同じ感覺、同じ關心を持つて對してゐる、つまり、私は此瞬間に私の生活史中の、その當時私のゐたのと同じ點に、同じ日時に、同じ瞬間に居るのである。故に之を錯覺と言ふのは甚だ當たらない、何故ならば錯覺的認識は或眞正な認識の模造なのであるが、玆に研究してゐる現象は吾人の經驗する如何なる他の現象をも模倣しないからである。又之を覆再認識と言ふのも甚だ當たらない、何故ならば之がその正確な覆造であるやうな如何なる種類の再認識も存しないからである。實際之は一種特異な現象であつて、ちやうど「現在の追想」がその當然の場所である無意識から俄に浮かび上がつたとき產まれるものが卽ち之に當たるとするの外はない。追想の呈する特徵は知覺のそれとはまた違ふから、それは追想と見えるのである、しかし生涯の同一瞬間を二度生活出來ぬ事をわれわれはよく知つてゐるから、それは過去の如何なる經驗へも歸せられ得ないのである。

最後に何故斯の追想が常は隱されてゐるか、如何にしてそれが異常な場合に顯はれて來るかを明らかにせねばならぬ。一般に、權利上では、過去が意識へ戻つて來るのはそれが現在の理解と未來の豫知とを助ける範圍内に於いてである、それは行爲を照明するものなのである。表象の種々の作用をば、恰もそれ等がそれ等自身の目的であるかのやうに、恰も吾人が純粹精神であつて、觀念と寫象との流逝をただ眺めてゐるものであるかのやうに、分離された狀態に於いて研究するのは正當の途でない。若しその通りなら現在知覺が自分の方へ何か類似の追想を牽き寄せるのは、何等それを役立たせようとする用意を以つてでなく何の爲にでもなく、ただ娛しみの爲に、——物體の世界を統べる萬有引力の法則のやうなものを心の世界へも導き入れる樂しみの爲にするのであらう。尤も吾人は「類似の法則」に異議を挾むものではない、しかし他處で示した事があるやうに、任意の二觀念を、隨意に二寫象を採つて、之等が如何に離れてゐると假定しても、猶恒にその間に類似點はある、何故ならば之等を俱に含む共通の類が常に在るからである、斯やうにして若し玆に似たものが似たものを牽く機械的引力しかなかつたなら、如何なる知覺と雖もが如何なる追想をも喚び起こし得ることとなる。けれど眞實は、知覺が追想を喚起するのは、過去の局面に先行し、之に隨伴し且つ之に繼起した諸狀況が現在の局面に幾らかの光を投げてその打開の起こる點を明かにする爲なのである。類似による追想の喚起は無數に可能である、しかし再び現はれようとする追想は、一

の特殊な方面から知覺に類似するもの、すなはち準備中の行爲を照明し之を指導し得るものに限られてゐる。そして此追想自身も、嚴密にはあらはれなくても宜い、自身あらはれないでも、隣接してゐた諸狀況と、先きに行つたものと後に續いたものと、つまり現在を理解し未來に備へるため知つてゐねばならぬものを喚起すれば足りる。更にすべて此等のものさへ意識に上らないで、ただ結論だけが、卽ち取るべき或處置の的確な暗示だけがあらはれる事も考へられる。大抵の動物に於いては斯のやうになつてゐるに違ひない。しかし意識の發達につれて、記憶の作用もより明るく照らされ、類似による聯合も明瞭に浮かび出る、但之は手段であつてその目的とする近接による聯合の背後に隱されてゐたものである。前者の聯合は、意識のうちに座を占めると直ぐ贅澤餘分の夢しい追想を、現實の關心事から離れたものまでをも、何かの類似を緣として拒まずに導き入れる、吾人が行爲しながら稍々夢想し得るといふ事は斯うして說明される、併し想起の諸法則が決定されたのは行爲上の必要からである、之のみが意識の鍵を握つてゐる、夢のいろいろの追想は、入境の許可を與へる類似の關係のうちに、放漫、曖昧な點があるのを利用して潛入するに過ぎない。要するに、吾人の追想の全體があらゆる瞬間に無意識の內奧から壓力を加へてゐても、生活へ注意を向けてゐる意識は、權利上、現在行爲に協力し得るもののみをしか通過させぬ、但設定せざるを得なかつた類似といふ一般的條件の影に隱れて他の多くのものも亦忍び入つて來るのである。

しかし現在行爲に取つて現在の追想ほど無用なものがあらうか？　他の如何なる追想と雖も之よ

りは寧ろ主張すべき權利を持つてゐる、それ等は少なくとも現實的興味はないにしても、何等かの情報を齎す。獨り、現在の追想のみは何ものをも吾人に敎へぬ、それは知覺の副本に過ぎない。吾吾は實在の事物を把握してゐる、假象が何の役に立つか？　その影を逐ふ爲に獲物は放されない。

斯の理由によつて吾人の注意は斯の追想を極端に避けるのである。

尤も茲に言ふ注意は强度と、方向と、持續とによつて違ふ個人的注意ではない。それは、謂はば種の注意、すなはち心理的生活の或若干の領域へ自然に向けられてゐて、自然に他を避けてゐる注意なのである。これ等の領域の一々のうちに於いて吾々の個人的注意は無論その思ふままに動く、しかし斯の時それは單に初めのものの上へ重なつて行くのである、それはたとへば人間の眼が光を見る爲にスペクトルの或定まつた分帶を、初めに一度きり、えらんだその選擇の上に重なつて個人の眼の選擇が斯く斯くの物をえらんで視るのと同じである。しかるに、個人的注意の輕微な減退は通常の不注意を起こすに過ぎぬけれど、種の注意の減衰はすべて病的若くは異常の諸事實となつてあらはれる。

覺再認識はこれ等の異常の中の一つなのである。それは生活への一般的注意の一時的衰弱に基づいてゐる、意識の視線が、此場合最早その自然の方向を維持しないで、知覺しても何の役にも立たぬものを氣紛れに看慰むやうになるのである。しかし茲にいふ「生活への注意」とは如何なる意味か？　不注意の如何なる種類が特に覺再認識の原因となるのであるか？　注意と不注意とは共に漠

然とした言葉である、この特殊な場合に於いて之等を更に明確に定義し得るだらうか？　以下それを試みようとするのであるが、しかし斯やうに闡明し難い事象の上へ、完全な明瞭さと決定的な正確さとを齎さうとは固より主張するものでない。

不用意に看逃がされて來た事だが吾人の現在は主としてその未來に先んずるものなのである。反省する意識は無論吾々の内部生活をば狀態に繼起する狀態と觀て、これ等の狀態の一々が或一點に始まり他の一點で終はるのであつて、且つ暫定的に獨立自足してゐるものであると考へる。反省は斯やうに觀て言語の爲に途を開くのである、それは識別し、分離し、排置する、それは決定されたものと、及び不動のものとの上に於いてのみ自在に働く、それは實在の靜的な觀方に滯まつてゐる。しかし直接意識の把握するものは之と全然違ふ。内部生活に内在してゐて、それは之を看るよりも寧ろ之を感ずる、しかも之をば一の運動として、絶えず撤退する未來への不斷の侵入として感ずるのである。此感情は遂行すべき或一定の行爲に關する時更に極めて明瞭となる。先づ吾人は動作の完了點をすぐ見てしまふ、そして、吾々の行爲する瞬間中を通じて、吾人は繼起する諸狀態よりも、寧ろ現實の點と近づいて來る完了點との距たりが小さくなつて行くのをば意識する。尤も此目的自身も暫時の目的として視られてゐるに過ぎぬのであつて、吾々はその背後になほ他のものがあるのを知つてゐる、最初の障碍を超える爲に飛ぶその跳躍の勢で吾等は既に第二のものを飛び越えるやう用意し、またそれに續いて無限に起こつて來るものすべてに對しても備へてゐる。同樣に、言句

を聽く時、離れ々々の語に注意してゐる事は決してない、吾人に取つて重要なのは全體の意味である、初めから吾々は假定的に此意味を模造する、吾人の精神を或一般的な方向へ投げかける、そして言句が、展開されながら、吾々の注意を彼方や此方へ向けるに連れて、この方向をばいろいろに修正し調節する。玆でも亦現在はそれ自身に於いて把握されてゐないで、寧ろ却つてその侵入してゐる未來のうちに於いて知覺されてゐるのである。斯の跳躍はその跨ぎ越し飛び超えるあらゆる心理的狀態に一の特殊な形相を與へるが、之が却つて普通になつてゐるから、その無い時、吾人は不在を覺るけれども、その有るのには、慣れてゐるので、氣が付かぬ。誰しもの經驗に在る例を採れば常に慣れてゐる言葉に注意を集中するとそれが甚だ奇異に見える。その言葉が全く新しいもののやうに觀えて來る、それは事實また新しいのである、これまで、決して、吾人の意識はそこへ留まらなかつた、それを飛び超えて言句の終りへ行つてゐたのである。吾人の心理的生活全體の跳躍を抑止するのは吾等の言葉を中斷する事のやうに容易ではない。しかし、一般的跳躍が弱くなつたとしたならば、通過される狀況も亦言句の進行の中途で固定された言葉の音と同じやうに奇異に見えるに違ひない。それは最早現實の生活と一體になつてゐない。吾々の過去の經驗中にそれと最も似たものを求めるならば、夢がそれに較べられるのである。

然るに、覆再認識の最中と及び其後とに經驗するものを記す時、實驗者の大多數が夢のやうな印象に言ひ及んでゐる事は注目せねばならぬ。此錯覺は「實在が夢だといふ分析し難い一種の感情」

を伴ふとポォル・ブァルジェ君は言つてゐる(五一)。數年前私の手許へ屆けられた英文の自己觀察のうちでは「幽かな」といふ形容詞が此現象の全體に適用されてゐる、猶此現象を後になつて回想すると、それは恰も「半ば忘られた夢の名殘り」といふやうに觀えると言ひ添へられてゐる。互に識らず、しかも異なる國語を話す觀察者諸君が玆では相互に直譯となるやうな言葉で所感を記してゐる。で、夢のやうな印象は殆んど一般的なのである。

しかし覺再認識に陷り易い人々が慣用の言葉をば頻繁に奇異と見出だす事も亦注目せねばならぬ。ゼ・ハイマンズのした調査によると斯の二つの素質は互に結び着けられてゐる(五二)。此研究家は附け加へて前者の現象に關する今日の諸說ではそれが何故後者と關聯するか說明されぬと言つてゐるが、之は適評である。

斯樣な次第であるから、覺再認識の基本的原因をば吾等の意識の跳躍の瞬間的停止に求め得ないだらうか? 此停止は、無論、吾々の現在に何等形骸上の變更を加へるものではない、しかし之をその延長である未來から及びその正規の結論となる行爲から解き離して、之に單なる畫面の、人が自分自身に看せさす光景の、夢に移された實在の相貌を與へるのである。猶私自身の印象をも述べて置きたい。吾人は覺再認識を體驗しないが、併しその研究を始めて以來、諸家の觀察の記述するやうな心の狀態に自分を置いて、實驗的に此現象を自らの上に起こさうと屢々試してみたのである。これは決して完全には成功しなかつた、しかし數度にわたつて、之に近いものが微かにではあるが

獲られたのである。この爲には吾人が、自分にとつて新しいばかりでなく、自分の日常生活の流れから截然峻別された光景に直面する必要がある。たとへば、それは旅行中に遭遇する光景などである。旅行が不意のものなら猶更好い。この時第一の條件は吾人が極めて特殊な或驚愕感を經驗する事である、之は其處に居る事の驚きとも言ひ得る。斯の驚愕感に接續して、之とはまた餘程違ふが、しかし之と緣のある一つの感情が生じて來る、それは未來が塞がれてゐる、此景況がすべてから離脫してゐる。しかし自分は之に繫がれてゐるといふ感情である。この二種の情緒が融合するにつれて、實在はその堅固さを失ひ、吾人の現在知覺も亦何かその背後に在るらしい他のものと二重になる傾向を持つて來る。これは「現在の追想」が見透されるのだらうか? 斯の事を確言は敢てしないが、しかしこのとき吾人が覺再認識の途を取つてゐて、今少しで其處へ着き得る道程にゐる事は確かなやうに思はれる。

次に、何故現在の追想は、自らを顯はすのに、意識の跳躍が弱るか停まるかするのを待つてゐるのか? 表象が無意識を離れて浮かび上がり或は又其處へ落ちて行く機構に就いては吾々何も知らない。吾人に可能なのはただ假の圖式を作つて斯の操作を象徵的に表はす事だけである。先きに使つたそれを又採つてみよう。あらゆる無意識的追想が一團となつて意識に迫つてゐる、——意識は原則として、行爲に協力し得るもののみを通す、と考へてみよう。現在の追想も亦他のものと同じやうに通らうと努力してゐる、殊にそれは他のすべてより吾々の近くに居る、吾人の現在知覺に寄

り凭たれてゐて、それは何時でもその中へ入りかけてゐる。知覺は不休の前進運動で纔かに間隔を維持して、脱れてゐるに過ぎない。言葉を換へれば、追想が現實化されるには知覺の仲介を要する、故に現在の追想が意識内へ侵入する爲にはそれが知覺の中へ忍び入る事を要する。しかし此は恒に彼より先きにゐる、跳躍の生動によつて此は現在を超えて未來に達してゐる、突如跳躍が止んだとしよう、追想は知覺に追ひ着く、現在は認識されると同時に再認されてゐる。

故に覺再認識は結局生活への注意不足の最も無害な形なのである。基本的注意の調子が恒久的に低下すると精神障害の多少とも深く且つ繼續的なものがあらはれる。しかし斯の注意が平常はその普通の調子を維持してゐて、全く別の方法でその能力不足を呈示するといふ事も起こり得る、一般に極めて短時間の、而も全く時々に起こるその活動の停頓がこれである。停頓が生ずると直ぐ、覺再認識は意識の上へ來て、二三瞬間それに重なりそして又忽ち泡のやうに、消え去る。

結論として更に一個の臆說をば提出したい、それは此研究の初めから豫想して置いたものである。若し生活への注意不足が重大性を異にする二つの形態を取り得るならば、當然想像されるのはその第二のもの、即ち輕微な方が他のものを免れる手段であるといふ事ではなからうか？ 注意能力の不足が覺醒の狀態から夢の狀態への決定的推移を危く惹き起こさうとする時に、意識は斯の不足を或諸點に局限して其處で注意が一度づつ休息し得るやうにする、斯うして、その外の時は常に、注意は實在との接觸を維持して行けるやうになる。極めて明瞭な覺再認識の或二三の例が此臆說を證

明してゐるやうである。實驗者は先づすべてから離脱して、夢の中にゐるやうに感ずる、覺再認識の狀態に入るのはその直後、正氣に歸り始める時なのである(五三)。

で斯のやうな意志障害が覺再認識の機緣となるのである。その基本原因ともなつてゐるのである。その近因に到つては、之を他處に、知覺と記憶との聯關的な働きのうちに求めねばならぬ。覺再認識はこの二つの能力が各々勝手に放任されて自然に働き出す時その結果として生ずる。それは意志が不斷に行爲へ向つて緊張してゐて、現在を際限なく未來へ突き放ち之が自分自身へ復歸するのを妨げてゐなければ、あらゆる瞬間に於いて起こるべきものなのである。意識の跳躍は、生命の躍動をあらはすが、その單純性の爲に分析を受け付けない。しかし少なくとも、その停滯する諸瞬間のうちに於いて、それがその時まで維持して來た動的平衡の諸條件を研究し、斯うしてその發現の一面を分析するならば之を徹してその本質を見透かすことは出來るのである。

〔註〕(一) 此研究は一九〇八年十二月の Revue philosophique に掲載されたものである。

(二) 此言葉を創めたのはヂュガ君である (Un cas de dépersonnalisation. Revue philos., 第四五卷、一八九八年、五〇〇——五〇七頁)。

(三) L'illusion de fausse reconnaissance, 巴里、一八九八年、一七六頁。

(四) Arnaud, Un cas d'illusion de déjà vu, Annales médico-psychologiques, 第八期、第三卷、一八九六年、四五五——四七〇頁。

(五) Arch f Psychiatrie, 第六卷、一八七六年、五六八——五七四頁。

(六) Arch. f Psychiatrie, 第十八巻、一八八七年、四二八頁。

(七) Forel, Das Gedächtnis und seine Abnormitäten. チュリッヒ、一八八五年、四四——四五頁。

(八) Journal of nervous and mental diseases 一九〇四年、第三一巻、五七七——五八七及び六三九——六五九頁。

(九) Jahrb f. Psychiatrie u Neurologie, 第一五巻、一九〇一年、一——三五頁。

(十) P Janet, Les obsessions et la Psychasthénie, 一九〇三年、第一巻、二八七頁以下。(A propos du déjà vu), Journal de Psychologie, 第二巻、一九〇五年、一三九——一六六頁參照。

(十一) 諸家の多くが眞再認識を以つて、非常に汎く行きわたつた錯覺と看てゐるのは注意すべきである。ヴイガンはあらゆる人が之を持つてゐると考へた。クラペレンは之を普通の現象だと言つてゐる。ニンゼンは殆んど誰でも、自分自身に注意する人で、此錯覺を識らぬものはないと主張してゐる。

(十二) Arch. f Psychiatrie, 第四巻、一八七四年、二四四——二五三頁。

(十三) H ffding, Psychologie, 一六六——一六七頁。

(十四) Le Lorrain, A propos de la paramnésie. Rev philosophique. 第三七巻、一八九四年、二〇八——二一〇頁。

(十五) Bourdon, Sur la reconnaissance des phénomènes nouveaux, Rev philos. 第三六巻、一八九三年、六二九——六三一頁。尤もこれはブルドン君の說の一部分に過ぎない。

(十六) Bélugou, Sur un cas de paramnésie, Rev philos., 第四四巻、一九〇七年、二八二——二八四頁。尤もベリゴウ君は記憶錯亂症を二種に區別してゐる。

(十七) T Sully, Les illusions des sens et de l'esprit, 一九八頁。

(十八) Lapie, Note sur la paramnésie, Rev philos., 第三巻、一八九四年、三五一——三五二頁。

(十九) Grasset, La sensation du (déjà vu), Journal de psychologie, 一九〇四年一月、一七——二七頁。

(二〇) 感情的色調の類似といふ考へは特にボアラク君の力說するところである、Rev philos., 一八七六年、第一巻、四三一頁。

(二一) リボオ及びウイリアム・ジエムスも斯の種を解釋を試みた事があるが、それをばただ或若干の例に對してのみ提案するに過ぎぬと注意深く斷つてゐる。(Ribot, Les maladies de la mémoire, 一八八一年、一五〇頁、William James, Principles of qsychology, 一八九〇年、第一巻、六七五頁、註)。

(二二) Arch. f. Psychiatrie, 第十八巻、一八七七年、四〇九——四二六頁。

(二三) クラペレの假說は、初めの經驗が無意識によつて記錄されたといふものであら、嚴密には、後の二つの抗議には觸れぬが、最初のものからは脫れ得ない。

(二四) A. -L Wigan, A new view oe insanity: the duality of the mind; 倫敦、一八八四年、八五頁。

(二五) Allg Zeitschr f Psychiatrie, 第二五巻、一八六八年、四八——六二頁。

(二六) Fouillée, La mémoire et la recounaissance des souvenirs, Revue des Deux Mondes, 一八八五年、第七〇巻、一五四頁。

(二七) Arch. f Psychiatrie, 第八巻、一八七八年、五七——六四頁。

(二八) Piéron, Sur l'interprétation des faits de paramnésie, Rev philos, 第五四巻、一九〇二年、一六〇——一六二頁。

(二九) Lalande, Des paramnésies, Rev. philos., 第二六卷、一八九二年、四八五——四九七頁。

(三〇) Arnaud, Un cas d'illusion du (déjà vu) ou de (fausse mémoire), Annales médico-psychologiques, 第八期、第三卷、一八九六年、四五五頁。

(三一) Myers, The suliminal self, proc. of the society for psychical research, 第一一卷、一八九五年、三四三頁。

(三二) Lemaitre, Des phénomènes de paramnésie, Archives de psychologie, 第三卷、一九〇三年、一〇一——一一〇頁。

(三三) Dugas, Sur la fausse mémoire, Rev philos., 第三七卷、一八九四年、三四——三五頁。

(三四) Ribot, Les maladies de la mémoire, 一五二頁。

(三五) E Bernard-Leroy, L'illusion de fausse reconnaissance, 巴里、一八九八年。此書は種種な見られない觀察を多數含んでゐるから、眞實認識に就いて正確な結論を得ようとする人の必ず讀むべきものである。 j. Tobolowska 嬢は、その簡單な位論文 Etude sur les illusions du temps rêves, 巴里、一九〇〇年のうちで、ベルナアルールロア君の報告を採用してゐる。

(三六) Matière et mémoire, 巴里、一八九六年、九三頁以下。

(三七) 既に引いた書の二四頁。

(三八) Matière et mémoire, 巴里、一八九六年、殊に一八四——一九五頁。

(三九) P Janet, Les obsessions et la psychasthénie, 第一卷、巴里一九〇三年、二八七頁以下。(A propos du déjà vu), Journal de psychologie, 第二卷、一九〇五年、二八九——三〇七頁參照。

(四〇) Léon-Kindberg, Le sentiment du déjà vu et l'illusion de fausse reconnaissance Revue de Psychiatrie, 一九〇三年、一三九——一六六頁。

(四一) Zeitschr. f Psychologie, 第三六卷、一九〇四年、三二一——三四三頁。

(四二) Dromard et Albès, Essai théorique sur l'illusion dite de fausse reconnaissance, journal de psychogie, 第二卷、一九〇四年、二一六——二二八。

(四三) 「人格喪失」もやはり「生動の調子の低下」によつて說明されてゐる。此點に就いては、Dugas, Un cas de dépersonnalisation, Rev. philos., 第四五卷、一八九八年、五〇〇——五〇七頁を參照。

(四四) Matière et mémoire, 巴里、一八九六年、第三章、殊に一九二——一九三頁を參照。

(四五) 一三九頁、一四四頁以下。第一章全部を參照。

(四六) 殊に、ベルナアルールロア君の採錄した諸觀察を參照、前に引いた書の、一八二、一八五、一七六、二三二等の諸頁。

(四七) 同書、一八六頁。

(四八) Lalande, Des paramnésies, Rev. ph los., 第三六卷、一八九三年、四八七頁。

(四九) 前に引いたエンゼンの論文、五七頁。

(五〇) ベルナアルールロア、一八三頁所引のエフ・グレグ。

(五一) ベルナアルールロア君の採錄した觀察、前に引いた書の一六九頁。

(五二) Zeitschr. f. Psychiatrie, 第三六卷、一九〇四年、三二一——三四三頁、及び第四三卷、一九〇六年、一——一七頁。

(五三) 殊にクラエペリンと及びゾロマア、アルベス兩君との自己觀察、前に引いた諸論文所收を參照。

六　知的努力(二)

茲に扱はうとする問題は現代心理學の提起するやうな注意の問題とは別のものである。過去の事實を想起する時、現在の事實を解釋する時、演說を聽く時、人の思想を理解しようとする時及び自分の思索に自ら聽き入つてゐる時、つまり諸表象の複雜な一組織が吾等の知性に占據してゐるとき、吾々は自分が二つの異つた態度を取り得ると感ずる、その一は緊張的他は弛緩的であつて、その主要な相違點は努力の感情が一には有つて他には無い事に存する。諸表象の活動はこの二つの場合に於いて同じだらうか？　知的諸要素も同じ種類のものであつてそして同じ關係がこれ等を統べてゐるだらうか？　表象自身のうちに、之の遂行する內部的諸反動のうちに、之を組成する更に簡單な諸狀態の離合と運動と及び形態とのうちに、ただ漫然としてゐる思想と自ら集中し且つ努力する思

想とをば區別するに必要なあらゆるものが含まれてゐないだらうか？　更に、この努力に就いて吾人の持つ感情のうちにさへ、極はめて特殊的な或表象運動の意識が幾らかでも入つてゐないだらうか？　これ等が今研究して行かうとする諸問題である。これ等はすべて唯一つの、知的努力の知的特徴は何であるか？　といふ問題に歸せられる。

此問がどのやうに答へられても、現代心理學の設定するやうな注意の問題は影響を受けない。事實、心理學者の主として研究するのは感覺的注意、即ち或單一知覺に寄せられた注意である。しかるに、注意に隨伴された單一知覺は、たとへ注意が自分に添つてゐなくても、事情の都合が好ければ、やはり同じ――或は殆んど同じ――內容を呈し得る知覺であるから、この內容より以外に茲では注意の種別的特徴が求められねばならなかつた。リボォ君の提唱された考へは附隨的運動現象に、殊に制動の行爲に決定的重大性を與へようとするものなのであるが、これは心理學上殆んど定說になりかけてゐる。しかし、知的集中狀態が複雜となるにつれて、それはそれに隨伴する努力といつそう深く聯關するやうになる。精神上の仕事のうちには樂々と容易に遂行され得るとは考へ得ないものがある。努力なしに新しい機械を發明し、或はただ平方根を抽き出す事さへ出來るだらうか？　故に茲では知的狀態が、謂はば自己の上に捺されて、努力の記徴を具へてゐる。換言すれば茲に於いては知的努力の知的特徴がある。尤も、既に此特徴が複雜且つ高等な段階の諸表象中に存するならば、もつと單純な狀態のうちにもそれは幾らか見出だされねばならぬ。で、その痕跡をば感覺的

注意自身のうちに於いてさへ發見する事も不可能ではない、但し此要素は無論其處で附屬的な輕い役目を演ずるに過ぎぬのである。

研究を簡單にする爲に、知的働きの色々の種類をば、最も容易なものから最も困難なものへ、再現から產出若くは發明へ、別々に點檢して行かう。で先づ記憶の、或は更に的確に言へば想起の努力から始める。

以前の或論文の中で(二)、「意識の諸平面」の種々の層を辨別すべき事をば示したが、之は未だ確然たる寫象に移らぬ前の「純粹追想」から、此同じ追想が現實化されて感覺の端緒となり運動の發端となつたものまでを含むのである。またその時、或追想を意志して喚起するといふ事は意識の斯の諸平面を次から次へ、或一定の方向へ縱貫する事であると言つて置いた。吾人の著書の刊行と時を同うして、ゼ・ヴイタゼク君の興味深く暗示に富む論文(三)が發表されたが、その中では同じ作用が「非直覺的なものから直覺的なものへの推移」と定義されてゐる。前の著書中の二三の點を再び考へ、後の論文をも亦利用して、最初に、追想を喚起する場合に就いて、自發的表象と有意的表象との相違を研究することとしよう。

一般に、或教程を暗記する時若くは印象の一群を記憶に止めようとする時には、吾々はただ自分の學ぶものをば覺える事を目的としてゐる。學んでしまつたものを想ひ出すのに後でどうしたら宜いかといふ事は殆んど氣にかけてゐない。想起の機構はどうでも宜い、要するに、必要な時にどう

してでも、追想を喚起出來れば宜いのである。したがつて吾人は同時に或は次々に種々雜多の手段を用ひる、機械的記憶と一緒に知解的記憶を働かす、聽覺の、視覺の、運動の諸寫象を互に竝べて此等をそのまま生の狀態で把握しようとする、或は反對に單一の觀念を此等と置き換へてその意味をあらはし、必要時には、之によつて復全體を組立てようとする。したがつて亦、想起すべき時になつても、吾人は知性のみにも亦自働機制のみにも賴らない、自働機制と反省とが玆では深く縺れあつてゐる、寫象が寫象を喚び起こすと同時に精神はもつと抽象的な表象の上に働いてゐるのである。この爲に、複雜な追想のあらゆる部分を機械的に喚起する時及び、反對に、これ等を能動的に再建する時に精神の採る二つの態度の相違をば的確に定義しようとすると容易ならぬ困難に遭遇する。實際には殆んど常に機械的喚起の分と知的再建の分とがあつて、しかも非常によく混つて一緒になつてゐるから吾人は何處から一が始まつて何處で他が終るかを言ふ事が出來ぬのである。しかしながら、例外的場合もある、瞬間的な且つ、出來るだけ、機械的な喚起を目標として或複雜な課目を習得しようとする時が之である。他方にはまた、習得すべき課目が決して一擧に喚起される必要なく、却つて徐々に熟考を經て再編されねばならぬと認められる場合がある。で此等極端な場合から吟味して行かう。すると喚起に際して採るべき方法に隨つて、習得の仕樣も全然違ふといふ事が明らかにされるだらう。そして他方、習得に當つて、喚起の際の知的努力を容易にする爲に、或は反對に之を無駄とする爲に、行はれる一種特別の操作は、斯の努力の性質なりその諸條件なりに

就いて吾人を啓發する事があるだらう。

ロベェル・ウダンはその款晤錄中の興味深い一個所で、彼がどうして自分の子供のうちに直覺的且瞬間的な記憶を發達さしたかを說いてゐる(四)。彼は先づ始めにドミノの札の一つ、五點—四點、をば子供に示して、算へる暇を與へずに點の合計を尋ねた。それが出來るとまた一つ、四點—三點、の札を之に添へて、やはり直ぐ答へさした。第一課は之で終へて、翌日は、一見しただけで三個やがて四個の札を、そのまた翌日は五個の札をば合計さす事に成功した、毎日斯やうに進步を重ねて、終には瞬間的に十二の札の點の合計を言ひ得さすやうになつた。「此結果を獲て置いて、吾々はまた之より難しい別の仕事に取りかかつたが、それは一月餘りの間續いた。私は子供と二人で、玩具屋、或は何でも雜多なものが並べてある店の前をかなり速く通り過ぎながら、其處にあるものを注意深く見て行つた。五六步過ぎて、二人とも懷中から手帳と鉛筆とを出して別々に、通りがかりに見辨けた品物をどちらが澤山書くか競爭した……私の子供は屢々四十個位の品物を書き記した……。」斯の特殊な教育の目標は、劇場か何かの中で、子供が一瞥して全看客の身に着けてゐるあらゆる品物を見てしまひ得るやうにする事なのであつた、でその時、目隱しされてゐながら見えるやうな振をして、看客の一人が隨意に選んだ物を、父親の與へる合圖にしたがつて、詳しく言ひ當てたのである。此子供の視覺記憶の發達は眞に驚くべき程だつたので、或書庫の前に立つた數瞬間の後、彼は隨分多くの書物の標題と、その一々の正確な位置とをば覺えてしまつた。謂はば、彼は全

景の心的寫眞を撮つたので、之によつて次にその部分を直ぐ思ひ出せたのである。しかし、最初の練習に於いて既に、ドミノの點を算へさせぬその事に於いて、吾人は斯の記憶教育の根本手段を押へるのである。視覺寫象のあらゆる解釋が視覺行爲から排除されてゐた、知性が視覺寫象の平面へ引き降ろされてゐたのである。

之を聽覺寫象或は發聲運動の寫象の平面へ降ろす事が同じやうな記憶を耳に與へる爲に必要である。外國語教授法の色々ある中にプレンダアギャストのそれがあり(五)、その原則は屢々利用されてゐる。それは初めから文句を發音させるのであるが、學ぶ者がその意味を知らうとするのを許さぬ事に基礎を置いてゐる。決して各語を離さない、恒に首尾ある命題を機械的に反復さす。若し學ぶ者が意味を知らうとすれば、結果は獲られない。若し些でも躊躇すれば、また初めから遣り直す。語の位置を易へ、各句間に語を交換して、謂はば、意味が自ら耳に明らかとなるやうにする、知性の容喙を許さない。その目的は記憶の瞬間的且容易な喚起を得る事に在る。そしてその手段は精神をば、出來得る限り、音なり發聲運動なりの間に展舒させて、感覺と運動との平面外に在る更に抽象的な諸要素の介入を防ぐ事に存する。

故に或複雜な追想を喚起するに際しての難易はその諸要素が意識の同一平面に自ら展開しようとする傾向の强弱に正比例する。そして事實、之は各人が自分自身に就いて觀察し得る事なのである。學校で習つた詩の一編が記憶に殘つてゐるとしてみよう。それを吟ずると、語が語を喚ぶのであつ

て、その意味の反省が喚起の機構を援助しないばかりか却つて之を妨害する事に氣付く。斯の場合、追想は聽覺的或は視覺的であり得る。しかしそれは常に、同時に、運動的である。その上、耳の追想であるものと發聲運動の習慣であるものとを區別するのはなか〳〵容易でない。吟誦を中途で止めると、「不完結」の感情を經驗するが、それは時として一編の殘りがまだ記憶の奥で唱はれてゐて盡きぬからのやうに思はれ、時には發聲運動の餘勢が終りまでその跳躍を進めて行かうとしてゐるからのやうにも感じられ、また時にはそして最も屢々この二つともによつてであると考へられる。しかしこの兩群の追想――聽覺的追想と運動的追想と――が同じ層階のものであり、等しく具體的であつて、等しく感覺と境を接してゐる事は注意されねばならぬ、既に使つた表現をまた藉つて言ふならば、これ等は同じ「意識平面」に在るのである。

之に反して、想起が努力を隨伴するならば、精神は一の平面から他の平面へ動いてゐる。瞬間的な想起を目標としない時には、どうして諳記するだらうか？ 記憶術の諸書がその方法を說いてゐる、しかし吾々自身も亦自分でそれを知つてゐる。先づ文章を注意深く讀む、次にその內部構造を考へて、之を節なり段なりに分ける。斯うして全體の表式的概觀を作る。さて、此表式の內に最も著しい諸表現を挿入する。支配概念に從屬諸概念を、諸從屬概念にその主要的代表諸語を、この諸語にそれ等を結ぶ中間の諸語を、鎖のやうにそれぞれ結び着ける。「記憶師の才能の基く處は一個の文章のうちに於いて、獨りで能く數頁を展開し得るやうな若干の顯著な概念、幾らかの鎖

句、諸單語を把握する事に存する(六)」と或書には記されてゐる。また他の書に掲げられた法則には、「短い且つ實質的な述べ方に還元する……、各述べ方のうちに於いて暗示的單語に注意する…、此等の單語を互に繋ぎ合はせてさうして概念の論理的連鎖を形成する(七)」とある。故に茲では最早、機械的に、各々がその後へ來るものを惹起せねばならぬやうにして、寫象を寫象へ繋ぎ合はすのではない。多數の寫象が唯一、單純であつて分割し得ない表象に壓縮されるやうな立場へ既に來てゐる。斯の表象が覺えられるのである。そして、想起すべき瞬間が來れば、人は斯のピラミッドの頂點からその底邊の方へまた降りてゆく。すべてが唯一表象の中に壓搾されてゐた高層面から、次第に低く、次第に感覺へ近くなる諸平面へ移つて行くのであるが、其處では斯の渾一的表象が種種の寫象となつて分散され、諸寫象は展開して言語となる。尤も斯の想起は最早、直ぐにも容易にも起らない。それには努力が隨いてゐる。

この第二の方法を採ると、想起には無論時間を要するが、習得は長くかからない。屢々指摘されたやうに、記憶をより完全にするといふ事は、單なる覺える力を增す事よりも、寧ろ概念を分割し、調整し、連繋する術をばより巧妙にする事である。ウイリアム・ゼエムズが例に擧げてゐる布教師は最初三四日かかつて一つの說教を諳記した。その後二日で濟むやうになり、次に一日となり、終には、唯一回、注意深く且つ分析的に讀むだけで充分となつた(八)。進步は茲で明らかにあらゆる概念、あらゆる寫象、あらゆる言葉を唯一點へ向けて集結する能力が增大した事に外ならぬ。それ

はすべての通貨の基礎となる唯一原型を獲得する事に在るのである。

此原型は何だらうか？　如何にして斯やうに多數の色々の寫象が暗示的に單一表象のうちに含蓄されるのだらうか？　此點に就いては後で述べたい。今はただ雜多の寫象に展開し得る單一表象にそれを識別さすに足るやうな名稱を與へるだけにして置かう、希臘語の助けを藉りて、それを「シエマ・ヂナミク」動的表式と呼ぶことにしよう。その意味は此表象が諸寫象自身よりも寧ろそれ等を再現する爲に取るべき處置の指示を含んでゐるといふ事である。それは諸寫象の抽象ではない、この各々を貧弱にして獲られるものではない、若しさうなら多くの場合に於いて、この表式から種種の寫象が全體的に導き出される理由がわからなくなつてしまふ。それは亦、或は少なくともそれは單に、諸寫象の總體が意味するところのものの抽象的表象でもない。意味の概念が其處に多分に入つてゐる事は疑ひを容れぬ、しかし、寫象自身から完全に離れて了つた時に寫象の意味といふ此概念が何になるか甚だ曖昧である上に、論理上の同じ意味が全然別個の諸寫象の系列に屬し得る事、したがつて之のみでは特に斯くゝゝの寫象の系列をば他のすべてを排除して吾人に再現さす爲に充分でない事も亦明らかである。斯の表式といふものは非常に定義し難い、しかしその感じは誰でも持つてゐる、そしてその性質を理解するには記憶の色々の種類、殊に技術的若くは職業的諸記憶を互に較べて觀れば宜い。茲ではそれを詳述するわけにいかぬ。ただ將棋家の記憶は、最近、殊に周到に且つ透徹して研究された事があるから(九)、之に就いて二三言述べてみたい。

將棋家の或人々が數局を同時に盤面を看ずに差し得るのは周知の事である。その對局者の一人の差す手毎に、傍の人が動いた駒の位置をば告げる。すると彼等も自分の駒を動かさず、斯うして、「目を瞑つてゐて」差しながら、心の中で何時もすべての盤面に動いてゐるあらゆる駒の相互の位置を想ひ浮かべてゐて、かなり差す人々と對局し、數局とも同時に勝つ事が珍しくない。知能を扱つた名著の誰もよく知つてゐる一節で、テエヌはその一友人に敎へられた知識によつて斯の能力を分析してゐる(十)。彼によると、茲にあるものは純粹に視覺的な記憶である。この將棋家は絶えず、謂はば自己内部の鏡の上に、各盤面とそのあらゆる駒との寫象をば、今差した時の狀態に於いて視てゐるのである。

しかるに、ビネェ君が「目を瞑つてゐて對局する人」の幾人かに就いて行つた調査の結果極めて明白な一個の結論が獲られたやうに見える。それは盤面と駒との寫象が、「鏡上に映されたやうに」、そのままに記憶へあらはれて來るのでなくて、却つて各瞬間に於ける將棋家の努力によつて作られるものだといふ事である。この努力は如何なるものだらうか？　如何なる諸要素が記憶中に實際在るのだらうか？　此點に關する調査の結果は眞に意外なものであつた。尋ねられた將棋家の人々は一致して駒そのものを心の中で視る事は有害無益であると初めから斷言した、一々の駒に就いて彼等が把握し表象するものはその外形ではない、却つてその能力と、その影響し得る範圍とその價値と、そしてつまりその作用となのである。一の道化駒は多少とも奇妙な格好をした一の木片ではな

い、それは「斜めに行く力」なのである。望樓駒は何か「一直線に進む」勢力である。騎士駒は「歩兵約三個に相應し且つ極めて特殊な規則に隨つて動く駒」なのである。その他の駒も皆以上のやうに考へられる。さて對局に就いては以下の通りである。將棋家の精神に在るものは諸勢力の布置、或は更に的確に言へば敵若くは味方の諸强間の關係なのである。彼は盤面變化の徑路を初めから心で遣り直してみる。現在の局面へ導いて來た次々の諸事件を考へ直す。斯うして全局に就いての一表象を獲得し之によつて、任意の瞬間に必要な諸要素をば視象化する。尤も此抽象的表象は渾一のものなのである。それはあらゆる要素の互に相透徹したものを含む。その證據に、各對局は各自にそれぞれ特有な相貌を以つて將棋家にあらはれて來る。それは彼に一種獨特の印象を與へる。「私がそれを把握するのは音樂家が一の和絃をその全體に於いて把握するのと等しい」と尋ねられたうちの一人は言つてゐる。そして斯の相貌の相違によつてこそ數個の對局を混同せずに覺えてゐられるのである。故に、茲にも亦、全體をあらはす一の表式がある、そして此表式は拔萃でも綱要でもない。それは一旦再生された寫象と同じやうに完全なのである、しかしそれは相互的含蓄の狀態に於いて、寫象が一々差別して展開するものをば含んでゐるのである。

一の簡單な追想を苦辛して思ひ出す時の努力を分析してみよう。出發點となる表象内には極めて種々の運動的諸要素が互に透徹しながら含まれてゐると感じられる。斯の相互的含蓄、隨つてまた斯の内部的複雜性は表式的表象にとつてなければならぬものであり、實にその本質なのであるから、

たとへ想起すべき寫象は簡單であつても、表式は甚だ簡單でない事が多い。その例はちやうど近くに在る。先頃、此論文の構想を書いてみて參考書目を作りながら、今先刻その直覺的方法に就いて引用したブレンデルギャストの名を記さうと思つたのである、尤も此著者の書いたものは以前記憶に關する他の多くの書と共に讀んだ事があつた。併し此名も思ひ出せねば、初めてそれの引用されてゐるのを見た書物も憶ひ浮かべられなかつた。此容易に出て來ない名を想起しようとして種々試みた事の經過を私は注意して觀たのである。先づ朧氣に殘つてゐた一般的印象から出發した。それは奇異なものの印象であつた、しかしただ何か奇異なものといふだけでもなかつた。野蠻、掠奪の感じ、猛禽が自己の餌食と狙ふものに襲ひかかつて、之を攫み搏ち、之を引浚つて遙かに飛んで行くといふやうな感情が基本的な調子としてそのうちに入つてゐた。今から思ふとプランドル（捕る、奪ふ、取る）といふ言葉が求める名の初めの二音綴で略あらはされてゐるから、之が私の印象のうちに多分に入つてゐたに違ひない、しかし此類似だけで、斯樣に的確な色合ひの感情が起り得るとも稍考へ難いし、また現在「ブレンデルギャスト」に想到する時「アルボギャスト」の名がきつと執拗に隨いて來る事を思ひ合はせると、恐らくは取るといふ一般的概念とアルボギャストの名とが私のうちで一緒に融け合つてゐたのでないかと想像される。此第二の名は、私が羅馬史を習つた時代に覺えたもので、いつも何か漠然とした野蠻的な諸寫象をば記憶のうちに起こす。しかし之もはつきりとは言へない、確言し得ることはただ私の精神のうちに殘つてゐた印象が全く一種特別のも

のであつた事と、そしてそれが、萬難を突破して、固有名詞に變化する傾向を持つてゐた事とだけである。此印象によつて記憶へ回つて來たものは主にデとエルとの二文字であつた。しかし此等が歸つたのは視覺或は聽覺の寫象としてではなく、また既に形成された運動の寫象としてでさへなかつた。此等は主に求めるところの名詞の發聲運動へ到達する爲に採るべき或努力の方向を指示するものとしてあらはれて來たのであつた。私は此等の文字を名の首に來るものと思つたがそれは間違ひだつた、ちやうど方向を示すやうに見えた處から然う思つたのである。此等にいろいろの母音を交る交る接けてみたら、最初の音綴を發音出來るだらうし、さうしたらその勢に乘つて語の末尾まで達し得ると考へた。この操作は果して成功したらうか？　それはわからぬ、しかしそれがまだ幾らも捗らなかつたうちに突然心に浮かんだのは此名がケェの記憶教育に關する書物の註に引かれてあつた事と、そして私が初めて此名を見たのは其處でだつたといふ事であつた。で早速調べてわかつたのである。或は斯の有用な追想が突然出て來たのは偶然の結果かも知れぬ。しかし或はまた表式を寫象へ變化さす爲に行はれた操作が目的を行過ぎてしまつて、寫象自身の代りに、最初その周圍にあつた諸狀況をばこの時喚起したのかも知れない。

これ等の例に於いて、記憶の努力の本質は、單一ではないにしても少なくとも集結された表式をば、各別のそして多少とも互に獨立の諸要素から成り立つ寫象に展開する事に在るやうに思はれる。努力しないで、記憶をその彷徨に任してゐる時には、寫象は寫象に繼いで起こり、すべて皆同一意